
いちばんうしろの
大魔王
ACT4
水城正太郎


いちばん・うしろの
大魔王
ACT4


阿九斗様！
そんな忌まわしい力まで
使おうというのか！


――僕は、
神を……殺す。


待っていた！
この時を待っていたぞ、主よ！

いちばんうしろの大魔王
ACT 4

水城正太郎

HJ文庫

口絵・本文イラスト　伊藤宗一

目次


登場人物紹介
ころね
阿九斗の監視と護衛を行なう人造人間。ポシェットから秘密な道具を取り出し使用する。
曽我(そが)けーな
落ちこぼれな天然少女。阿九斗に懐いている。物語の鍵を握る人物？
紗伊阿九斗(さいあくと)
将来「魔王」になると予言された「善良な」主人公。膨大な魔力を有するが融通が利かない。
学院長(がくいんちょう)
コンスタン魔術学院の学院長。謎多き老人。魔王が起こした前大戦の経験者。


江藤不二子（えとうふじこ）
阿九斗に忠誠を誓った黒魔術師にして薬物使い。阿九斗たちの先輩で女子寮長を勤める。
服部絢子（はっとりじゅんこ）
阿九斗のことが気になる一途で純情なクラス委員長。伊賀出身の忍者娘。
リリィ白石（しらいし）
コンスタン魔術学院生徒会長。帽子がトレードマーク。阿九斗と魔王の件に関して独自路線を歩む。
三輪寛（みわひろし）
阿九斗の弟分を名乗るトラブルメイカー。伝説の勇者という顔も持つ。

紗伊阿九斗（さいあくと）は小さな頃（ころ）から世間とのずれを強く感じていた。
彼（かれ）は孤児（こじ）である。それだけでも周囲とうまく馴染（なじ）めない性格に成長する可能性は高いが、阿九斗の場合はもっと根本的な性格に由来するものだった。

あるとき、阿九斗のいた孤児院に施（ほどこ）しにやってきた紳士（しんし）がいた。家柄（いえがら）も申し分なく、経済的に豊かであることは身なりからもわかったが、それを鼻にかけるような態度は微塵（みじん）もなかった。言葉遣（ことばづか）いから自然とわかる性格も優しさにあふれており、孤児への施しは彼にとっては、とても自然なことのようだった。

「通りかかった者ですが、偶然（ぐうぜん）、ここを孤児院と知りました。そうと聞いては、いてもたってもいられませんで。ご迷惑（めいわく）でなければ、少々の寄付をお受け取り頂きたいのですが」

帽子（ぼうし）をとって微笑（ほほえ）んだ紳士に応対したのは阿九斗だった。早熟だった彼は、年齢（ねんれい）のわりに利発な子とみなされていて、先生が忙（いそが）しい際の応対などを任されることが多かったのだ。

「ありがとうございます。おじさま。本当に深く感謝します。係の者がご寄付はお受け取りいたしますので、少々お待ち下されば呼んで参ります」

阿九斗はお仕着せの言葉でなく、自分の言葉として感謝の意を述べた。紳士はまだ幼い阿九斗がすらすらとそのようなことを口にしたので、いたく感心したようだった。

「驚（おどろ）いた。なんときちんとした子だろう。では君に直接受け取っていただこう。係の方には、君からわたしてくれたまえ」

紳士は孤児院の扉を叩く前にすでに用意していたのか、内ポケットから出した白い封筒を阿九斗に渡した。受け取った封筒は重たく、そこにかなりの額が入っていることがわかった。阿九斗が驚きの表情を見せると、紳士は優しく微笑んでうなずいた。

「ありがとうございます。何もお返しできませんが、せめて孤児院の皆から直接の感謝を述べる機会をお与え下さい。中にお入りになってお待ちくだされば、皆を呼んで参ります」

阿九斗は深く頭を下げた。

「いや、それには及ばないよ。コ＝ロ神の信者として当然のことをしたまでだ。感謝もわたしでなく神に行ってくれたまえ」

紳士は謙遜したように言うと、帽子をかぶりその場を去ろうとした。

「待ってください。僕は神に感謝するより、あなたに感謝したいのです」

阿九斗は言った。

紳士は足を止めて、穏やかな表情で帽子の縁をなでた。

「そうではないよ。私は何もしていない。神の慈悲だよ。神が私がこの場に足を向けるように導いてくださったのさ」

紳士のその言葉は照れ隠しではなく、深い信仰心に根ざしたものであることは、口調からすぐに知れた。

　これがありふれた子供を相手にした会話だったならば、ただの良い話として孤児院の皆に記憶されたに違いない。

　しかし、対話の相手は阿九斗だった。

「神はシステムでありそれに感謝することは、あなたの優しさを打算へと変えてしまうことになります。ですから神への感謝は僕にはできません。ただあなたの優しさに感謝させてください」

　阿九斗は言った。彼は確かにその年齢にしては利発すぎたのだった。

　確かに、この時代において神とは、人々の行いを記録し、それに応じて社会サービスを与える管理システムにすぎない。

　しかし、人々は日々の行いを記録されている以上、よりよい生活を送るために〝正しい〟規範に沿った行動を送る必要があった。そのことが、かなりの教養人をしても宗教的な熱狂や盲信を引き起こすことになっていた。宗教心は理性ではコントロールできないものなのかもしれないが、阿九斗にはそれはよく理解できないことだった。

「失礼なことを言うもんじゃない！　罰が当たるぞ！　神が実在して、それが意志を持っている以上はそれに感謝して畏れるのが当たり前じゃないか！　そこに信者同士の連帯も生まれるんだから。ほら、神様に謝りなさい！」

　紳士は感情的になって阿九斗に迫った。

　阿九斗には紳士の考えはまったく理にかなったものに思えなかった。

「まさか。実在しないものには謝れません」
「なんて子だろう！　まったく末恐（すえおそ）ろしい！　神に背こうだなんて！　そんなことだから孤児になってしまうんだ」
紳士はさげすんだ目で阿九斗を見た。
阿九斗にはショックだった。さげすまれたことそのものよりも、いい人であろうことは疑いない紳士が、そのように差別的なことを口にしたことが恐ろしく感じられたのだ。
「あなたは人間が作り出したシステムにすぎないものを信じ込むあまりに本当に恐ろしいことを口にしているのに気づいていないのですか？」
阿九斗は震（ふる）える声で言った。
「いい加減にしたらどうだ！　みんなが信じているのだからそれでいいだろう！　大体、金をめぐんでやろうという者に逆らうのか！」
紳士がそう怒鳴（どな）る頃、異変に気づいた先生たちが阿九斗を引き下がらせた。先生たちはひたすら頭を下げ、どうにか寄付をせしめ、他の孤児に歌を歌わせるなどして紳士を気分良く帰らせることに成功した。
ため息をついた男の先生の一人が、苦笑いとともに阿九斗を見て、どこか面白そうにこう言った。
「ねぇ、君、自分が正しくても頭を下げなきゃならないことってのもあるんだぜ」

先生は意味が通じないだろうと思って言ったのだろうが、阿九斗は完全にその言葉の意味を理解し、それでも首を横に振（ふ）った。

「僕は生涯（しょうがい）そうならないようにします。要は偉（えら）くなればいいのでしょう？　その程度のことで正しいことができるなら、それほど簡単なことはありません」

先生は目を見開いた。

「それなら大物になるといいさ。でも、そんなに簡単には……」

その先生の言葉がどこか遠くから聞こえてくるように感じられて、阿九斗はようやくそれが夢であることに気づいた。過去のことを思い出していたのだ。

1　誰かが誰かを狙ってる

阿九斗はうんざりした気分で目覚めた。

――まったく、僕もあんな嫌なことを思い出さなくてもいいだろうに。

美形ではあるが人の悪そうな顔立ちである。それがしかめっ面を作ると誰も近づきたくないような顔になる。

もっともその顔を親しくない者に見られる気遣いはなかった。この『コンスタン魔術学院』は長期休暇中で寮にはあまり人は残っていない。うたた寝をしていた寮の裏庭の木の下には阿九斗一人しかおらず、見上げると高くなりはじめた空を鳥がのどかに飛んでいるばかりだ。

――嫌な予感のひとつもないような陽気だ。こんな時にあんなことを思い出しているなんて、僕はよほどひねくれ者らしいや。

阿九斗が自嘲して笑ったとき、遠くで声がした。

「あーちゃーん！　こんなところにいたんだ」

満面の笑みで駆けてきたのは曽我けーなだった。何も悩みがないような表情だ。頭頂部で何房かのまとまった赤毛が揺れている。それを見ているととても深刻な気分にはなれない。けーなは阿九斗の脇にち

ょこんと腰(こし)掛(か)けた。
「特にすることもなかったから、外にいたくてね」
「そうなんだ」
　けーなが何か言いたげにしていたので、阿九斗は水を向けてみる。
「どうしたの?」
「うん。えーとね、あーちゃん、自分の誕生日って知ってる?」
「孤児だったからね。適当に決められたのがある。捨てられていた日だね。十二月二十五日ってことになる」
　阿九斗はそう言って、けーなも孤児だったことを思い出していた。孤児でない者には話しにくい話題だったが、その点、けーなに対しては気楽に言えた。
「そうなんだ。あたしはわかんなかったから、自分で自分の誕生日を決めたんだよ」
　けーなはそう言ってから、急にもじもじとしはじめた。
「どうしたの?」
　再び阿九斗が聞くと、けーなは照れたように笑ってから言う。
「あのね、もし誕生日が来たら、一緒(いっしょ)にお祝いしてくれる?」
「それはもちろん」
　阿九斗が当然のことうなずくと、けーなはほっとしたように肩(かた)の力を抜(ぬ)いた。

「よかった。だって、自分で決めた誕生日だもの。ほら、あたし、勝手にいろいろ考えちゃうでしょ？　だから、あきれられちゃうんじゃないかって」
「僕はもう君には十分にあきれたよ。はじめて逢ったときから」
　阿九斗は肩をすくめた。
「えー？　ひどいよ」
「だって、勝手に僕の監視員だって言い出してさ」
「だってさ、あーちゃんに逢うまで、あたし、寂しかったんだよ？　それに、あたしが、あーちゃんのことを見てるのはホントだし……」
「何日？」
　阿九斗は聞いた。
「え？」
「だから、誕生日」
「え、えっとね。もうすぐなんだけど、そのときになったら言うね」
「それじゃ、一緒にいられないかもしれないじゃないか」
「だったら、毎日一緒にいてくれればいいでしょ？」
「また勝手なことを言うね」
　阿九斗がため息をつくと、けーなは何かを振り切るように首を振った。

「ね、ねぇ、あーちゃん！　こんなにいい天気だよ！　なにかして遊ぼうよ！」
　そう言われると阿九斗もむげに断ることはできない。いや、以前だったら断ったかもしれないが、今は、不思議とけーなといると安らぎを感じるようになっていた。
「遊ぶって言っても、僕ははしゃぐのは得意じゃないよ。でも、ゲームくらいなら付き合わないでもないけど。何をするんだい？」
　阿九斗が聞くと、けーなは元気よく答える。
「昼寝（ひるね）しよう！」
「え？　昼寝？　僕はさっきまで寝ていたばかりで……」
　そう言った時には、すでにけーなは阿九斗に寄りかかって寝息を立てていた。
――ある意味、すごい才能の持ち主だね。
　阿九斗はけーなを起こさないように静かにしておくことにした。生徒手帳を取り出し、図書館機能を起動。マナのスクリーンを胸の前に投影（とうえい）して気になった本を読みはじめる。大昔の宗教学の本が何かを教えてくれるような気がしたのだが、読んでも自分が考えるための示唆（しさ）は得られても、あの紳士が何かを考えてくれるようになるための方法はまるでわからなかった。
――考えることが独りよがりなことにしかならないなら、考えない方がいいのかもな。けーなみたいに。
　阿九斗は本から目をあげて、顔の近くで揺れていたけーなの髪（かみ）の毛（け）を指で弾（はじ）いて遊びはじめた。
「いやいや、そこは苗（なえ）の生育には適していません。それよりも……」

けーなは真面目な口調でわけのわからない寝言を言った。

阿九斗はどういうわけかわからないが、こんな瞬間が二度と来ないような気がした。ほんの五秒前のことが懐かしくなるような、そんな変化が襲ってきそうな予感に頭の芯がしびれたようになってしまった。

――神に祈れない僕は、けーなを信仰しているみたいだ。まるで。

○



スハラ神は平たく言えば国粋主義者のための神である。国を防衛する軍事力は大別すると騎士団と帝国軍に分けられるのだが、このうち帝国軍はスハラ信者のみが所属することを許されている。
スハラ神は、規律、家柄、誇りを守ることに熱心で、勇猛な行動をとる者に対し、強力な攻撃魔法を行使する許可を与える。そのためスハラ信者には、礼儀正しく家庭的だが融通が利かない乱暴者という評価を一般に受けやすい者が多い。

信者たちの最高位に当たる大司祭は現在、照屋敬三という男が務めていた。照屋は、以前に阿九斗を悩ませた照屋栄子の父親である。諜報任務を主としてきた照屋家は、対外的な戦争が何年も起きていない時代になって力を伸ばし、陸海軍を統括してきた名家を謀略によって追い落とすことで権力を握ることに成功していた。要人警護を任務とする服部家とは最後まで大司祭の座を争ったが、直接に皇帝に仕える服部家はすでに名誉を与えられているとの判断から、最終的に照屋家に実利が与えられた格好になったのだ。

照屋敬三は、卑怯で邪悪な行為を誇り高く堂々と行うことができる希有な男だった。敬三によって追い落とされた者たちもその点だけは認めていたほどである。彼は、悪びれることも、迷うことも、快楽に酔うこともなく、盗みや暗殺を行えた。大司祭となってからも、直接にその手で人を始末したことは一度や二度ではなかった。

いつしか彼の顔には邪悪な影が貼りつくようになり、それは誰の目にも感じられたが、逆に表情だけは年を追うごとに穏やかでほがらかになっていった。今では、和服に身を包んで居住まいを正した敬三は、ど

う見ても邪悪なのに、聖人としか感じられない奇妙な存在となっていた。

その敬三が珍しく緊張した面持ちでいた。いつも笑ったような目が、今はつり上がり鋭い光を放っていた。

敬三が居るのはスハラ神の神殿である。帝都の外れにある静かな森の中の広大な神社だ。鳥居をくぐると瓦葺きの雄壮な社殿がある。中に入ると本殿の御簾が開かれており、そこに御神体である神木が鎮座していた。神木は人間ほどの大きさの切り株で、編んだ籐の上に座っている敬三の正面に突き立っている。それこそがスハラ神が人間と接触するときのデバイスであった。今、本殿には敬三以外の者はいない。神との直接対話の場なのである。

「本当にこの者なのか?」

敬三が探るような声をあげた。

すると、神木の後ろから、するりと二人の巫女が歩み出てきた。彼女らは瓜二つの美しい顔をしていた。それが左右に分かれ、敬三の右前、左前に立つ。

「それがスハラ神の判断です」

「最終的な判断はお任せします」

彼女らは人造人間だった。神と人との間の会話がうまくいかない場合、それを補佐する目的で置かれている。役職の上では、彼女らは大司祭よりも上位にある司教である。もっとも、それは名目上のことだ。

大司祭だけが神の設定プログラム自体を変更する権限を有している。基本的には神よりも大司祭の方が上位にあるのである。
　しかし、スハラ神の場合だけは、他と違う事情がある。
「本当にこの者を暗殺しろと？」
　敬三は再度聞いた。
　反逆行為が確定した者の情報がスハラ神により大司祭に提示されることがあるのである。神は大気中に満ちているマナを通じて人間の行動を監視している。そのため、証拠が確定した反逆者については、その証拠と居場所が大司祭に送られることになっている。
　このシステムはもちろん一般人は知らないし、知っている政府高官の間でも非難されることも多かったが、その功績は彼らも認めざるを得なかった。帝国への反乱が大規模になる前に防ぐことが可能になっていたからだ。
「暗殺しろとは言っていません」
「しかし、この者の反逆は決定事項です」
　巫女たちは揃って声をあげた。
「しかし、証拠がない」
　敬三を緊張させていたのはそこである。反逆者とされた相手の居場所はデータとして受け取った。しかし、その罪状と証拠が出てこないのである。

「証拠は公開できません」

「大司祭に対してもです」

敬三はその宣言の異常性をひしひしと感じていた。さすがに大司祭ともなれば、神とはシステムにすぎないことをよく理解している。

——解除コードを使うか？

敬三は大司祭の権限を使うべきか悩んだ。解除コードを使用すれば、神のプログラムを書き換えることが可能になる。万が一、スハラ神が狂ってしまったとしてもそうすれば対処できる。

——しかし、神の判断をおれの意志で覆したと司祭どもに非難されかねない。それに、ここでシステムの異常が発見されたとなれば、これまでの暗殺も間違いだったことになる。

神が提示するのは反逆者の情報だけである。それを殺すか捕らえるかは大司祭の判断に任されている。そして敬三は暗殺を好んできた。大司祭になる以前の司祭時代に、政敵を欺いて反逆させ、それを証拠に殺すなどもしてきた身である。ここで間違いを認めてしまうようなことがあれば、身の破滅に繋がりかねない。

——いつもなら軍の特殊部隊を使うが……ここはおれの私兵だけでやるか。

「それならば、このデータはおれが預かる。以後はおれが判断する」

敬三は言った。巫女たちはうなずく。

「わかりました。お願いします。しかし」

「そのデータの取(と)り扱(あつか)いによっては、大司祭といえど帝国への反逆とみなされる」
「そういうこともあることをお忘れなく」
巫女は言葉を継(つ)ぎながら敬三の前をくるくると回った。
――なんだと？
そのような脅(おど)しなどこれまではなかった。いや、神のシステムとしてあり得ない。考えられるとすれば、すでに神が自由意志のようなものを持っているという可能性だけだ。
「待て、そんな脅しを……」
敬三は言ったが、すでに二人の巫女はスハラ神の背後に引っ込んでしまっていた。そしてスハラ神は何も言わなかった。
「どちらにせよ、殺す。そうするつもりではあった」
敬三はスハラ神に宣言するように言って立ち上がった。
――意志が芽生えている……？　いや、まさか……。いずれにせよ、この件を片づけてから司祭たちにスハラ神の異常を別件として公開することとしよう。所詮(しょせん)は小娘(こむすめ)一人の命にすぎない。すぐに片づく。
敬三は、眼前に浮(う)かんでいる、データが表示されたマナスクリーンを指で弾いて秘匿(ひとく)扱(あつか)いとした。そこには満面の笑みの赤毛の少女と、その名前が映し出されていた。
「曽我けーな。聞いたこともないな。娘(むすめ)と同じくらいの年齢(ねんれい)か。可哀想(かわいそう)だが」

○

照屋家とは対立関係にある服部家。その長女である絢子は独り深刻に悩んでいた。

――どうすればいいんだ……。まさに一生解決できない難題を抱え込んでしまったとしか思えない……。

手の中にあるのは連絡装置としても使える生徒手帳である。その画面には実家からのメールが表示されている。件名は「見合いの準備は整った」。

――すでに見合いの準備ができているということは、父上に話が通っているということで、これはもう後には引けないということで……。

絢子は寮の裏庭の林の中に潜んでいた。林の木に同化するマナスクリーンを身体の前に立てており、どこから見てもちょっとやそっとでは見つからない完璧な隠れぶりだった。

その絢子の視線の先には、居眠りをしているけーなと、その横で本を読んでいる阿九斗の姿がある。

見合いの相手というのは阿九斗である。絢子は何もしていないのだが、ころねが早々に服部家と話をつけてきたらしい。

ころねは、将来魔王になるとされている阿九斗の監視役として政府から派遣されている人造人間である。複雑な政治の裏事情にも通じているらしく、魔王として阿九斗を処分せよという強硬派に対抗し

て、名家である服部家に婿入りさせるという解決策を提示したというのが絢子がメールを受け取るまでの経緯である。

――メールの文面からすると父上は上機嫌だ。政略結婚ではあるが服部家の女は色恋ではもっと悲惨な道を歩むことになっていた。それに比べれば人並みの幸福が手に入る、などと書いてある……。妹もどうやら重荷が下りたような気楽なことを言っている。家の存続が私に任せられたのだから、これまで通りに好き勝手にやれて嬉しいだろう。それに私もどちらかといえば嫌ではない……。だが、問題はひとつ……。

問題というのは、阿九斗にはまったく話が行っていないことである。見合いの日は迫っている。絢子からそれを告げなくてはならないのだ。

――ど、ど、どうする？　見合いの日にちが決まった、とか言えばいいのか？　いや、言えばどうなる？

――「見合いの日にちが決まった」「え？　誰のだい？」「わ、私とお前のだ！」「ちょっと待ってくれよ。それは僕の意志を確認しないで決まったってことかい？　僕には自分の意志がないみたいな言い方をしないでくれよ。そういうことだけは君もわかってくれてるって思ってたのに……」。そんな文句を言われるに決まってる！　それじゃあ、どういう言い方ならいいんだろう？　こんなのか？

――「私と結婚してくれ！」「ちょ、ちょっと待ってよ。僕らそんな年齢じゃないだろう？　からかってるのかい？」。これも駄目だ。結婚というのが最初に来るとよくない。そ、そうだ。相手の気持ちを確かめないと。

――「私の事は好きか？」「もちろん。服部さんはちゃんとしているし、いつも信頼しているよ」。そうだ、あいつはそういうヤツだ。これも駄目だ。結局なんと言えばいいのだ？　いや、そもそも私の気持ちが問題なのではないか？

――「好きだ。愛している。私の旦那様になってくれ」。いやいやいや。言えるものか、そんな言葉！　それに、私は本当にそう思っているのか？　私はあいつとどうしたいと思っている？　傍にいたいとか、見ていたいとか、そういう程度のことだったのではないのか？　それにもしもあいつの心が他の女にあるとしたら、自分はそれでも……。

――「そんなに悩んでいるなら、こちらから伝えましょうか？」

――いや、けじめというものもある。そういうわけにはいかない。

「そうですか」

――そうだ。って、どうして私の考えに割り込んで来る者が……！

「声を出していましたよ。隠れていても無意味でしたね」

「そ、そうなのか？　いつから聞いていた？」

「奇怪な独り芝居をはじめたあたりからです」

「え……？」

絢子が横を向くと、そこに女性から見てもはっとするような美少女の顔があった。ころねである。無表情で絢子を見ている。ここで絢子の頭が瞬間的に冷えた。ぼんっ、と音を立てて顔を赤くして絢子はうず

くまってしまう。
「ひ、人の心を覗くヤツがあるか！　なんという屈辱か……！」
「だから声に出していたんですよ。大丈夫です。情報は秘匿します。任務にも関係することですし」
「ほ、本当か？」
　絢子はほっとして顔をあげる。
「本当です。性欲を隠したくなることは人間の特徴のひとつだとよく理解していますので」
　ころねは平然とそう言い放つ。
「せ、せいよく？　ば、馬鹿っ！　結婚とは神聖なもので……。そもそも、政略結婚みたいなものじゃないか！」
「それならば簡単に阿九斗さんに告げられるはずです。結果、断られたとしても、政治的な判断であることを告げれば、彼も考え直してはくれるでしょう」
　ころねの言葉が正論なので、絢子は言葉に詰まった。こう言われては、自分から阿九斗に告げるしかなくなった。追いつめられてしまったわけだ。
「そ、そうだな。うん、今、私もあっちに行こうと思っていたところだ」
　絢子は偽装を解いて歩きはじめた。
　しかし、さっきまで阿九斗たちのいたところには誰もいなかった。

「ちょ……いなくなってしまった。こ、これでは言うのは明日に延ばすしかないな。うん、仕方ない。そうしよう」
　絢子は棒読みでそう言い、くるりと反転。
　と、そこにころねの顔が待っていた。
「どうやら、けーなさんの目が覚めてお腹がすいたと言い出したらしく、食堂にご飯を食べに行っています。この紗伊(さい)阿九斗探知装置が居場所を食堂だと告げています」
　ころねが妙(みょう)な形の機械をかかげた。
「なんかえらく都合のいい機械だな……」
　絢子はぼやいた。だが、そのころねの言葉には嘘(うそ)はないだろう。
　ころねは、ずい、と絢子に顔を近づけて言った。無表情なだけに質が悪い。
「食堂です」
「わ、わかった！　行けばいいんだろう、行けば！」
　絢子は大声で言い、寮内(りょうない)の食堂に足を向けた。学園に残っている生徒がろくろくいない上に本来の食事時間でもないため、がらんとした食堂には阿九斗とけーなしかいない。阿九斗は横に長いテーブルの真ん中あたりで、小型スクリーンの本を読んでおり、けーなは食堂の端(はし)にある炊飯器(すいはんき)から直接に白米をかきこんでいる。どうやら阿九斗とだけ話をするのは今が好都合だ。

阿九斗が気づくようにわざと足音を立てて、絢子は食堂を横切った。恥ずかしくてとても阿九斗の顔は見られそうもないので、横を向いたままテーブルの真ん中に向かって進んでいく。適当に阿九斗に近づいたとおぼしきあたりで声をあげた。

「なあ、明後日、ちょっと付き合ってはもらえないか？　いや、なに、簡単なことなんだが、少し実家に用があってな。一緒に来てもらえないかということだ。変な意味じゃない。その、純粋に政治的なことというか、父上や一族の者が会いたいということでな。家は遠い上に宴席を用意させてもらうゆえ、すまないが泊まりになってしまう。家は広いので問題はない」

「ちょっと待ってください。いったいどんな用事なんです？」

「いや、それは来ればわかる。政治的なことだ。だが発展的な話ではある。だから大丈夫だ。困ったことにはならないぞ。時間をもらう分、宴席は盛大にさせてもらう。私の故郷の伊賀の食事はうまいぞ」

「はぁ。それはいいんですが、あっしが行くとはどうしても思えないんですが」

「いや、君の話だ。君が来てくれないと……って、え？」

絢子はここではじめて正面を見た。そこに立っていたのは、同級生のヒロシだった。小柄でいまだにいたずらっ子の印象を残している少年だ。

絢子は周囲を見回した。気づかないうちに阿九斗の脇にヒロシがやってきていたらしい。

「それって、アニキのことでしょう？」

　ヒロシは絢子の間違いに気づいて、にやにやとした顔を作った。そんな顔をされては、絢子としては意地でも間違いを認めるわけにはいかなくなった。
「そ、それはそうだ。確かに私が言っているのは、紗伊阿九斗のことだ。だが、お前に言ったことも間違いではない！　お前も来い！　にぎやかしにはなる」
　絢子はヒロシを指さして怒鳴る。
「そんなこと言わないでくださいよ。あっしだって忙しくてですね」
「どこが忙しいか。同じ学生の身で」
　絢子が不機嫌そうに言うと、ヒロシは困ったように頭をかいた。
「いや、そうっすよね。そうなんすよ。はは。別に忙しくはなかったっすね」
「何だ、妙なヤツだ。さて、わかったか、お前」
　絢子は阿九斗に顔を向けた。
　阿九斗も会話を聞いていたようで、絢子の妙な態度に戸惑いつつも、逆らうことは得策でないと思ったのか、本から顔をあげて硬い表情でうなずく。
「いや、まぁ、わかったけど。明後日？　急だね」
「い、いや、本当はもっと前にわかっていたのだが、言いそびれ……。いや、そんなことはいいんだ。ともかく、飛行バスを出してもらっている。明後日の朝には迎えに来るから、一緒に来てもらう。ヒロシ、お前もだ！」

絢子は早口で言う。
「いや、やっぱりあっしは関係ないんじゃ……」
ヒロシは納得していない様子だが、絢子はヒロシにきつい目を向けた。
「私が阿九斗だけを誘っているわけではないということだ！」
「わ、わかったっすよ。そんな意地を張らなくても……」
「何だ？」
「いや、いいっすよ。わかったっす」
ヒロシはあきらめたように言うと、阿九斗の隣に座った。
「それでいいんだ。明後日だからな！」
絢子はそう言い残すと、食堂を出て行く。
とりあえず最低限の仕事は終えた、と胸をなで下ろしている絢子である。
そんな絢子を食堂の戸口から見ていたころねが、絢子とすれ違いざまにぽつりと言った。
「監視員である自分も同行しますが、問題ないですよね？」
絢子は声も出さずに切れた。

○

同じ頃、学園の地下では不気味な光景が拡がっていた。江藤不二子は手にしたマナ光のオレンジ色の円に浮かんで見えるそれに身体を震わせていた。

どこまで深いかわからない黒い液体の池の表面に、油脂のぎらつきを表面に浮かべた板状のものが浮かんでいた。それは明かりに気づいているのか、まるでまぶしいとでもいうようにぬるりと液体の中にもぐった。かわって剛毛の生えた棒状のものが液体の中からぬっと突き出される。続いてそれを押しのけるように鱗の生えたかぎ爪の手が横合いからかぶせられた。かなり大型の生物がうごめいているのだ。しかも昆虫、ほ乳類、爬虫類までもが混在しているようだった。

「魔獣……！　しかもこんなに……！」

不二子は唇に手を当てて驚きの声をあげた。

魔獣はこれまでも突然に出現し、人間社会に危害を加えてきた。彼らはマナを体内に取り込んで異常をきたしてしまった人間以外の生物である。多くの場合、害獣として駆除される運命である。研究機関などが、マナが生物に及ぼす影響を調べるために人為的に作り出すこともあったが、もちろん魔獣を飼うことは禁じられている。一般的な認識において、おぞましい外見になりがちな魔獣はどんなに弱いものでも忌み嫌われる対象でしかない。今、液体の中から次々と姿を現しつつある魔獣たちも、巨大なムカデや牙の長い類人猿など一目見ただけで夢に出てきそうな化け物たちである。それがこの伝統ある『コンスタン魔術学院』の地下において、このような形で見つかるとは。

「……なんて素敵なんでしょう！」

不二子は歓喜をその顔に浮かべていた。瞳にはハートマークまで浮かんでいる。不二子は、長い黒髪と切れ長の目という外見と違わず、黒魔術師としての誓いを立てているのである。

彼女がここに来た理由は、一週間ほど前のことがきっかけだ。臨海学校で阿九斗の遭遇した事件において、不二子は阿九斗の体内のマナによる波動が魔獣を活性化させてしまうという事実を知ったのだった。おまけにそれによって活性化した魔獣は限定的ながら知能を持ってしまうという。阿九斗に心酔する不二子は、このことを阿九斗に伏せておくことに決めていた。

――とてもお優しいあの方のこと。これをお知りになったら、各地で迫害される魔獣を保護するため、魔獣に強化のためのマナを分け与えてかなりお体に無理をさせてしまうはず！　そうなる前に、わたくしが魔獣を制御する方法を見つけてみせますわ！

不二子はそう決意していた。本当のところ阿九斗の性格なら魔獣についての責任を感じて自分を責めていたはずだが、そんなことは不二子には関係ない。

「これでわたくしが制御方法を見つければ、阿九斗様もわたくしに感謝し、こう言ってくださるはずですわ！　さぁ、一緒に世界を二人のものにしてしまおう……って。そして阿九斗様はわたくしを抱きしめてくださって……そうそう、こんな風に……って？」

不二子はまさに自分を抱きしめようとする手に気づいて空想の世界から我に返った。身体に、にゅるにゅるとした触手が巻き付いていた。

「ひぃいぃいやぁあああ！　にゅるにゅるがぁあ！」

触手はピンク色で何かの粘液（ねんえき）で全体が濡（ぬ）れていた。どうやら貝類の魔獣らしい。不二子に巻き付いている太い一本の触手の根本は巨大な貝殻（かいがら）になっていて、そこから複数の細い触手と目玉のついた触角が二本伸（の）びている。触手のあるカタツムリといったところか。それならば太い触手は足代わりということになる。

「な、なんで服の中に入ってくるんですのぉおおお！」

触手は器用に不二子の身体を上ってきて先端部（せんたんぶ）を制服の胸元からしゅるりと内側に滑（すべ）り込ませている。


PuPuPuPuPu

「いやぁああ！　器用にホックを外さないでぇええ！　ひっ、こら！　前に回ってこないでぇええええ！」
　不二子は触手をはがそうと手を伸ばす。なんとか触手を握（にぎ）るところまではいくものの、粘液ですべるそれはぬるりと手の中を逃（のが）れてしまう。
　触手の主は、触角の先の目でいやらしく笑う。魔獣にしては多少の知恵（ちえ）があるらしいが、どうも困った方向に知能を進化させたらしい。
「ひっ、ふっ、ふあっ、いやっ！」
　触手は不二子を抱え上（あ）げるようにしてその身体を宙に浮かせる。そして細い触手が今度は不二子の両足に一本ずつからみつく。
「ちょ、ちょっと……それはやりすぎ……」
　触手によって不二子の両足が大きく拡げられ、その格好のまま空中に静止させられる。
　巨大カタツムリはますますいやらしい目つきになると、細い触手を一斉（いっせい）に不二子のスカートの裾（すそ）に向けて伸ばしていく。
「てめぇ、こらぁ！　やりすぎだって言ってるだろうが！」
　すると不二子が豹変（ひょうへん）した。
　鬼神（きじん）のごとき表情になると、ポケットから素早く薬瓶（びん）を取り出し、巨大カタツムリに素早く投げつける。触手の一本でそれを軽々とはたき落とした巨大カタツムリだったが、落下した薬瓶がいきなり爆発（ばくはつ）す

る。
　その爆発は小規模だったが、巨大カタツムリが驚いて触手を引っ込めるには十分な衝撃だった。その自由になった一瞬の間に、不二子は巨大カタツムリを見下ろす位置に立っていた。
「雌雄同体の分際で、エロとは見上げた根性だな！　焼いてガーリックパンと一緒に食ってやるからそこを動くんじゃねぇ！」
　不二子の指の間にはいくつもの薬瓶が挟まれている。
　巨大カタツムリは触手を縮め、怯えた目で不二子を見上げた。
　爆発する薬瓶に怯えているというよりは、それを構えている不二子の形相に怯えているようだった。触角の先の目玉をしゅんとさせ、触手を「ごめんなさい」というようにすりあわせている。
　不二子は巨大カタツムリの殻に片足を乗せてグリグリとやる。
「わかればいいんですのよ、わかれば」
　しかし、踏まれて巨大カタツムリは心なしか喜んでいるような目つきになっている。しかも、触角の先で足をあげた不二子のスカートの中を下から見上げていた。
　不二子は巨大カタツムリのその目つきに気づく。
「まだわかってねぇのか！」
　巨大カタツムリは蹴り飛ばされ、今度こそ完全に降伏したらしい。平身低頭して不二子に向かって上下に触手を振りはじめた。

ようやく不二子の鬼の形相が柔和なものになる。
「それでも、妙に嬉しそうですわね」
不二子はつぶやいた。どうやら巨大カタツムリは美女に蹴られて嬉しがるタイプらしい。
「魔獣といっても、こんなのばかりですの？」
背後を振り返って不二子は声を上げる。と、闇の中からそれに答える声があった。
「こんなものばかりではないさ。こいつが特殊な性癖なのだろう」
巨大カタツムリがいきなりかぎ爪でつまみ上げられた。何が起こったのかわからない顔でいた巨大カタツムリだが、振り返った先を見て目の色を変えた。
そこには体長十五メートルはあるドラゴンが、つまらなそうな表情でたたずんでいたのである。
身体は金属光沢を持つ黒い鱗で覆われている。かぎ爪も口元から覗く牙も完全に戦闘用のそれであり、全身から立ちのぼっている威圧感は並ではない。
黒い龍、ピーターハウゼンはつまんだ巨大カタツムリを、彼らが本来いたプールの中に放り込んだ。
「こんなのというが、私がいなければ、君が制することが出来るのは巨大カタツムリくらいだぞ」
ピーターハウゼンが示したプールからは何匹もの魔獣が外に出てこようとしていた。いずれの獣も敵意に満ちているように見える。今、彼らが飛び出してこないのはピーターハウゼンが控えているからだということも不二子にはすぐ理解できた。
「これは……？」

　不二子がピーターハウゼンに聞く。
「彼らは自分より強い者には刃向(はむ)かわない。基本的には動物だからな」
「その動物が、どうしてここにこんなにいるんですの？」
「ここはマナの影響を遮断(しゃだん)する液体に満ちたプールだ。可哀想(かわいそう)にかなりの寿命(じゅみょう)を持ってしまった魔獣を眠(ねむ)らせるための場所だ」
「かなりの寿命……？　すると先代の魔王がここに残して？」
「そういうことだ。今までもたまに目覚めてしまうヤツはいたが、現在の主が目覚めつつある今、彼らも本格的に活気づいてきた」
「では、わたくしも危なかったわけですわね」
「最初に襲(おそ)ってきたのがあれでよかったな」
　ピーターハウゼンがプールから再び出てこようとしている巨大カタツムリを指さした。
「ではあの巨大カタツムリに感謝してせいぜい便利に使ってあげることにしますわ」
　不二子は言った。とにもかくにも幸運を喜ばないわけにはいかなかった。魔獣が学園の地下迷宮に時折出現することは以前から有名で、最深部に何か魔獣についての手がかりがあるとは思っていたが、これは狙(ねら)い以上だ。ピーターハウゼンは最初から事実を知っていたようだが、過度に干渉(かんしょう)をすることを避(さ)けているようで、自ら行動を起こして確かめていかないと、説明もしてくれない。地下迷宮の最深部に入るのは不二子といえどピーターハウゼンのサポートがないと危険だったが、わざわざ来ただけのかいはあった。

「しかし、あいつ以外は本当に使えそうですわね」
　不二子は笑みを浮かべる。
「というと、どうするつもりかね？」
　最初から答えを知っているかのようににやりとしながらピーターハウゼンは聞いた。
　不二子はさらに笑みを凶暴なものにする。
「阿九斗様は魔王として魔獣を完全に制御することはできていないのでしょう？　それならば、わたくしがそれを制御するための方法を見つけて差し上げますわ」
「今まで、魔王以外の誰も魔獣を制御することはできなかったのだぞ」
「それは、わたくしのような者が魔王の傍にいなかったからでしょう？　それに魔獣を単なるマナのバグによるものだと考えてきたことも研究が進まなかった原因。阿九斗様の固有の波動による活性化という法則性がわかった以上、研究は加速度的に進むはず。それに、あなたも協力してくださるのでしょう？」
「やれやれ、どうしてそう思うのかね？」
「あなたが干渉を避けているのは、阿九斗様が自らの意志で目覚める必要があるからでしょう？　その周囲に居る者への干渉は、阿九斗様の自由意志に影響を与えない程度で行いたいはず」
　不二子とピーターハウゼンは笑みをかわした。
「ほぼ正解だな。ただ干渉を避けている理由はそれだけではないよ。もちろん、まだそれを告げるわけにはいかないが」

「陰謀がお好きなのかしら？　そうね、わたくしもそれは大好きですわ」
「ははは。陰謀というには少々大きすぎてね。君たち人間の理解を超えることになるかもしれないが」
　ピーターハウゼンは器用に片眉だけをあげてみせた。

○

　けーなは相変わらず炊飯器からごはんをかきこんでいる。絢子がいなくなってしまって、手持ちぶさたになってしまった阿九斗とヒロシはそれを眺めるともなく眺めている。
「アニキ、けーなちゃん、いつまで食べるんですかね？」
「さぁ？　あれでもゆっくり味わっている方だしね。量だけなら炊飯器みっつくらいは食べられるみたいだから、ひとつしかない炊飯器を大事に大事に食べているということだよ」
「すごいっすねぇ……」
　ヒロシは感心してうなずいた。
「……それより、なんなんすかね、委員長？　あっしも委員長の家に行ってもいいんですかね？」
「さぁ？　でも、彼女が成り行きっぽくとも約束したのは確かだしね。僕も一人で行くよりは心強いよ。どうも政治的な話らしいし……。それより大丈夫なの？　君は最近、疲れているみたいだけど？」
　阿九斗はヒロシを見返した。

ヒロシの顔色は悪かった。ただ、病気というわけでなく、寝（ね）ておらず、体力を使う仕事を連続して行っているような雰囲気（ふんいき）である。

「だ、大丈夫っすよ。なんでもないっす」

ヒロシは手を振って否定し、さらに誤魔化（ごまか）すようにマナスクリーンを拡げてテレビ放送をつける。

「なんでもないならいいんだけどさ」

阿九斗はヒロシを見やった。とても疲れているようだが、一方でその口調や目の輝（かがや）きからは確かな充実（じゅうじつ）感が見て取れる。そういえば、阿九斗には最近のヒロシが少し変わってきたように思えていた。以前から明るく人なつっこい性格をしていたが、ここのところはそれに自信が加わったように思える。

「でも、なにか変わったよね？」

阿九斗が聞くと、ヒロシは照れたように笑った。

「いやいや、そんなことないっすよ。ただ最近はアニキの気持ちが少しはわかるようになったかな、なんて」

「僕の気持ちが？」

「ほら、あれっすよ、人のために役に立ちたいとか、そういう感じのアレっすよ」

「そう言われても、僕にはわからないよ」

阿九斗が笑いかけると、ヒロシはどういうわけか赤くなって顔を逸（そ）らし、テレビ放送を指さした。

「ほ、ほら、今人気のアイドル、星野（ほしの）ゆりちゃんの生レポートっすよ」

画面では小柄な美少女がにこやかな顔で手を振っていた。どうやらどこかの地方で行われているイベントのレポートであるらしい。星野ゆりというアイドルの背後には、広告のパネルとテントが交互に並んでいる。企業がらみの展示会のようだ。

「人気あるんだ？」

その手のことには疎い阿九斗がつぶやく。

「そうっすよ。ちと遅れすぎですよ、アニキ。彼女は歌手で、女優で、おまけに軽妙なトークも得意とあって、デビューからあまり経っていないのに、あらゆる分野でトップに立ってしまったんですよ」

ヒロシがやや興奮気味に解説する。

「そんな凄い子なんだ。でも、どこかで見たような……」

阿九斗は首をかしげる。顔にはまるで見覚えがないが、どうも知り合いのような気がしてしょうがない。

「嫌だなぁ、アニキ。そりゃ彼女を気づかないうちにテレビで見てたってだけっすよ」

ヒロシが肘で阿九斗をつつく。

「それもそうか。まったく、僕も間抜けだな」

阿九斗がそう言って笑うのと、画面から悲鳴が聞こえてきたのが同時だった。

驚いてそちらに目をやると、イベント会場では人々が悲鳴を上げて逃げまどっていた。カメラマンも焦っているらしく、画面はぐらぐらと揺れて空と地面を交互に撮影している始末だったが、そのちらつく画面

には人間以外の黒い影が時折よぎっているのがわかる。
「魔獣？」
　ヒロシが声をあげた。
　次の瞬間、カメラがとらえたのは確かに大きな鳥形の魔獣だった。しかも彼らは複数おり、無軌道に人やテントを襲っているようだ。
「大変なことになってるじゃないか！　あそこはどこなんだ？」
　阿九斗が聞くと、ヒロシが画面を覗き込んで答える。
「あれは湾岸にある浮島っす。あっしも行ったことがあるんですが、マナで浮遊しているイベント専門の会場で、飛翔魔法が使えない限りは、逃げられないっすよ！」
「事故用のボートとかはあるんだろう？」
「あるけど事故用っすよ。並んで乗り込む分には数分で逃げられると思いますが、あんな風に襲われているとなると、かなりの数は犠牲になってしまうっす！」
「騎士団は？」
「出動するとは思いますが、飛翔できるのは軽騎士ですから……」
　ヒロシのその言葉を証明するかのように、画面内に飛翔してきた騎士数人の姿が現れた。人々は助かったと歓声をあげたが、彼らの魔術や銃器は魔獣に通じなかったようで、簡単に魔獣たちにたたき落とされている。

「まずいじゃないか。重騎士ならなんとかなるのか？」

「いや、出動までに時間がかかるっす。飛行揚陸艇で乗り込まなくちゃいけないわけですし……」

ヒロシはそう言ってから、どういうわけか困ったように阿九斗の顔を見据えた。

「あ、アニキ……俺……いや、あっしは、ちょっとここで用事を思い出したんですが……」

「え？」

こんな時に妙なことを言うものだと阿九斗はヒロシを見返すが、ヒロシは大真面目な顔をしていた。そしてさらに妙なことを言う。

「こ、この後、すごく残酷なことになるかもしんないっすから、テレビは見ない方がいいっすよ！　ほ、ほら、テレビ消すっすよ」

ヒロシはマナスクリーンを消して、その場をそそくさと出て行く。

――なんだろう？

阿九斗は首をひねったが、ある意味ではとても素直な性格である彼は、ヒロシの言葉に従ってテレビをつけることはせずに、走っていくヒロシの背中をただ見送った。それでも事件について情報を得ず、何もしないでいるというのは気分が悪い。阿九斗は立ち上がって、けーなにちょっと外すと呼びかけてから、実家には帰っていないはずの生徒会長に話を聞きに行くことにした。

○

外に飛び出したヒロシは、周囲に誰もいないのを確認すると、手首につけたブレスレットを顔の前にかざした。そして一言。

「ブレイブ」

　すると、ブレスレットから機械的な声が流れはじめる。

《コマンド認証。ユニット起動します。次元断層発生。使用者より五センチ以内の空間にある異物を排除》

　続いて、ドン、という音とともに、ヒロシの身体の周囲を光が覆った。

《ようこそブレイブ。ユニット本体転送。転送に0.2秒を要します。転送終了。電装系正常。生命維持装置正常。外気循環モード選択。核融合エンジン起動は思考入力を行ってください》

　その声が終わる以前に、ヒロシの身体は完全に身体を覆うスーツをまとっていた。口のあたりがむき出しになったヘルメットの他はぴったりのライダースーツをつけているようにも見える。

　それはこの時代にあっては珍しく、動力をマナに頼らないスーツであった。ヒロシの実家に奇妙な経緯で伝えられた対魔術戦闘用装備である。ヒロシの意志に応えて機能し、凄まじい戦闘能力を発揮する。

「地図を。現在地を表示して」

　ヒロシがつぶやくと、ヘルメットのバイザーに画像が浮かぶ。

「一分、いや、三十秒以内に到着したい」

スーツに身を包んだヒロシは、軽く地面を蹴っただけでふわりと宙へ浮かぶ。と、一気に加速してたちまち高空へと舞い上がり、そこから水平飛行に移った。

地図の表示された光の点はするすると目標である浮島に近づいていく。

魔獣が阿九斗の体内波動に反応して活性化すると知ってから、ヒロシは密かに魔獣を狩る活動を開始していた。そうすることが阿九斗のためになると思っていたわけではないが、続けていれば何か事態を改善することができるような気はしていた。それに、まだ活動をはじめてわずかしか経っていないが、魔獣退治の謎のヒーローの噂は人々の間で囁かれるようになり、それはヒロシの耳にも直接聞こえてきている。自分が人の役に立ち、まさにヒーローとして活躍することは、喩えようのない快感だった。

幸い、正体はばれていない。このスーツは違法である。活動を続けるためには、正体を隠しておくことが必須なのだった。それに、このことは阿九斗たちには完全に秘密にしておきたかった。

浮島が見えてきた次の瞬間には、すでにその上空に到着していた。眼下に拡がる広場に幾人もの人々が見える。逃げまどっているというよりは、多くの人々はぼんやりとしているようにヒロシには見えた。非常口と脱出ボートの周囲で逃げる順番を待っているのか、小さな集団を作って魔獣がこちらにやってこないかと目で追うことしかできないようだ。

軽騎士も抵抗してはいるが、どちらかと言えば自らの身を守ることに汲々としているようだった。それでも魔獣の注意をひきつけようと、魔獣に接近しては離れ、接近しては離れを繰り返している彼らの姿は、真剣な表情でいたずらを行っているように見えた。

「魔獣の位置を確認、以後、追尾。高周波ブレードを使おう」
　ヒロシは言った。右手の甲についたハンドガード状の装備から、するりと爪状の刃が伸びる。それを軽く振ると、ヒロシは重力に任せて降下を開始。凄まじい速度にまで加速すると、その勢いのまま一体の魔獣にぶち当たる。
　大型の鳥の魔獣は、今まさに軽騎士の顔面をかぎ爪で握りつぶそうとしているところだったが、その動きは上空からの落下物が近くを通過した瞬間にぴたりと止まる。
　恐怖から戸惑いに軽騎士の表情が変化した。かぎ爪の手によってふさがれていた彼の目の前の視界が不意にひらけたからだ。
　魔獣の身体が正確な直線で縦に三分割されていた。魔獣は咆えることもなく、血と羽毛をはらはらと散らして落ちていく。
　その上空での出来事に人々はすぐに気づいた。
「あれは……！」
「噂のブレイブ！　魔獣退治のブレイブ！」
　誰かが声を上げたのをきっかけに次々と歓声があがる。
　ヒロシが下の人々に向けて軽く手を振ると、ヒロシよりもずいぶん年嵩の男女が顔を子供みたいにほころばせて手を振り返してきた。

心の底からわき上がってくる新鮮な喜びにヒロシは身を震わせたが、うっとりとして無駄にしていい時間はない。バイザーに映し出される周辺地図に表示される魔獣を示す光点を確認し、近場のもう一匹の背後に一瞬にして回り込むと、高周波ブレードでこれもあっさりと切断してしまう。そして魔獣の骸が下に落ちる間に次の標的に向かっている。その素早さと見事な切り口によって、ヒロシのスーツは少しも血に汚れることはない。

魔獣もヒロシにターゲットを絞ったようで、ヒロシの周囲に次々と集まりはじめる。ヒロシが三匹目を始末したとき、周囲は魔獣の作る円に囲まれていた。十メートルほどの距離をおいて鳥の魔獣は旋回を開始する。

「囲まれた。下の人たちを巻き込むわけにいかないから爆発系の装備は使えない。同時攻撃を避けられるかどうかかか」

ヒロシはつぶやく。

その危惧を野性的な勘で察したのか、魔獣たちは回転の半径を一斉に狭めた。鋭いかぎ爪とクチバシが三百六十度あらゆる角度からヒロシを襲う。

「単分子カッター転送」

《了解。単分子カッター転送》

スーツの左手に鈍い光が宿る。それと魔獣たちがヒロシを上下左右から取り囲んでその姿を外側から見えなくしてしまったのが同時だった。

下から見上げていた人々の顔が一瞬（いっしゅん）にして曇（くも）り、驚（おどろ）きとも絶望ともつかないどよめきがわき起こる。

しかし、その直後に人々が見たのは信じられない光景だった。

ほぼひとつの球のようになっていた魔獣たちの塊（かたまり）の真ん中がぱっくりと分割されたのである。飲み薬や景品に使われる球形のカプセルは真ん中から分割できるようになっているが、まさにそれと同じように割れた、のである。

「単分子カッター。はじめて使ったけど……」

ヒロシが驚きと少しの恐怖に声を震わせた。

スーツの左手の指先からかすかな輝きが線となって前方に伸びている。その線の先には、指先から分離（ぶんり）した爪のような小さなユニットが浮遊している。ユニットと指の間には、分子ひとつ分しか太さのないワイヤーが張られており、それは鋭い刃先（はさき）と同じ意味を持っているのだ。

集まった魔獣は、それによってあっという間に切り裂（きさ）かれたわけである。

《単分子カッター他物質の吸着により劣化（れっか）しました。指示のない場合、廃棄（はいき）します》

スーツの電子頭脳が語りかけてきた。切れ味は鋭いものの、どうやら鈍ってしまうのも早いらしい。

ヒロシは身体の上から雨のように降ってくる魔獣の骸を避けつつ、魔獣の残りを確認。あと一匹だ。単分子カッターの廃棄を指示すると、それはどこかへ瞬時（しゅんじ）に消え去ってしまった。どうやら、このスーツ自体が別の次元に本体を持っており、装備から動力に到（いた）るまで、そこから転送されてくるらしい。廃棄も同様のようだ。

最後の一匹はすぐには目視できなかった。とにかく光点の場所に急ごうとするヒロシを一層の歓声が讃えた。見上げている人々は最後の一匹がまだ存在していることに気づいていないのだ。

最後の光点は宣伝用テントの張られた通りを奥に行ったところだった。ヒロシは高速でそこを通り抜け、目視できなかった理由を理解する。突き当たりは倉庫になっていた。どうやら、その中に魔獣がいるのだ。

中で展示も可能になっているらしく、かなり大型の倉庫だった。搬入用の大きな扉は閉ざされていた。人が通るための扉もあるが、地上に降りてそこを使うよりは飛びながら窓を破った方が早いとヒロシは判断する。

直下に人がいないのを確認すると、開閉部のない窓を割って中に躍り込む。

状況はすぐに理解できた。倉庫に逃げ込んだはいいが、運悪く発見されてしまった者が一人いたのだ。積まれた箱によって迷路のようになった通路を目で追うと、その先にある扉に魔獣が突き破ろうと体当たりを繰り返しているのが見えた。扉は鉄格子でできており、どうやら中に人が立てこもっているらしい。そこは管理人詰め所のようだ。逃げ込んだはいいが、外からは丸見えだし、行き止まりになっていてどうにもならなくなったというところか。

ヒロシは魔獣の背後に接近すると、魔獣が気づいて振り返る暇も与えずに、高周波ブレードで両羽根を胴体から切り離した。鳥の形状であるから、人が通るための扉を攻撃している最中だとしても、姿勢の

維持は羽根で行われている。魔獣はぼとりと床に落ち、奇怪な声を上げてもがいた。ヒロシはそれをブレードを突き立てて楽にしてやる。

「ふう」

ヒロシは魔獣の骸をまたぎ、扉を開けようとして思わぬ抵抗にあった。まだ扉の中の者はパニック状態であるらしい。必死の声が外に漏れてくる。どうやら若い女性のようだ。ヒロシは安心させようと声をかけた。

「大丈夫ですよ。もう魔獣は退治しました」

扉を押さえていた力が、ふっとゆるむ。ヒロシがノブをひねると、女の子が中から転がり出てきた。

ヒロシは彼女を見て驚く。テレビで見たアイドルの星野ゆりだったからだ。

星野ゆりは、ヒロシの姿を認めてから、安心したように大声で泣きはじめた。

「う……うわぁああ！　怖かったよぉ！」

その泣き声は凄まじいものだった。さすがに助けたヒロシも驚いたほどで、ヘルメットの音量を調節しなければならないほどだった。それでも……。

――ホントに可愛いなぁ……。

ヒロシは星野ゆりに見惚れていた。

ゆりはしばらくして泣き終わって、ヒロシの姿を上から下まで確認する。

「助かったよ！　ありがとう。私、ホントに魔獣が苦手なんだ！　あなた、最近有名なブレイブでしょ？　ねぇ、あなたホントにカッコイイね！」

いきなりゆりがヒロシに抱きついてきた。そして、さらに驚いたことに、ヘルメットで覆われていないヒロシの唇にひょいとキスをしたのである。

――うわっ……。

ヒロシは驚きに思わず背筋を伸ばしてしまう。そしてゆりの身体が離れてから、改めて彼女の姿を確認した。

ヒロシより小柄で、顔立ちも少し幼いが、それでいて内面からはち切れんばかりに吹き出している圧力のようなものには他人を思わずひれ伏せさせてしまう大人びた匂いがある。表情はいたずらっぽく、油断していると何か仕掛けてきそうで周囲を安心させない空気を醸し出している。それらがあいまって、どこにいても彼女が中心で場が回ってしまうだろうと思わせる少女だった。

「秘密だよ」

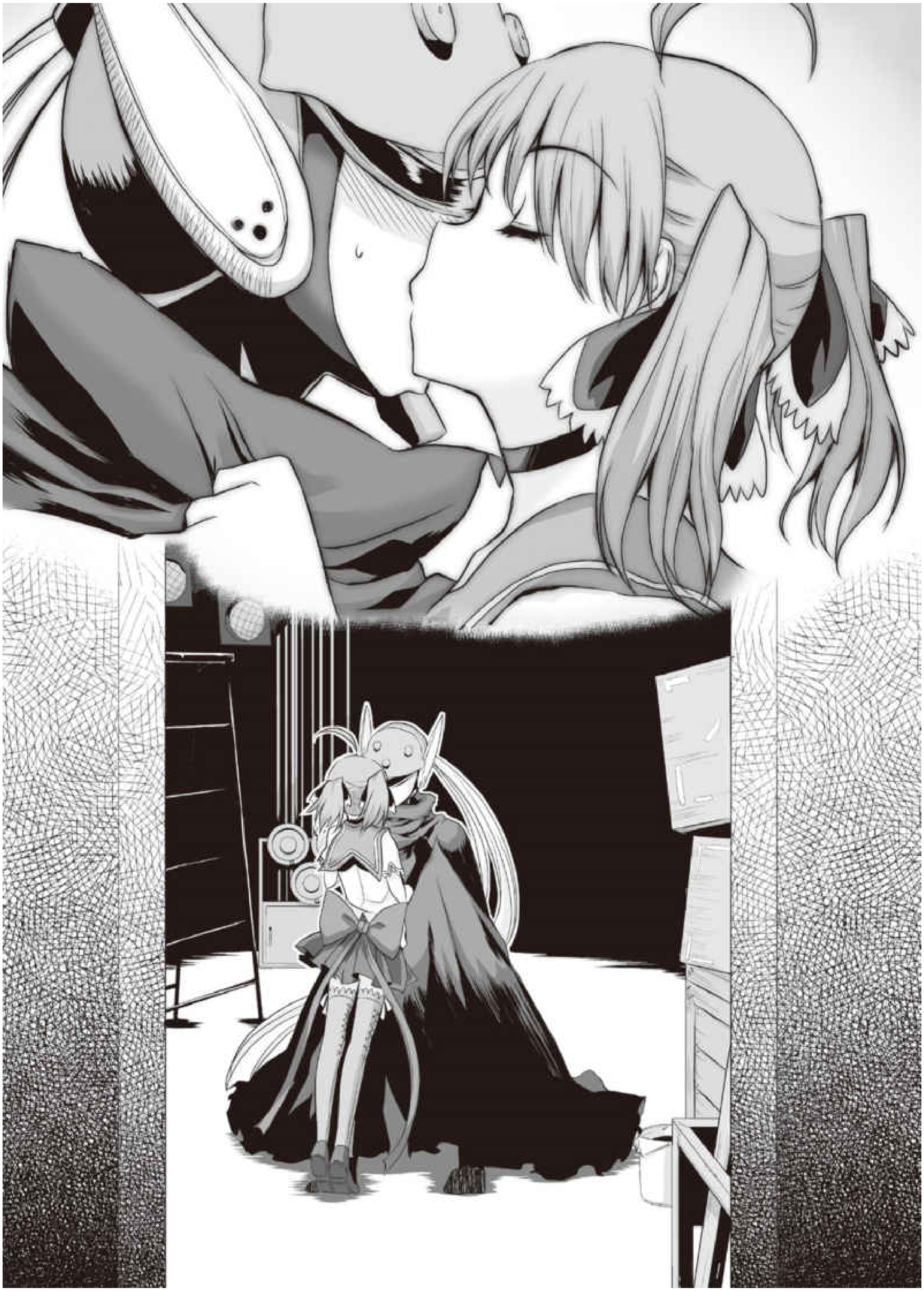
ゆりは自分の唇に指を当てて、片目を閉じてみせた。

その時、倉庫の大きな扉が開いて、中に騎士団がぞろぞろと入ってきた。ヒロシは振り返らず、バイザーの映像でそれを確認すると、少しだけ格好をつけてゆりに言う。

「それなら俺のことも秘密だ。そろそろ騎士団も俺の正体を知りたがっているらしい」

「そうなの？　でも私にだけは教えてよ！　秘密にするから。こっそり会いに行きたいんだ！」

ヒロシは正直なところその誘（さそ）いに乗りそうになったが、なんとか無言を貫（つらぬ）くことに成功した。ゆりに手を振ると、飛び上がって騎士団に向かっていく。騎士団の面々もヒロシを捕（と）らえようと飛び上がったが、ヒロシのスーツの飛翔速度についていけず、ヒロシはあっという間に倉庫の扉を抜けて外へ。人々の拍手（はくしゅ）と歓声に応えて上空を旋回すると、追尾をかわすためにさらに高空へと舞い上（あ）がり、人々の前から姿を消した。



○

阿九斗が外に出て行ってしまった後の食堂で、ごはんを食べ終わってしまったけーなは、今度は眠（ねむ）くなってしまい、阿九斗の部屋で一眠（ひとねむ）りしようと食堂を出た。

と、けーなは足を止める。寮（りょう）の廊下（ろうか）に白い服の男が立っていたからだ。

長身でスタイルは完璧（かんぺき）。男性にしてはやや長いが整えられた髪（かみ）。涼（すず）しげな目元の端整（たんせい）な顔。女性なら誰（だれ）でも彼の前に出たら舞い上がってしまうであろう美形だ。年齢（ねんれい）はけーなと同じか少し年嵩に見える。

彼はけーなの姿を認めると、静かに会釈（えしゃく）をして歩み寄ってきた。

「んー？」

けーなは首をかしげる。見覚えがなかったからだ。

「こんにちは」

丁寧（ていねい）に挨拶（あいさつ）をされたけーなは、こちらも深々と頭を下げる。

「こんにちわ。どちら様でしょう？　どのようなご用で？」

けーなが聞くと、彼は少しだけ表情を曇らせた。が、それが気の迷いであったとでも言いたげな様子で笑みを作ると、服の内ポケットから手帳を取り出した。

「内閣府職員の者です。この学校に用事があって来たんですが、少し道に迷ってしまいまして」

　けーなは開いた手帳の中のバッジを確認した。豪華だから本物なのだろう、くらいの感覚で納得する。

「どちらに行かれたいのですか？　案内いたしますよ」

　けーなの言葉遣いはいつもと違っていた。その様子で、またも男は顔を曇らせた。

「警備責任者にお会いしたいんですが」

「わかりました。うちは専門の職員でなく、生徒会がそれを行っていますので、生徒会室へご案内いたします……どういたしました？」

　けーなが男の様子に気づいて顔を覗き込む。

　男はけーなの目を見返し、まぶしそうに目を細めた。

「いえ、あなたを見ると、少し懐かしいような、そんな気がするんです」

「素敵なことをおっしゃるのね。でも、お会いしたこと、あったかしら？」

「さてね。私の名前は望一郎。大和望一郎というのです」

　けーなは再び首をかしげた。

「失礼。よくわかりませんわ」

「そうですか」

　ふう、と望一郎は息を吐き出す。

「生徒会室の場所さえ教えて頂ければ、案内は必要ありません。自分で向かいますので」

「そうですか」

けーなは生徒会室の場所を説明した。望一郎は、会釈をして歩き出す。
「ありがとうございました。では、また」
「え？　また会うことがあるの？」
けーなはいつもの口調に戻（もど）っていた。まるで望一郎と面と向かって話している間だけ別の人格が表に出てきたかのようだった。
望一郎は振り返って微笑（ほほえ）む。
「必ず。あなたがあなたである限り、必ず」

○

阿九斗が生徒会室の扉を叩（たた）いたとき、生徒会長であるリリィ白石（しらいし）は室内にいた。机で仕事をしていたのが顔をあげて阿九斗を迎（むか）え入（い）れる。
小粋（こいき）な帽子（ぼうし）をかぶった背の小さな少女である。勝ち気でいたずらっぽい顔で、あまり生徒会長らしさのようなものは感じられないが、人の上に立つのに慣れている立ち居振る舞いは板に付いていた。
「どうしたね？」
リリィは帽子の縁（ふち）を指で跳（は）ね上げて阿九斗を迎え入れ、気楽な顔で聞いた。
「いや、それほど重要な話でもないんですが……」

阿九斗が魔獣襲撃の経緯を話すと、リリィの顔は緊張した。リリィは阿九斗が魔獣を産み出しているようなものであると知っていた。しかし、今、そのことを告げるわけにいかないというのが彼女の判断だった。「それを放置している政府にはそれなりの考えがあるに違いない。だが、その考えとやらの背景にあるものを自力で確かめてやる」と彼女は密かに決意していた。

「それなら、ここで各地の報道でも見ていけばいい。ボクは各局の報道を一辺に見るのが趣味なんだ」

　リリィはそう言って、机の上に手を滑らせる。マナスクリーンが大量に浮かび上がり、それぞれが別の放送を映しはじめた。リリィが例の事件への絞り込みを指示すると、スクリーンの数が減り、二十ほどのスクリーンが例の事件の中継を映し出した。そこではブレイブ＝ヒロシの活躍が繰り広げられていた。二人ともブレイブの正体は知らない。ただ、阿九斗は臨海学校での事件に遭遇しているためいくばくかの引っかかりを感じてはいた。それでも馬鹿正直に人を信じたい阿九斗であるから、なるべくヒロシの不可思議な行動には触れずにおいている。

「このスーツの人物、人気なんですか？」

「ああ。各地で魔獣を退治している。転送なんてマナコストのかかることをできない騎士団では彼よりも早く通報に対処できないらしいね。いつももう少しのところで手柄を奪われて悔しがっているそうだ。そんなわけで、一般人には人気だが、違法だというので騎士団は彼を捕まえようと必死さ。なぜか彼の行動記録は存在しないし、マナをトレースすることもできないらしい。マナキャンセラーでも積んでいるのだろう。そんな違法物、個人で持っていたら重罪のはずだが」

「そうなんですか」
「ああ。ただ、心配なのはこいつが対魔術戦に特化した装備を持っていることだな。今は人々のために働いているつもりのようだが、今後は心配だね。こういうヤツはいわゆるビジランテになりかねない」
「ビジランテ、ですか？」
「自警団というやつだな。正義感が行きすぎると自分で裁きを下すようになる。ボク自身その気が強くてね」
　ははは、とリリィは笑う。
「それなら、どうしてビジランテになってしまうことを警戒するんです？」
「実際、自警団なんて、そう困った存在じゃないさ。でも、自警団が二人いたら大喧嘩だよ、キミ」
　リリィはえらく迫力のある笑顔を阿九斗に向けた。
　阿九斗が言葉に詰まっていると、生徒会室の扉がノックされた。リリィが招き入れると、二人にとっても意外な人物が現れた。
「ちょっといいかね？」
　長い白髪に白髭、もはや年齢など意味をなさなくなっているほどの老人だ。寿命の長いこの時代にあっても最高齢に属するであろう。少なくとも百年以上は生きていることだけは確実だった。前の大戦に参加したことがあるとかつて語っていた。彼こそこの『コンスタン魔術学院』の学長である。
「学長」

リリィ白石が珍(めずら)しく背筋を伸ばして立ち上がった。阿九斗も居住まいを正す。

「本日はどうされたのですか？」

普段(ふだん)ならば学長は姿を現さず、用件は通信で済ませる。そもそも生徒には話す用件そのものがそうはないはずだ。

「近くに寄ったものでな。いや、冗談(じょうだん)だ。ここに古い知り合いが来そうな気がしたのじゃ。そんな夢を見たものでな。いや、これも冗談じゃよ」

学長は笑う。リリィと阿九斗の二人はさすがに笑えない。あまりに食えない老人を見たときには返す言葉はなくなるものだ。

すると、学長は長い眉(まゆ)にほとんど隠れている目を不意に鋭くした。戸口に顔を向けると、そこにはいつのまにやら男が立っていた。

阿九斗もリリィも同時に身体を強ばらせた。その彼の気配が尋常(じんじょう)ではなかったからだ。

男はただ立っていた。しかも表情は穏(おだ)やかである。美形だが、誰でもすぐに気を許してしまうような気さくさがある。それでも、周囲に放たれる圧力に似たものが目に見えるかのようだった。

「はじめまして。だろうね」

その男、大和望一郎は言った。阿九斗はその顔を見返した。望一郎の目は確かに阿九斗に向けられていた。

阿九斗は戸惑いながらも目礼した。

敵意というには穏やかだが、決して温かくはない視線が阿九斗に向けられていた。

と、阿九斗はその顔のことを思い出していた。確証はないが、ピーターハウゼンと出会った時に、不思議な幻覚(げんかく)ともマナ通信ともつかない映像を脳裏に見たことがある。その映像で不二子の兄を殺した男——その顔ははっきりと覚えているわけではないが——から感じた気配にそっくりなのだった。

リリィもそれに気づいたのか、顔色を変えた。彼女も同じ場所に居合わせている。

「さすがにただ者じゃない人ばかりが揃(そろ)ってる」

望一郎は笑顔で言った。

すると、次の瞬間(しゅんかん)、リリィが望一郎に向けて拳(こぶし)を打ち込んだ。彼女は机から身体を動かしてはいない。マナで腕(うで)そのものの組織を伸ばして離れた戸口まで拳を飛ばしているのである。拳は望一郎の顎(あご)に向けて弾丸(だんがん)なみの速度で迫(せま)る。

肉と肉とのぶつかる乾(かわ)いた音が生徒会室に響(ひび)いた。

しかし、リリィの拳が捉(とら)えたのは阿九斗の手の平だった。正確にはリリィが捉えたのではない。拳が放たれた瞬間にはリリィの傍(そば)にいたはずの阿九斗が、拳よりも速く望一郎の横に移動して、リリィの拳を捉えたのだ。

「手ぐらい滑らせてくれよ」

リリィは面白そうな声を出した。顔には笑みが浮かんでいる。

「会長、ここに何の予告もなく学外から入れる方は政府関係者に決まっているんじゃないんですか？　何があったか知りませんが、いきなり殴(なぐ)るなんて、おかしくなってしまったとしか思えませんが？」

　阿九斗は抑(おさ)えた声で言った。

「ボクは正気さ。襟(えり)のバッジを見て内閣府の人間だってことはわかってる。役人を見ると手が滑る癖(くせ)があるだけなんだ。それにこいつの顔を見ろよ、キミがボクの拳より速く移動するなんて曲芸を見せる必要、そもそもなかったよ」

　リリィの言葉で阿九斗は望一郎の顔を見る。

　望一郎は最初に立っていた位置から少しも動いていなかった。そして表情ひとつ変えていない。ただ動いたのは右手だけだ。それはいつのまにか上着の内ポケットに差し込まれていた。



「まるで重心を動かさずに手だけ動かしやがった。それがポケットの中で止まってるのは、キミが動いたのを確認して、抜く必要がないと判断したからだ」
　リリィが言った。
　それが事実なら、望一郎はリリィと阿九斗の動きを完全に見切っていたことになる。拳が放たれてから阿九斗が受け止めるまで、コンマ二秒もなかったはずだ。
「初対面でいきなりそういうことをされると困るな。こちらも怒らないと示しがつかなくなってしまう」
　笑顔で望一郎は言った。相変わらず口調は穏やかだが、周囲に漂う圧力はぐっと高まったように思える。
「あんまり調子に乗るなよ、小役人が」
　リリィは声を低くした。こちらも笑顔だ。
　緊張感は耐え難いほどになり、張りつめた空気がやがてはじけるであろうことは誰の目にも明白だった。阿九斗はリリィに目をやり、彼女の拳を握った手に力を込めた。
「会長、何の理由もないんですよ」
「喧嘩に理由がいるのかな？」
「そういうことじゃありません。まだ彼から何の話も聞いていないんですよ」
　阿九斗が言うと、望一郎は大げさに肩をすくめて笑みを見せた。

「俺は警告に来ただけさ。この学院の警備態勢は大丈夫かってね」

「生徒会が管理している。とやかく言われる筋合いはないね」

「初対面の人間に殴りかかるのも警備の一環かい？」

「てめぇ……！」

　リリィが阿九斗の手を振り払った。阿九斗も顔色を変えて身構える。

「キミも邪魔するなら二人とも……」

　帽子に手をかけたリリィが警告する。望一郎がそれを見て不敵な表情を作り、内ポケットから手を抜きかける。

　次の瞬間には生徒会室に激しい嵐が起きる……はずだった。

　しかし、生徒会室に響いたのは、ぽふっ、という間抜けな音だった。そして、軽いカサカサとしたものが部屋中に降り注ぐ。それはポテトチップスだった。

　学長がポテトチップスの袋を開け損なっていた。無理にひっぱって袋全体が破れ、中身が飛び散ったということらしい。阿九斗も、リリィも、望一郎ですら肩と頭にポテトチップスのカスが降りかかっている。

「すまんかった。袋が硬くて……」

　学長は頭をかいて一同の顔を見やった。

「カゴに入っているお菓子は備品でなく会計の私物です。補充お願いします」

一瞬にして毒気を抜かれたのか、リリィが半ばぽかんとしながら言った。
阿九斗も望一郎の近くから離れ、一息つく。まさに攻撃が行われようとする瞬間の破裂だった。あのタイミングでなければ、お菓子の袋の破裂など誰も気にしなかっただろう。

「食えない老人だ」

望一郎が指でつまんでいたポテトチップスを口に入れた。

学長は笑って望一郎の前に出た。

「そう言わんでくれ。わしは確かにポテトチップスは食べられなかったが……そういう意味ではないか」

「警備態勢のことなら、心配はいらんよ。わしらはこれまでうまくやっておったし。それより、ひさしぶりじゃの。おぬし、今は何の役職じゃったっけ？」

望一郎は内ポケットから手帳を取り出した。その手帳を開くとバッジが出てくる。これにはさすがのリリィも驚きに目を見開いた。

「内閣魔術情報官……」

そのポストは騎士団の最高位にまで上り詰め、騎士団養成所の校長を務めた後に、はじめてなれるような立場である。そこまでの名誉職であるが、いや、そうであるからこそ、実は騎士団に対して絶大な権限を持っている。普通ならば、いくら優秀であっても望一郎のような若者が座る位置ではない。

「ほう、魔術情報調査室のトップか。そんなのが直々に警告とは恐れ入った」

学長は旧知の相手に話しかけるような態度だった。

一方の望一郎は緊張を解いているようには見えない。
「警備態勢への忠告ですよ。もし、この学校で何かあったら、俺が介入することもあるかもしれません」
それが自分に対する警告だろうと阿九斗は思う。
「僕が何かすると言うんですか?」
「いや、される方さ」
望一郎は軽く手を振って否定した。
「僕にかまっているのはあなたたちでしょうに。僕には野心はない。それなのに、島では妙なことがありましたよ。あの役職からすればあなたの部下のはずです。事件の報告はどこかで握りつぶされましたが」
阿九斗が厳しい目を向けたが、望一郎は目を細めてそれを軽く受け流した。
「ねぇ、君たちは無邪気すぎるんだよ。俺を敵だと思ってるのだろう?　それも一面の事実ではあるけれど、本当の敵とは何だ?」
望一郎が逆に質問をしてくる。阿九斗の声に棘が混じる。
「敵?　そんなものいるはずがないでしょう。その考えがすでに貧しい。悪なんて一人一人の心の中にあるもので、誰かを糾弾すればいいというものではないはず」
「悪が人間ならば、そうさ。気づかないのか?　本当の敵に。君も、あなたも」
望一郎は阿九斗と学長に視線を走らせた。
「なんだって?」

阿九斗は戸惑(とまど)いを口にする。学長は微動(びどう)だにしない。
「俺だって話す余地があると思ったから来たのさ。気づくべきは、自分の立ち位置がどこかだろう？　俺にはあなたのいる場所が悪の帝国(ていこく)に見える。あなたがた自身ではそう思っていないだろうけれどね」
望一郎が今度は誰に言うともなく言いはなった。
「僕は僕だ。自分の居場所くらい自分で選んでいる」
阿九斗が言うと、望一郎は馬鹿(ばか)にしたように笑う。
「幼いよ、その考え。いいさ、君が俺の邪魔をしなければ、君はただ状況(じょうきょう)に巻き込まれて消えていくだけなんだ。こちらとしてもそうなってくれた方が争わずに済む。できれば誰かを傷つけずにいたいんでね」
「あなた、結局、何者なんです？」
阿九斗は望一郎を見据(みす)えた。望一郎も阿九斗を見返した。が、望一郎はすぐに振り返(かえ)ってしまう。
「……最終警告ととらえてくれてかまわない」
望一郎はそう言って、自らの肩と頭を払いながら生徒会室を出て行った。
「学長、彼は何者なんです？　ご存じのようでしたが」
阿九斗が聞くと、学長はすっとぼけた調子でこう答えた。
「知らんよ」
「知らない？」
これには阿九斗もリリィもさすがに声を高くする。

「いや、正体は知らんという意味じゃよ。彼はわしが若い頃（ころ）からあのままじゃ」
「あのまま？」
　二人は疑問の声をあげたが、学長はそれほど重要な質問ではない、というようにカゴの中のお菓子をひっくり返している。
「いつ見ても、あの顔じゃ。年齢（ねんれい）もあのくらいじゃな。百年ほど」
「百年……ですか？」
「ただ職業や立場は様々じゃった。同じ人間なのか、別の人間なのかもわからん。ただ、その誰（だれ）もがわしの顔を覚えておったから、記憶（きおく）を共有しておるようなことをしておらん限りは、同じ人間と考えるのが妥当（だとう）じゃろう」
　学長はお菓子を漁る手を止めた。阿九斗に目をやる。
「紗伊君」
「はい」
　阿九斗は何か忠告をされるものだと思って背筋を伸（の）ばした。
「ここの会計さんは、どうして妙な味のお菓子ばかり用意しているのじゃろう？」
「趣味が……悪いのだと思います」
「そうか」
　学長はうなずいた。

2　伊賀の影まるまる公開

絢子の実家へと向かう飛行バスがやってきたのはいいが、阿九斗は望一郎のことが気になって、これからどこに行くのかさえろくに気にしていない有様だった。自分でもわかるほどに心が乱されている。学長はすっとぼけたままだったし、生徒会長は権力に楯突く覚悟をさらに深めたらしく、里帰りしていた生徒会三役を招集していた。が、阿九斗としては、今回の望一郎の来訪が、単純に、謎の権力者がやってきた、などということとは違うのではないかと考えていた。

――僕のことをよく知っていて、僕のことを観察しにきたような気がする。

それは気のせいではないだろうと阿九斗は確信していた。どういうときにどういう態度をとるのかを確認されていたようだった。

――どうやら僕は、これまでの考え方を試されているんじゃないだろうか？

望一郎の意図はともかく、阿九斗にとってはこれから起こることが自分の内面に深く関わっているであろうと思えて仕方がなかった。

「バス、来ましたよ」

「アニキ、ぼうっとしてますね。疲れてるんじゃないですか？」

ころねとヒロシがバスに乗るように阿九斗を促(うなが)す。寮(りょう)の前の広場に横付けされた飛行バスの扉(とびら)はすでに開いており、乗客を待つ状態になっていた。乗り込むのは阿九斗とヒロシ、そしてころねだ。もちろん絢子も同行するが、彼女はどちらかといえばバスを仕立てた側である。今回は先に乗り込んでいて、中から声をかけてくる。

「ほら、早く乗ってくれ」

阿九斗は一泊(ぱく)するということで宿泊(しゅくはく)荷物を手に、飛行バスに乗り込んだ。ヒロシも小ぶりのボストンバッグを持っている。ころねのみいつものポシェット姿だ。

三人が乗り込むと、飛行バスは待ちかねたように扉を閉じ、空に舞(ま)い上(あ)がった。シートについて何気なく外を見た阿九斗の目に、寮の外に出てきてバスを見送るけーなの姿が見えた。けーなの顔が何か言いたげだったので、阿九斗は軽く胸が締(し)め付(つ)けられるような気がしたが、けーながすぐに笑顔で手を振りはじめたので、安心して小さく手を振(ふ)り返した。

――そう言えば、昨日は話さなかったな。

望一郎の件の後も、けーなとは一緒(いっしょ)に食事をしたし、会話をする機会もあったのだが、阿九斗が考えこんでしまっていて実のある話を何もしなかったというのが実情だった。

「そういえば、けーなちゃん、一人になっちゃうんすね」

ヒロシが言った。

「妙に感傷的なことを言わないでくれよ。そんなに長くいなくなるわけじゃない。それにピーターハウゼンだっているよ。なんか先輩の研究とかに付き合って忙しいみたいだけど、けーなとは妙に気があってるしね」

阿九斗はそう言ってヒロシの顔を見た。妙に上機嫌に思えた。

「嬉しそうじゃないか。それでどうして感傷的なことを言うのさ？」

「いえね、なんかそんな気分なんすよ」

ヒロシは窓の外、というか、妙に遠くを眺めている。そのくせ顔は上気していて、阿九斗にはわけがわからない。

——まぁ、元気そうだからいいけど。

ふとバスの中の会話がなくなる。この四人では沈黙はそれほど気まずくはないはずなのだが、絢子がどういうわけかひどく緊張した顔で阿九斗に視線を合わせたり外したりを繰り返している。

「どうしたのさ？」

気づいた阿九斗が聞くと、狼狽した絢子が首を小刻みに左右に振りながら「なんでもない」と口ごもり、慌てて自分の鞄に手を突っ込んだ。

「あ、あれだ、ほら、何か食べるかと思って……」

絢子はがさがさとやるが、なかなか目当ての物が見つからないのか、いつまでもかき回している。

「精神が高揚しすぎです」

それまで黙(だま)って座っていたころねが指摘(してき)すると、絢子はしどろもどろになりながら否定した。
「いやいやいやいや。大丈夫(だいじょうぶ)だ。そんなことはないぞ。冷静だ。私は。とても冷静だ」
「冷静にはとても見えないけれど、大丈夫なのかい？」
阿九斗は言い、絢子を心配してつい手を伸ばした。
と、絢子は「ひゃあ」とも「ぴゃあ」ともつかない声をあげて身体を引く。
「いや、別に何かしようとしたわけじゃ……」
「そ、そ、そ、それはわかっている」
「じゃあ、身体の具合でも……」
「そうじゃない。つ、つまり……」
何か言いかけた絢子だったが、すぐに口をつぐんでしまう。すると、そこにころねが割り込んできた。
「言いにくいなら、やはりここはわたしが……」
「いやいやいやいや。つ、つまりだ。政治的なことなんだ。高度に」
絢子がころねの口を手で塞(ふさ)ぎながら言う。
「高度に政治的な？」
阿九斗が顔を真剣(しんけん)なものにした。望一郎に言われたことを再び思い出していた。どうも自分の認識を変えざるを得ない段階に来ているらしい。つまり、法律を守ること、正しいと思うことに従うことは、自分

にとっては当然のことなのだったが、それがもしかしたら狭い範囲の考えにすぎないのではないかということに気づきはじめていた。

「ちゃんと話して欲しいな。僕ももしかしたら大きな責任を持たなきゃいけない時が来たのかもしれない」

阿九斗が言うと、絢子は顔を真っ赤にして、ころねの口に当てた手をぽろりと落とした。

「気づいていた……のか？」

「いや、なんとなく、だけどね。僕もこれまでのことに責任をとらなくちゃいけないとは思っている」

「そ、それは、本気で言っているのか？」

絢子は驚きに口を大きく開いた。が、阿九斗がうなずくと、絢子は、その口がだらしなくゆるんでしょうがないという顔になる。

「い、いや、やっとその気になってくれたのならいいんだ。気づいているのなら、こちらから言う必要もあるまい」

にやにやして止まらなくなっている顔を隠そうと、手を顔に当てて窓の外を見るフリをする絢子である。

「それでも君の口から聞かないとわからないよ」

阿九斗が言うと、絢子は顔を真っ赤にした。

「だ、だから言わせるな。わかっていればいいんだ。あとは父上から説明があるだろう」

――服部(はっとり)さんの表情は気になるけれど、これから大事な話があるんだな。
絢子の言葉に気を引(ひ)き締める阿九斗であった。

○

飛行バスはしばらくして森の中へ滑(すべ)り込んだ。そこが伊賀の里だろうと思ったのだが、窓から見る限り、バスが着陸したのは森の木をサッカー場の半分くらいの広さ分だけ切(き)り倒(たお)しただけの広場だ。
「ここが里?」
ヒロシが聞くと、絢子が説明した。
「いや、ここは発着場だ。ここから二十分ほど歩くことになる」
絢子が促して全員がバスを降りると、広場の端(はし)に森の中に続く道が見えた。上空からは見えなかったのは、木々が道を覆(おお)っていたからだ。自然と覆われたわけではなさそうだったから、これは意図的に隠されているのだろう。
「里自体も隠されているのかい?」
阿九斗が聞くと、絢子がうなずいた。乗ってきた飛行バスが動き出し、広場の端の方に向かっていった。するとと、木々が生えているだけと思われた地面がいきなり左右に分かれて、そこに地下への入り口が出現した。

「あれが駐車場だ」
絢子が言うと、バスを飲み込んだ入り口は再び締まり、元の森の外見に。どこまでも実体を隠したがる里ということらしい。
「すごいな」
感心する阿九斗に、絢子は照れたような顔をすると、先に立って歩きはじめた。
「まぁ、そういう家柄なのだと承知してくれ。家自体は別段、どうということのないつくりになっているから」
三人は絢子に続いて細い道を行く。と、絢子がいきなり立ち止まった。ヒロシは戸惑うが、他の者は身体を緊張させている。
――え？　え？
ヒロシがきょろきょろしてると、きぃん、と甲高い音が響いた。
――へ？
ヒロシが驚いていると、ドス、と足の裏に鈍い振動を感じた。ちら、と足下を見ると、そこに十字手裏剣が刺さっていた。
「うわぁあ！」
今更のようにヒロシが飛び退くが、他の三人は当然ながらすでに襲撃に気づいているらしく、絢子は短刀を構えており、阿九斗は右上方を睨んでいる。ころねまで阿九斗の脇に控えてポシェットに手を突っ

込んでいた。
「え？　いったいなんなんすか？」
　ヒロシが聞くと、絢子が答えの代わりに大きな声で呼びかけた。
「ゆう子！　いたずらが過ぎるぞ！」
　すると、森の中から声が返ってくる。
「あははは！　お姉ちゃん、腕は衰えてないね」
　ヒロシは声の方向を見ようとした。が、森の中からということはわかるものの、どちらから声が聞こえてくるのかわからない。
「馬鹿。当たったらどうするんだ」
「大丈夫だよ。お姉ちゃんのいつも着てる鎖帷子を狙ったし」
「そうじゃない。弾いた先に誰か居たら困る」
「それはお姉ちゃんの腕の問題じゃん」
　絢子は声と普通に会話している。どうやら絢子の妹が出迎えに来て、いきなり絢子に手裏剣を放ったというのが真相のようだ。
「ほら、出てこい」
「ほーい」

しぶしぶという様子の返事があって、右上方の木ががさりと音を立てた。その枝から身軽な少女が飛び上がって空中で回転。軽やかに四人の前に着地する。

小柄な少女はおどけた様子で敬礼をした。

「はじめまして。妹のゆう子です！」

「あ！」

ヒロシは思わず声をあげていた。それは先日、間近に見たアイドルの星野ゆりに間違いなかったからだ。

ヒロシの様子に気づいたのか、ゆう子はヒロシに手を振って見せた。

「そうです。すいません、アイドルやってまーす」

その声の軽い調子にヒロシはほっとする。どうやらブレイブの正体が自分だとは気づかれていないらしい。

「まったく、ふざけた妹だ。芸能人などやっているのだから。そんなことだから魔獣に襲われるようなことになるのだ」

絢子が他の三人に聞こえるようにゆう子をしかる。

「芸能人と関係ないよ、お姉ちゃん。でも、おかげであの有名なブレイブに助けてもらったんだよ！」

「ええい、いくら魔獣が嫌いだからといって、我が服部家の者が他人に助けてもらうなど情けない。何のための修行だ」

「いーもん。べつに私は当主じゃないし。芸能以外の修行なんか適当でいいってお父さんも言ってるもん。それにブレイブがかっこよかったからいいんだよーだ」

ゆう子は絢子に舌を出す。そのやり取りを聞いていたヒロシは自然と顔がにやけてしまう。自分をかっこいいと言われるのは悪い気分ではない。たとえ仮面をかぶっていた姿だとしても。

「ね、こっちの人がお姉ちゃんの彼氏（かれし）なの？」

いきなりゆう子がヒロシの前に立った。

「え？　ちょ……」

ヒロシは戸惑うが、それと同時に絢子が鋭（するど）く否定する。

「違うっ！」

「えーっ？　なんでそんなに強く言うの？　じゃあ、こっちの人なんだ」

ゆう子が阿九斗に顔を向けた。

「そ、それも……違う」

今度は絢子は口ごもりながら否定する。

「えー？　だけど、その調子じゃこっちね。お姉ちゃん、わかりやすすぎ。だけど、こっちの人、やめた方がいいよ」

ゆう子が阿九斗に嫌悪（けんお）の表情を向ける。

「こら！　失礼なことを言うな！」

絢子が怒鳴るが、ゆう子は聞いていない。
「だって、この人怖いよ。顔もそうだけど、気配とか。この人だけだよ、この里に入ってきた身内以外で私の居場所を見抜いたの」
ゆう子は阿九斗を指さした。阿九斗は困った顔をしている。
――そういえば、アニキは右上から顔を逸らしてなかった。
ヒロシは阿九斗の行動を思い出して驚く。以前なら阿九斗も戸惑うばかりだっただろうに、段々と怪物になりつつあることをひしひしと感じる。
「なんでこんな人とお姉ちゃんがけっこ……」
口を尖らせてそう言いかけたゆう子を、絢子がいきなり襲った。忍者の素早さで背後に回り込むと、ゆう子の喉に指を二本当てて続く言葉を封じる。
「け……けっこう仲良くしてるのかな？　って聞こうとしたんでしょう？　ね？」
殺意のこもった言葉を絢子は発する。ゆう子は機械的にうなずいた。
「そ、そうだよ。その通り。だけど、お姉ちゃん、それは殺し技……」
「かわせない方が悪い。さ、家に行くぞ」
絢子が促した。
皆は歩き出すが、ゆう子は絢子と阿九斗から距離を取る。必然的にヒロシとゆう子が並んで歩くことになった。

「ね、あの人、どんな人なの?」
ゆう子は物怖じしない性格らしく、阿九斗の方に顎を振り、堂々とヒロシに聞いてくる。
「下品ですよ、そういう聞き方」
ヒロシはおずおずと言うが、ゆう子は、ツン、とした態度で、知るもんか、とでもいうように手を振る。
「だって、あの人、怖いもん。普通じゃないよ」
「そりゃ……あんまりにもすごい人っすからね」
「すごい?」
「強いんですよ。多分、最強です」
「あはは。なにそれ。男の子ってすぐ最強とか言うよね」
「いや、ホントなんすから」
「ホントじゃないよ。ブレイブ見たことないでしょ?　あの人のが強いって。こう、しゅたっ、と手を振る仕草とか素敵だったし。救ってくれたときもクールだったぁ。容赦なく魔獣を八つ裂き!」
ゆう子がうっとりとして言う。
「そういや、ブレイブを間近に見たってことは秘密だったんじゃ……」
「えー?　だけど、ブレイブに助けてもらったのはもうみんな知ってるからさぁ」
「そうじゃなくて、どうやって戦うのか、とか」

「え？　いいじゃん、結局、私だって正体知らないんだから。騎士団にいろいろ聞かれたけど、知らないものは知らないから。ん？　なんでブレイブのこと知ってるの？」

ゆう子がヒロシの顔を覗き込む。

——しまった……。

ヒロシは慌てるが、すぐに言い訳を思いつく。

「テレビで普通にやってましたよ。星野ゆりはブレイブの秘密を知っているのか？　とかなんとか」

「えー、やだな。だって、ブレイブと私は……」

ゆう子が含み笑いをする。

「え？　なんすか？　やっぱり何か知ってるんじゃ……」

ヒロシが聞くと、ゆう子は手を広げてその辺を駆け回ってから、

「それは秘密だよん」

と、唇に指を当てた。

——か、かわいい……。

ヒロシは思わず感激してしまう。顔にもそれは出ていたはずだが、ゆう子は男の子のそんな表情に慣れているのか、気にしている様子はない。ただ、何かを思い出したようにヒロシの前に顔を突き出して、ひょいとつま先立ちになる。

「え？」

ヒロシは一瞬どきりとするが、ゆう子は無邪気に笑って言う。

「あなた、ブレイブと同じくらいの身長だね！」

「あ……そ、そうなんだ」

ヒロシはどぎまぎしたが、ゆう子はその言葉に特に意味がなかったかのように、ひょいと顔を離して、また元気よく歩きはじめる。

絢子がたしなめ、道の先を指さした。

「ほら、馬鹿やってるんじゃない」

「すぐ家だ。皆を通しておいてくれ。私は父上を呼んでくる」

見えてきた家は、巧みに森の中に隠されていた。そのせいで全貌はわからなかったが、見えている部分だけでもかなりの大きさがある日本家屋であることがわかった。門こそないが立派な前庭のある玄関は、前でクラス全員が記念写真を撮れそうなほどの大きさがある。屋根は黒い瓦葺きで、木で覆われている割りには日の差す角度が計算されているのか、陽光を反射して美しく輝いている。

絢子は裏手に向かって行った。ゆう子が玄関を無造作に開け、中に来客を告げると、和服姿の中年女性がすぐさま出てきて頭を下げた。

「いらっしゃいませ。お疲れでしょう。さぁ、こちらへ」

使用人が客間に三人を通す。

ヒロシも一応は名門の学院に通う身なので、家に使用人が居る程度では驚かないが、その使用人の身のこなしには驚かざるを得なかった。阿九斗も気づいているようで、ヒロシと顔を見合わせた。

「全員、なんかすごい身のこなしなのかな、服部さんの家は」

「そうみたいっすね……」

小声で言い合う。と、それを聞いていたわけでもないだろうが、ゆう子が使用人に呼びかける。

「ね、最近、照屋(てるや)んところがまたやたらとからんできてるってホント？」

「お嬢様(じょうさま)、お客様の前ですよ」

使用人がたしなめるが、ゆう子はかまわないようだった。

「いいじゃん、もう身内みたいなもんだよ。それにこの人と照屋栄子(えいこ)とは一度会ってるってお姉ちゃん言ってたじゃん」

ゆう子は阿九斗を指さした。阿九斗はどう言ったものか困っているようだったが、彼(かれ)もヒロシも照屋栄子と会ったことはある。そのときは服部家と照屋家とは仲が悪いとは聞いていたが、仲良く喧嘩(けんか)していたというような関係だと思っていた。

「そんなに深刻に仲が悪いんですか？」

ヒロシが聞くと、ゆう子はうなずいた。

「昔からそうだったけど、ここのところは特にひどいみたい。この近辺をうろつき回っていたりしてね」

「なにか企(たくら)んでいるんですかね？」

「さぁ？　なんでかはわかんないけどね。ね、こっち来て」
　ゆう子がヒロシの腕を取って引っ張る。
「え？　どうしたんです？」
　ヒロシが戸惑(とまど)う。今、客間に通されたところなのだ。
「荷物だけおいてさ。あ、そっちの人はそこで待ってて」
　ゆう子は阿九斗に向かって首を振った。
　阿九斗は困り顔にはなるが、仕方なく中に入った。ころねも続いて客間に。
　ヒロシだけはゆう子に腕を引かれて廊下(ろうか)を引き回される。
「ちょっとどこへ行くんですか」
「どこでもいいんだけど、中庭にしよっか。私、あの人の傍(そば)にいたくない」
「駄目(だめ)っすよ、そんなこと言っちゃ」
「だってさ……」
　何か言いかけたゆう子だったが、中庭に続くガラス戸を開けて用意されていたツッカケを履(は)き芝生(しばふ)の上に出ると、話を変えた。
「あの人、お姉ちゃんと結婚(けっこん)するんでしょ？」
「え？」
　それはヒロシにとっては初耳だった。

「いや、聞いていなかったっすけど」
　驚きつつヒロシも中庭に降りる。
「そうなの？　なんかお姉ちゃん、そういうの奥手（おくて）だからなぁ」
　ゆう子は中庭の屋根付きのベンチに座る。ヒロシはその前に立った。
「結婚って？」
「そのままの意味だけどさ。よくわかんないけど、あの人が魔王（まおう）とか言われて、それで結婚したらおとなしくなるだろうってことじゃん？」
「そんな簡単な……」
「んー、だけど、他宗派からはわかりにくいだろうけど、家（うち）はスハラじゃん？　上からの命令は絶対なんだよ。政略結婚ってのもアリなんだよね。さっき言ってた照屋のちょっかいってのも家の発言力が増すのを怖がっているってことかも」
「そういうことなんすか」
　ヒロシとしては、そう聞くと悪いことはないのかもしれないと思えてくる。少なくとも阿九斗本人の悩（なや）みはかなりの部分で解決するからだ。
「だけどさ、私も最初は賛成だったけど、なんか嫌（いや）だな、あの人」
「なんでそんなことを言うんですか。すごくいい人なんですよ」
　ヒロシが抗議（こうぎ）するが、返ってきた答えは意外なものだった。

「あの人、魔獣の匂いがする」

――え?

その言葉が嘘でないことは何よりヒロシが知っている。それだからこそ、ヒロシはうろたえた。

「そ、それは、感覚でわかるってことですか?」

「そう。匂い。私ね、多分、そういう匂いに敏感なんだと思う。魔獣から漂うあの感じがすごい嫌い。あんまり他の人に言ったことないんだけど、私、魔獣に殺されかけたんだ」

ゆう子の口調は平然としたものだったが、それでも精神的には抵抗があるのか、その手が微かに震えていることにヒロシは気づいた。

「子供の時のことなんだけど、よく憶えてる。何かの虫の変異したやつで、それに噛まれたんだ。それで普通に恐怖症みたいになったんだけど、それだけじゃなくてさ。どうも身体に魔獣のマナが入っちゃったみたいなんだよね。身体には異常がないから大丈夫ってことらしいんだけど、それから魔獣が近くに来ると……。魔獣が怖いっていうより、頭がおかしくなっちゃいそうで怖いんだ」

ゆう子は微笑みながら言ったが、ヒロシは強い衝撃を受けていた。

――そういえば聞いたことがある。魔獣のマナは本来のマナが何らかのエラーを起こしたものだから、それが体内に入ってしまったら何が起こるかわからないって……。

と、ヒロシの深刻な顔に気づいたのか、ゆう子は「あははは」と笑って手を振る。

「大丈夫だよ。スハラ神から洗礼されたときの体内ユニットがあるでしょ？　あれに恒常的な魔術がかけてあるから。それが増えようとする魔獣のマナを抑えてるの。スハラ神がまさか消えでもしない限り、私も大丈夫だから」

「そうなんですか」

ヒロシはほっとする。

するとゆう子はからかうような笑顔を見せた。

「そんなに心配してくれるなんて、下心でもあるわけ？」

「いや、そんな、とんでもない！」

慌てて首を振るヒロシだが、ゆう子の意地悪な表情は変わらない。

「そうかな。ファンの子って、結局はなんか私のイメージを勝手に決めてそればっか見てるって感じだしさ。そうじゃないって言ってる人は、大体がイヤラシイ感じの意味でホントの私を見たがってるっていうかさ。ホントの私なんてみんなと変わらないつまんない存在なのにねぇ」

「い、いや、そんなことないっすよ。ゆう子さんはスゴイです」

ヒロシが言うと、ゆう子は少し馬鹿にしたように目を細めた。

「そういう風に言う人、多いけど、それを下心って言うの」

「いや、そうじゃないっすよ！　こんな良い家に生まれてるのに、自分の力を試すみたいにいろんなことに挑戦してるじゃないっすか。それをスゴイって言ったんです」

ゆう子は、そこではじめて驚いたように目を見開いた。

「良いところのお嬢さんでわがままって言われたことはあるけど、そんな風に言われたのははじめてだよ。女優やったら歌、その次は作詞、バラエティ、落ち着きがない自分勝手なヤツだって言われるばっかりだったし」

ゆう子の顔がにやける。

「だけど、良い家なのにってのは、ちょっと違うかも。逆なんだよね。家に甘えたくないとか逆に甘えてるとかそういうのじゃなくて、家のために何かしなくちゃいけないってことなんだよね。うまくできているかどうかはわからないけど、自分ではそのつもり」

「家のために？」

「私、この家の子じゃなきゃ死んでるから。スハラ神の特別の加護なんて普通は受けられないもの。だから、家に感謝してる。両親に、とかじゃなくて、幸運に。なんか恥ずかしいな。はじめて言うことばっかりだよ」

ゆう子は頭をかいて照れくさそうな顔をした。

「いや。スゴイと思いますよ」

どういうわけかヒロシも恥ずかしくなってきて頭をかいた。

と、照れ隠しなのかどうかわからないが、ゆう子が不意に真面目な顔になって聞いた。

「ね？　神様って信じる？」

「え？」

「神様って言っても、ホントの神様のこと」
「それって、質問としては難しいことなんじゃないんですか？」
　ヒロシは戸惑ってしまう。
「うん。だけど、スハラ神を信仰するってことは、実際にはその後ろにあるみんなの結びつき、つまり家族とかの結びつきを信じるってことじゃないかって。でも、家族とか、人と人との出会いとかってものは、スハラ神のおかげではないんだよね。そこに生まれたり、偶然に出会ったりってことは、ホントの神様の仕業だって思ってる。だから、私はホントの神様を信じてるし、私が芸能人をやってるのも、放送を通じていろんな人同士を結びつける活動なんだと思ったから。だから、私が一番大切なのは、私の家であり、家族。だからスハラ神には本気で仕えてるし、家の命令には従うつもりなんだ」
「自分にはそんな立派な考えはなかったです。尊敬しますよ」
　ヒロシが、ほう、とため息をつくと、ゆう子は照れくさそうに笑った。
「そんなこと言っても何もしないもんね」
「こっちだって何も期待してるわけじゃない」
　ヒロシも笑う。
　と、ひとしきり笑い終わったゆう子が、ふと真剣な顔でヒロシを見上げて言う。
「でも、ちょっとくらいなら、私と仲良くなりたいって下心があっても面白かったかな」
——えっ。

ヒロシは一瞬、その言葉の意味について考えてしまう。

――それって、もしかして……。

つい期待してしまい、真剣な顔で身を乗り出してしまうヒロシだったが、またもゆう子はいたずらっぽい顔になる。

「だって、私と仲良くなろうとする人がいたら、家の住み込みのみんなが、すぐにその人の腕を試そうとするんだよね」

「は？　みんな？　住み込みの？」

ヒロシは疑問を口にしたが、その瞬間、自分の周囲を敵意ある視線が囲んでいることに気づいた。

はっとして周囲に目をやると、目だけ露出した黒頭巾に、黒ずくめの服装といういかにも忍者な格好をした面々が、今にもヒロシに襲いかかろうとしている。どこから現れたのか、と問いかけたくなるところだが、それは少し見ただけでわかった。庭の芝生やら、ベンチの脇やらに隠し扉があり、そこから頭やら足やらを出している忍者も何人かいる。

「うわぁああ！」

ヒロシは慌てるが、ゆう子は笑顔だ。

「友だちになろうって子とか、ファンとか、とにかく私に近づく人は、みんなこれをやられるの」

「こここ、これ、って、どういうことっすか？」

ヒロシは腰が抜けかかっている。

「私と仲良くなるってことは、身内になるってことだから、みんな友だちになれるかどうかを試したがってるんだ」
「た、た、試すって？」
「お互（たが）いの必殺技を掛（か）け合（あ）って、力を認め合えれば親友」
「ちょ、ちょっと！　必殺技なんて持ってませんから！　それに、明らかにこの人たち、友情を結ぶ気はないっすよ！　単にゆう子ちゃんに近づく男を狩（か）ってるだけ！」
　ヒロシはわめき立てる。
　忍者たちは一斉（いっせい）に首を横に振った。そしてヒロシににじり寄りつつ口々にこう言う。
「君、我々と友だちになりたいんだろう？」
「そうだ。我々も仲良くしたい。技比べをするくらい仲良く」
「お嬢様に近づくなんて大した度胸だ」
「ほら！　最後の一言！　脅（おど）してるだけ！　脅してるだけ！」
　ヒロシが指摘（してき）すると、ゆう子は苦笑いを浮（う）かべ、ベンチに座ったまま頬杖（ほおづえ）をついた。
「やっぱりそうかな？」
「そうですよ！」
「そうか……。家に連れてきた男の子の友だち、みんな逃（に）げちゃうんだよね。やっぱりブレイブくらい強くないと駄目か」

ゆう子は残念そうにため息をついた。

「わ、わ、わかったっすから！　おとなしくしてますから！」

ヒロシは、やたらと殺気だって刀やらメリケンサックやらをカチャカチャいわせている忍者軍団にじりじりと迫(せま)られ、ゆう子から離れるべくしゅるしゅると後ろに下がる。

「はぁ……。まぁ、でも、こういう性格、お父さんが一番ひどいからさ。今頃(いまごろ)、あの人は大変かもね」

ゆう子がつぶやいた。

「アニキが？」

「そりゃそうでしょ。お姉ちゃんの相手になろうってことなら。それに言ってみればホントの身内になるわけだからね」

「じゃあ、今頃、お父さんも武器を持ってアニキを襲(おそ)ってるとか？」

「まさか人聞きの悪い。襲ってるんじゃなくて腕試しというか、度胸試しというか。そんな感じ」

「いや、それは言い方が違うだけでしょう……」

ヒロシはぼやくが、周囲で刀の鍔(つば)鳴りが聞こえたので、以後は黙(だま)っておくことにした。

○

客間にぽつんと残されてしまった阿九斗ところねだったが、客の身分としては黙って座っているしかない。案内してくれた和服の女性がお茶を置いていってくれたが、半分くらいしか飲まなかったため、もう冷えてしまっている。

「試されているのかな」

阿九斗はころねに聞いた。

「そうでしょうか？　簡単に判断はできません」

——どちらにせよ下手なことは言えないな。気を緩めないようにしないと……。

阿九斗がそう内心で決意したとき、客間の襖が開いた。

「いらっしゃい。絢子がお世話になっているね」

そこに立っていたのは、小柄ながら活力に満ちた雰囲気の男性だった。

阿九斗は襖が開くまで彼の接近に気づかなかった。普通ならば足音がするだろうし、そもそもが隠れていたゆう子の居場所すら見破れる阿九斗である。相手がただ者でないことは明白だった。

和服姿の男性は、年齢は四十から五十の間。黒く日焼けした顔に白い歯が目立つ。しっかりとなでつけられた髪は黒々としており、いかにも健康的だ。だが、そういった見かけの男性にありがちな〝軽さ〟は微塵もない。重々しい、だが不快ではない空気を常に身にまとっているようだった。

「父の洋蔵です」

立ち上がった阿九斗に挨拶をし、洋蔵は阿九斗に座るように勧めた。

「お噂(うわさ)はかねがね」
　阿九斗の前に座った洋蔵は、屈託(くったく)なく笑う。
「お恥ずかしいです。こちらこそ、絢子さんには委員長として、学業の先輩(せんぱい)としてお世話になっております」
　阿九斗は頭を下げた。
「ところで、単刀直入に聞くが、絢子のことは好きかね？」
　洋蔵が不意打ちのように切り出した。
　普通の若い男性ならば口ごもってしまうであろう質問だったが、阿九斗にとって好きというのは恋愛(れんあい)以外のすべての意味を含(ふく)む言葉だったし、第一、自分の気持ちを素直に表現することには躊躇(ちゅうちょ)しないのが彼である。
「大好きです」
　阿九斗は即答(そくとう)した。
　豪快(ごうかい)に洋蔵は笑った。
「はははは！　気持ちの良い若者だ。だが、絢子の立場も知っているだろう？　君と共に暮らすということが、服部家にとってどういう意味を持つか」
　学園の寮(りょう)での暮らしにおいて、阿九斗の味方と見なされている絢子の苦労を知らない阿九斗ではない。
それに政治的な話と聞いてここに来ているのである。

「それが政治的な意味であることも承知しています。感情だけの問題ではありません。どのような困難があろうとも、絢子さんの周囲や家庭の環境（かんきょう）に配慮（はいりょ）し、彼女（かのじょ）のために最善の選択（せんたく）をしたいと思います」

阿九斗にとっては本心からの言葉である。

しかし、絢子と結婚するつもりであるという前提でその言葉を聞くと、もはや意味はひとつしかない。

洋蔵が心底から嬉（うれ）しそうな、しかし、それだけに見る者に威圧（いあつ）感を与（あた）える笑みを浮かべた。

「その言葉、父として嬉しく思う。だが、それだけの覚悟（かくご）があるか、試して良いかな？」

口調は静かだが、歴戦の強者であっても畏縮（いしゅく）してしまうような迫力（はくりょく）である。

それでも阿九斗はそれを平然と受け止めた。

「試される覚悟はしていました」

「どこまでも潔い。男として気に入った」

そう洋蔵が言った次の瞬間、恐（おそ）るべき光景が阿九斗の眼前に出現した。

洋蔵が正座した格好のまま跳（と）び上（あ）がったのだ。恐るべき跳躍力（ちょうやくりょく）だった。膝（ひざ）を下に押（お）しつける力だけで一メートルも浮き上がったのである。

――！

阿九斗は驚愕（きょうがく）し、反射的に立ち上がった。

すると、洋蔵は空中で正座したその体勢から刀を抜き放ち、横真一文字に切（き）り払（はら）った。阿九斗はその刀を手で受け止めたが、刃（は）の前に素手をさらしているということでしかない。指がはじけ飛んだように宙

に舞い、刀は阿九斗の首筋にまっすぐ切り込まれる。
——死んだ……！
阿九斗は自らの死を感じた。
——これで終わりなのか……。いや、何故、自分はそんなことを考えられるんだ？
そう考えたとたん、阿九斗は自分の目がいきなり開かれたように感じた。
阿九斗は客間で立ち尽くしており、依然として洋蔵は正座したままだった。周囲を見回すと、ころねが表情一つ変えずに——何があろうと変えないに違いないが——座っている。
「何故、いきなり立ち上がったのです？」
ころねが聞いた。
——ということは、これは現実じゃない……。
阿九斗は首筋に手を当てた。別段、どうもなっていない。
「反応はお見事。さすがに魔王になると言われた人だ」
洋蔵が自らの膝を叩いた。
見れば洋蔵は刀すら持っていない。考えてみればそれはそうだ。武器を持っていないとわかっている客の前に帯刀して現れる主人はいない。
「幻覚……ですか」

阿九斗はつぶやいた。理屈はわからないが、なにやら幻を見せられたことは間違いない。ただひとつわかったことは、その幻が現実味のあるものだったことだ。

――洋蔵さんが実際に刀を持っていたら、現実にもまったく同じ事ができたに違いない。

阿九斗にはそう確信できた。

「ちょっとした芸のようなものだが、どうだったね？」

洋蔵が聞く。その口調に言外の意味があるのを阿九斗は読み取った。

「幻覚とはいえ、今の動きは……。その気になれば同じ結果になったということですね」

阿九斗がそう告げると、洋蔵はにやりとする。

「その通り。我が家に伝わる術だ。幻覚だけでも繊細な人間であれば、精神的なショックで死にかねないが、君なら大丈夫だろうと思ってね。意地の悪い話だが、性分というやつかな。試さずにはいられなかった。実際に仕掛けたらどうなるのだろうと、この年齢になっても考えてしまうんだよ」

――実際に仕掛けたらどうなるかを事前に察知できるということか。力量に差が有れば争う必要はない。結果が見えるのだから。が、力量が同格で、どうしても避けられない戦いなら、実際に仕掛けるとき、微妙に仕掛け方を変えれば、まず相手に負けることはない、というわけか……。

阿九斗はそう読み取った。さらに進んでこう考える。

――性分とは言ったが、この人がただ単純にそんな意地の悪いことをするはずがない。政治的な話というのはすなわち、僕が洋蔵さんの監督下に入るということだろう。力量差をわからせ、僕が逆らう気を起

こさせないようにとの配慮だろう。
　阿九斗は正座をして、頭を下げる。
「感服しました。今後、末永くよろしくお願いしたいと思います」
「いや、頭を上げてくれ。こちらも魔王（まおう）になる男と聞いていたものでね。少しばかり意気込みすぎたようだ。ましてここまで良い青年であるならば、こちらからお願いしたいくらいだよ。こちらこそよろしくお願いする」
　気分良く笑って洋蔵は言ったが、ふと目を細めてこう続けた。
「ところで、実際に仕掛けたら、どうなったと思う？　本心が聞きたいね」
　阿九斗は不意にそう聞かれて戸惑（とまど）ったが、照れくさそうに微笑む。
「洋蔵さんも本気ではなかったでしょうから、なんとも言えません。しかし、それなりに癖（くせ）のようなものがわかりましたので。あと一度見せていただければ結果は変えられます」
　あまりに屈託なくそう言う阿九斗に、洋蔵は一瞬（いっしゅん）目を見開いたが、それは怒（いか）りよりも驚（おどろ）きによるものだった。阿九斗自身はそれほど意識してはいなかっただろうが、殺されるかもしれない技をもう一度かけてみろと平然と言い放ったわけである。
　洋蔵の表情はすぐに喜びに変わる。
「決めた。これで君は我が一族だ。すぐに酒宴（しゅえん）を用意させよう。いや、君は茶か。ともかく飯は地物の最上級を用意させていただく。くつろいでいてくれたまえ」

――とにもかくにも気に入られたらしい。これで服部家が僕の後見になってくれたということなんだろう。いろいろ勉強して、立派に政治のことも考えられる男にならねば。

阿九斗はのんびりとそう考えながら、客間を出て行く洋蔵を見送って頭を下げた。

○

酒宴は盛大なものになるようだった。畳敷（たたみじ）きの広間にずらりと並べられた膳（ぜん）には山海の珍味（ちんみ）が山と盛られている。一見、無造作で野趣（やしゅ）にあふれた山賊（さんぞく）料理のように見えるが、近づいてみれば相当に手間のかけられていることがわかる。一族総出の上に、屋敷（やしき）に住まう忍者（にんじゃ）たちも参加するようで、広間にはかなりの人数が集まっている。大会社の温泉旅行というのが貧乏（びんぼう）暮らしだった阿九斗にとっては一番わかりやすい表現というところ。

阿九斗は洋蔵の脇に座らされている。上座である。これまでそんなところに座ったこともないので、いまいちどう振（ふ）る舞ってよいのかわからない。

洋蔵を挟（はさ）んで反対側には絢子が座っている。絢子は緊張（きんちょう）している、とかいう言葉が馬鹿（ばか）らしくなるくらいにガチガチになっている。関節がカタカタと音を立てそうな仕草で座り、洋蔵が話しかけても上の空で答えている。絢子の隣（となり）にはゆう子が座っている。上座にあたる場所にいるのはそれで全員。ヒロシは一番下座に座らされていた。

この酒宴の様子を見て、どうやらこの場も自分を試す試験のようなものではないか、と阿九斗は思った。洋蔵の挨拶がはじまり、それはざっくばらんなものだったが、最後に阿九斗にも挨拶を求めた。阿九斗の試されているとの思いは確信に変わった。

「……この家の一員として迎えることになった紗伊阿九斗君に挨拶をしてもらおう」

そう促されて阿九斗は立ち上がったが、列席の忍者一同――さすがにこの場では覆面はしていない――からの拍手は一切なかった。あからさまな敵意が目に宿っている。

――なるほど。彼らに納得してもらわなくてはいけないんだ。

「僕はこれよりこの服部家にお世話になります。皆さんにご迷惑をおかけすることになるかもしれない。しかし、僕は自分の特殊性については強く自覚しております。すなわち、僕の行動が与える政治的な影響力についてです」

阿九斗がそう言うと、座の全員が彼を注視した。それまでささやきあっていた者などもいたが、静まって次の言葉を待つ。

「政治的な影響力といっても、それは負の力です。僕の行動が誰かを怒らせる。しかし、本来、力には善悪などありません。それは影響力についても同じこと。ならば、それがなぜ負の力になったのか。人々は自らが産み出した世評に自らも惑わされているからです」

阿九斗の抽象的な言葉に、周囲に戸惑いの空気が拡がる。

「権力もその本質は世評に他ならないはず。ならば、僕は自らの意志で世評を作り出す側に回りたいと思います。これより私人として服部家に貢献し、服部家の名を高めていく。それが絢子さんへ報いることとなると考えています」

　皆はどよめいた。その言葉は魔王と呼ばれた阿九斗が素直に服部家に屈服したことを意味していた。が、それ以上に世評を作り出すという挑戦的な発言は、権力闘争に自ら参戦すると宣言したようなものだった。これが他の場所であったなら「魔王が世界征服の意志を明らかにした」と受け取られてしまっただろうが、ここは服部家だった。スハラ信者の武闘派たちは、この言葉を「頼もしい」と感じていた。

「これは……なんと驚いた」

「こんなヤツを主人として迎えるのかと戦々恐々としていたが」

「実に頼もしいことだ。絢子様はこのような者を尻に敷くか」

　その反応に阿九斗は戸惑うが、ともかくも挨拶を続ける。

「僕はここで世界のことを学ぼうと思います。服部家の力を利用させてもらいます。しかし、それは服部家を私欲のために使うということではありません。信用できない方もいるかもしれない。僕が異教徒であることもある。それでも僕が絢子さんを裏切らないことだけは約束します」

　阿九斗は絢子を見た。

　絢子は阿九斗の視線に驚き、背筋をぴくりとさせる。それからしばらくして阿九斗の言葉の意味を認識したらしい。絢子は強ばらせていた顔を歪ませ、それを隠そうと手で頬を覆った。それでもいきなりあ

ふれてくる涙を止められない。

――そ、そんなに感激することかな？

阿九斗はちょっと格好をつけただけだったので、そこまでの反応に驚く。だが、その涙は宴席に集まっていた忍者軍団を凄まじく感動させた。

「うぉおお！」

「幸せになれよぉお！」

「許す！　今まで許さなかったが許す！」

座敷全体に、多数の忍者のどよめきというより絶叫が響く。阿九斗は自分の言葉の影響についても状況についてもいまいちわかっていなかったが、そこから一気に盛り上がった宴席は阿九斗にとやかく言わせる隙を与えなかった。

酒と肴と興奮した声が飛び交い、誰が言うともなく宴は無礼講に突入する。

阿九斗は次々やってくる忍者に目の前で泣かれ「お嬢を幸せにしてやってくれ」と酌をされ続けた。わけもわからず曖昧に挨拶をするうち、すっかり頭がぼやけてしまう。

絢子は涙も収まり、幸せそうな顔で食事をしている。挨拶にやってくる忍者たちに気分良さそうに対応している。ただ、どうしても阿九斗の顔を見られないらしく、そちらに顔を向けもしない。

そしてヒロシはどういうわけか忍者に気に入られ、アイドル談義に花を咲かせていた。

「だからゆう子お嬢がこれからさらに売れるためにどうすればいいかって話なんだよ」

「アイドルとしてなら最近売れてきた千里とか障害になるよね」
「いや千里ちゃんは古いタイプのアイドルっすよ。恋人がいるとかスキャンダルで潰れるタイプの。恋人がいたくらいでファンが離れるのは、処女性とか恋人幻想を利用する古いタイプのアイドルっす。ゆう子ちゃんは違うっす。奔放な性格なのに、多才だから恋人幻想を起こさせにくい」

ヒロシのアイドル論に忍者たちがうなずく。

「おお、さすが学院生徒」
「インテリだなー」

するとそれまで不機嫌そうにしていたゆう子も、突然に「歌う」と言いはじめ、カラオケセットを用意させた。

ゆう子が自分の持ち歌を歌うことで宴は最高潮となった。

阿九斗はこれまでの生活ではあり得ない幸せを味わっていた。その幸福が服部家の皆からどうして与えられたのかわかってはいなかったのだけれども。

○

夜になっていた。絢子は一人で部屋にいて、いきなり不安に襲われていた。宴会の後に、ふっとむなしくなったり、勢いで言ってしまったことなどを後悔したりすることが誰しもあるが、その感覚に似ていた。不

意に阿九斗の態度に不審(ふしん)を覚えたのである。

——気のせいか？　いや、あいつが妙(みょう)に冷静だったのは確かだ。いつも仏頂面のことが多いが、今日くらいは、からかわれたらそれなりに照れたりするべきなような気もする。

そんなことが気になってくると部屋でじっとしているのが苦しくなってくる。

——いや、やっぱりあいつは何か誤解していないか？　駄目(だめ)だ、気になってしょうがない。そうだ。結局、本人に確認すればいいんだ。そうしよう……。

絢子はそう考えて立ち上がった。

しかし……。

——いや、確認するって、どうやってやるつもりだ？　質問したって「結婚(けっこん)する気あるのか？」って聞くのか？　もしあちらにその気が本当にあったなら、こちらが疑ったこと自体が問題になる。切腹ものだ。

絢子は首をひねった。と、そこに良い考えが浮かぶ。が、それを思いついた瞬間(しゅんかん)に、絢子は身体が妙にほてってくるのを感じていた。

——あいつはまだ改宗していない……。ということは、結婚までは、そ、そういうことをしないという主義だ……。夫婦なら当然することを迫れば、あいつが本当に現状を理解しているかどうかがわかるぞ。

部屋を出ようとして、絢子は襖にかけた手を止めた。

——いや、手を出されたら、してしまうわけだよな。い、いや、もしかして、それはそれでいいのか？　い、いや、そういうことなら、身体を洗ってこないと……。



タンスから着替えを出し、絢子は風呂へ向かうことにする。
――まさか、とは思うが、期待しているのか、私は……。
風呂で身体を洗いながら鏡を見る。顔がにやけていてだらしない。
「う、うわ……。気を引き締めないとあいつに嫌われる……」
声を出して言った。
――き、嫌われるから顔を引き締めるってことじゃないだろう。いや……でも……。もし、あいつが何もわかっていなかったとしても、や、やってしまえば結婚せざるを得なくなるんじゃあないのか？
そう思いついて、絢子は自分でも情けないくらいに顔を赤らめた。
「ゆ、湯あたりしたのだ。早く身体を洗って出よう……」
絢子は必死に身体を磨きはじめた。

○

一方の阿九斗である。彼のために一部屋が用意されていた。入浴して、夜具として持ってきたTシャツと短パンに着替え、布団に潜り込む。
馬鹿騒ぎの後の静かな夜を阿九斗は味わっていた。

——こういう幸せな感覚……。だけど、どうも僕には落ち着かない……。どうにも身の丈に合っていない気がする。慣れていないのかな……。

そんなことを考えていると、ふと部屋の外に気配を感じた。阿九斗は布団の上に身体を起こす。

「どなた？」

阿九斗が聞くと、するすると障子が開いた。膝を立てた姿勢の絢子がそこにいた。

——えっ……。

絢子の様子はいつもと違っていた。夜具は白い薄手の着物で、月明かりに身体のラインが透けて見えている。驚かされたのはその表情だった。緊張しているのはこれまでと変わらないが、ほんのりと上気した頬からはなんともいえない大人の雰囲気が感じられる。

「ど、どうしたの？　こんな時間に」

阿九斗が聞くと、絢子は障子を後ろ手に閉めて、伏し目がちに言った。

「わかるでしょう？　それとも、わからない？」

その口調があまりにどきりとさせられるものだったことに阿九斗は戸惑った。

無言でいると、絢子が歩を進めてきた。薄物一枚の姿だが、少し着崩れしている。開いた胸元から白い膨らみがじかに見えることで、下着をつけていないとわかった。歩いていることで着物の裾が大きく拡がり、白い太ももが露わになる。まさかそちらもつけていないのか、と阿九斗は焦って目をそらした。

「ね、ねぇ、もう遅いし、話なら、明日でも……」

「あ、明日になったら、人が来ちゃうでしょう?」
絢子のうわずった声が聞こえたのは、阿九斗のすぐ近くだった。目をそらしたせいで、すぐ近くに絢子が座ったことに気づかなかったのだ。
そちらに目をやり、阿九斗はすぐに息をのんだ。
絢子の目が怯(おび)えたように潤(うる)んでいた。震(ふる)える手で自らの着物の胸元と裾を拡げている。
——あ、あれ……。いつもの服部さんと違う……?
その様子は阿九斗を戸惑わせた。
これまでの絢子と違い、しおらしさのようなものが感じられる。
「無理をしたら駄目だよ」
阿九斗は手を伸(の)ばして絢子の着物の前を閉じてやる。
「む、無理?」
絢子がはっとして顔をあげた。
「だって、いつもの服部さんじゃあないもの」
絢子は絶句した。
「ちょ……」
「もしかして、家のために無理をしているとか、ない?」
阿九斗が聞いた。

絢子はうろたえる。

「こ、こら、何を……」

「だって、そんな態度、僕が好きな絢子さんがすることじゃないからね」

そう阿九斗が言うと、絢子は絶句した。どうしたらいいかわからなくなってしまったようにしばらく口をぱくぱくとさせる。

「だって、そうじゃないか。僕がこの家の監視下に入るってことは、改宗しないといけないんだろう？　でも、僕はまだ改宗前だ。だから、そういうことは禁止されている。それを破らせようとするなんて……」

阿九斗がそう続けると、絢子の表情がみるみる曇る。

「ご、ごめん。失礼なことを言った。でも、僕はきちんとした形でこの家のお世話になりたいと……」

狼狽する阿九斗だったが、その言葉を遮って絢子は言った。

「馬鹿……。そうだよ、お前はそういう奴だ……。お前は私と結婚するという話を聞いていなかったものな……」

――け、結婚！

阿九斗は絶句した。

「すまない。すべて承知した上で来てくれているものかと……。私が説明しなかったのが悪いんだ」

絢子がうつむいた。

阿九斗は慌ててその肩に手をかける。

「ごめん。まるで気づかなかった僕のせいだ。君が言い出せなかったのも、結婚を嫌(いや)がっていたからなんだね」

「え、おい……ちょっと待て……」

「悪かったよ。家の命令とあれば断れないものね。僕が本当に君のためを思っていれば、ちゃんと最初から断れ……」

阿九斗は言葉を途中(とちゅう)で止めた。

絢子が下を向いて笑い声をあげはじめたからだ。

「はは……とんだ馬鹿だな、私は……。お前は根っからそういう奴だもんな……」

「な、何がそういう奴、なんだい?」

阿九斗が手を伸ばして絢子の顔をあげさせる。

絢子は泣いていた。

驚いて手を放すと、絢子はもうたまらなくなってしまったらしく、しゃくり上げながらうわずった声で言う。

「だから……だから、そういう奴だと言うんだ……。私はひとりで勝手に盛り上がってしまって……」

絢子は、顔を赤くして乱れた着物の前を合わせた。そして身体を丸めて泣き崩(くず)れた。

「今日のことはすべて忘れてくれ……」

絢子は言った。

「ご、ごめん、僕の方こそ……。で、でも……」

阿九斗の言葉は最後まで続けられなかった。いきなり槍が天井から降ってきたからだ。

ズドン。

さすがの反射神経で阿九斗はそれをかわしたが、そうしなければ阿九斗の心臓に槍が突き立っていたはずだ。槍には明確に殺意があった。

——うわ！

阿九斗は飛び退く。槍は一本だけではなかった。天井から、畳の下から、障子の背後から、次々と槍が阿九斗を狙う。

ズドン、ズドン、ズドン、ズドン、ズドン、ズドン。

途切れなく突き出される槍をかわし、阿九斗は部屋から外に転がり出た。そして中庭で背後を振り返り、状況を理解した。

もっとも確認するまでもなかった。阿九斗が寝ていた部屋の周囲の隠れることができそうなあらゆる場所に、覆面をかぶった忍者が多数、潜んでいた。

「お嬢を泣かせたな！」

「貴様！　最初から服部家をたばかるつもりで！」

忍者たちが口々に叫ぶ。

「誤解だ！　それになぜ覗いていたんだ！」

阿九斗は叫ぶが、今回ばかりは阿九斗にも相当に責任がある。この場は退散するしかなさそうだった。

「服部さん、ごめん！」

阿九斗は枕元に置いていた着替えをひっつかんで走り出し、屋敷の壁を乗り越えて森の中へと飛び込んだ。

「伊賀忍軍の威信にかけて逃がすな！」

「おおお」という叫びが森の中を追ってくる。

――反射的に逃げたけど、これは一度捕まってしっかり謝らないと駄目だな。

まるで道のわからない場所で多数の追っ手から逃げ続けることなどできるはずがない。阿九斗は双方傷つかずにうまく相手に捕まる方法はないかと考えはじめた。

しかし、どうやら考える隙さえ与えてはもらえないらしかった。足の速い追っ手の一人が木々の枝を飛びながら迫り、跳び上がって阿九斗に背後から斬りかかってくる。

――くっ！

阿九斗は振り返り、魔術で対抗しようとする。が、それよりも早く、斬りかかってくる忍者の姿がいきなり闇に消えた。

「え？」

一瞬、戸惑った阿九斗だったが、すぐにその忍者の姿を見つけ、何が起こったのかを覚った。斬りかかってきた忍者は足にロープを巻き付けられ、逆さづりになっている。彼は罠にはまったのだ。

――罠？　こんなところに？
ここも服部家の敷地（しきち）であろう。それに屋敷の者がかかるはずもない。周辺に誰か別の者がいるということになる。
阿九斗が謎（なぞ）の者の出現を警戒（けいかい）していると、そこかしこで罠が発動する気配がした。忍者たちの悲鳴が聞こえる。自分の屋敷の周辺で安心していたことと、怒（いか）りにまかせていたことで普段（ふだん）ならはまらないような罠にもかかっているようだった。
が、やがて警戒する態勢に入ったのか、忍者たちの気配が静まる。そのタイミングを見計らっていたかのように、阿九斗の前にするりと滑（すべ）り出してきた影（かげ）があった。
「誰だ？」
阿九斗が身構えると、その人影は聞き覚えのある声をあげた。
「誰だ、とはご挨拶（あいさつ）じゃないか。逃がしてあげようってんだよ？」
闇の中から一歩踏（ふ）み出してきたその人物は、にやりとして阿九斗に指を突きつけてきた。
長い髪（かみ）をポニーテールにした少女。照屋栄子だった。
「君か」
阿九斗は身構えた。
栄子は意地の悪い顔で微笑（ほほえ）む。

「身構えることはないだろうさ。あたいがいなかったら、アンタがあの忍者をぶっ殺してたところじゃないか。感謝して欲しいね。あたいの罠は命まではとらないからね」
「感謝？　それにしてもタイミングが良すぎるけどね。恩を売るつもりにしても妙だな。ずっと監視していたのか？」
「そういうこと。大きい声じゃいえないけど、服部家にだって照屋家の密偵はいるからね」
「じゃあ、今回のことも……」
「知っていたさ！　ああ、おかしい。マジになっちゃってさ！」
　栄子の笑いは阿九斗には不快だった。
「だったらどうしたって言うんだ？　用事がないなら、感謝を述べさせてもらってここを去らせてもらいたいね。忍者のみんなも落ち着いてから、話はできるだろうし」
　そう言い放つ阿九斗に、栄子は追従の嫌らしい笑みを浮かべる。
「いやいや、怒ることはないじゃないさ。じゃあ何の用事だか言っておくよ。あたいの家に来ないかい？」
「君の家に？」
「照屋家にだよ。服部家より格は上、アンタにも都合はいいだろうさ」
「断る」
　阿九斗は即答した。が、栄子は引き下がらない。

「誤解があったとはいえ、服部家に取り入ろうとしたアンタじゃないか。それなら都合が良いのは照屋家の方さ」
「僕（ぼく）は取り入ろうとしたんじゃない。成長しようとしたんだ」
「言い方の違いだけじゃないさ。ね、アンタ、あたいとくっつかないかい？　あたい、これからちょっとばかり出目が良い博打をしようってんだ」
「なんだい、その言い方は。ちょっと不良っぽすぎる。好きになれない」
　阿九斗は不快感をあらわにしたが、次の栄子の長台詞は衝撃的（しょうげきてき）なものだった。
「あたいの父親が大司祭なのは知ってるだろう？　その大司祭は暗殺をすることがあるってのは知ってるかい？」
　――なんだって？
　阿九斗は耳を疑う。
「スハラ神が危険とみなした相手を殺していくのさ。まだ何も行動を起こしていない相手でも、反逆の計画を立てていたりしたら殺されるって寸法さ」
「それならなおのこと照屋家は僕の気に入らない」
　阿九斗が表情と言葉を強ばらせる。
　ところが、栄子は余裕（よゆう）の表情で指を一本立てて左右に振（ふ）って見せた。
「早とちりはいけないさ。これから照屋家は変わるってこと。アンタが入ってくれればさ」

　どう言われても、阿九斗には栄子の誘(さそ)いに乗る理由はなかった。

「だから断ると言っている。僕にも意志はある。学院に入って、守りたい友人も守りたい生活も出来た。そういうことだ」

　阿九斗は言い切った。

　すると、栄子の表情が厳しいものに変わる。

「アンタ、あたいに逆らうってのかい？」

「逆らうもなにも、そちらが勝手にやってきてわけのわからないことをまくし立てているだけじゃないか」

「畜生(ちくしょう)。頭のカタいことだね！　ああ、あたい、アンタのこと本気で好きになりそうだったからこうして誘ってやったのにさ！　フン、勝手にすればいいさ。その友人とか生活って奴はもうすぐ消えてなくなるんだからね！」

　栄子が感情的にそう言い放った。

「なんだと？」

　阿九斗がその言葉の不穏(ふおん)さに肩をぴくりと動かす。

　と、栄子が残忍(ざんにん)な笑みを浮かべた。

「アンタの言うその友人ってのには、あの馬鹿(ばか)な赤毛も含(ふく)まれてるんだろ？」

「そいつはどういう意味だ？」

　阿九斗の表情が歪(ゆが)む。

栄子は大笑(たいしょう)した。

「あははは！　我が家の暗殺の話はしただろう？　今回のその標的がなぜかあの赤毛なのさ！　笑っちゃうだろう？　まったく無害としか思えない馬鹿女なのにさ！」

「貴様！」

阿九斗が栄子の笑いを遮って叫ぶ。

「ひゃ！」

栄子が短い驚(おどろ)きの言葉を発して、動きを止めた。

熱い空気が渦巻(うずま)いていた。阿九斗の身体から熱が発せられていた。周囲のマナにエネルギーを注ぎ込み、それでもまだ消えきらない熱が体内のマナを煮(に)えたぎらせているのだ。

「ま、待った！　やるのはあたいじゃないよ！　それならわざわざ教えてあげるもんか」

栄子が冷(ひ)や汗(あせ)を流しながら弁解する。

「それならば何故、そんなことを教えた？」

阿九斗の問いは有無を言わせぬものだった。圧倒的(あっとうてき)に強い相手を前にしていることを本能で悟(さと)ったのか、栄子は素直に答えた。

「だ、だから、アンタがあたいとくっついてくれるといいと思ったのさ！　それに照屋家のやってることも間違(まちが)いだと思うからさ」

命乞(いのちご)いをするときのような声を栄子はあげていた。

「勝手なことを。どけ。学校に戻る」
　阿九斗がそう言いながら手を振ると、熱風が吹いた。栄子はそのために道を空けなければならなかった。
　しかし、前に踏み出そうとした阿九斗に背後から別の声がかかる。
「ちょ、ちょっと待ちなよ！　あんた、どんなつもりで家に来たのさ！」
　ようやく追いついてきたらしいゆう子が阿九斗の背中に向かって叫んでいた。騒ぎを聞きつけて追ってきたらしい。
　阿九斗は背後を振り返った。
「詫びなければならないことはあるけれど、後にしてもらおう」
「そ、そんな勝手な言い方……。ひどいじゃない！　お姉ちゃん泣いてた。何をしたの？」
　ゆう子は口だけは威勢がよかったが、その表情からするに必死に恐怖と闘っているようだった。阿九斗の身体から発せられている波動に身体が反応しているらしい。
「こちらも悪かった。後で話す。どうやら根本的なところで僕が間違っていたらしい」
　阿九斗は言ったが、ゆう子は恐怖に震えているくせになおも引き下がらなかった。
「話なんてもうしなくていいよ！　もうかかわらないでよ、家に！」
　ゆう子がそう言うと、さすがに阿九斗もゆう子に向き直った。

「間違いは認める。だが、もしさっきの言葉が本当なら、僕はスハラ神についても許せないと思っている。確かに君の家とかかわるかどうかなんてそれを確認してからの話だ」
　阿九斗は厳しい目で栄子を見やった。
「ほ、ホントに決まってるじゃないさ！」
　栄子は慌ててその場から木の上に跳び上がった。
「じゃあ、あたいは先に逃げるとするよ。後はよろしく！」
　栄子は逃げ去った。だが、逃げる彼女の顔には笑みが浮かんでいた。まずは計画通り、とでもいうように。
　残されたゆう子は恐怖と戸惑いにその顔をゆがめていた。ゆう子も栄子との会話の最後の部分は聞いていたらしく、首を横に振る。
「暗殺についてなんて知らないよ！　それにそれは照屋の仕業だろ？」
「では、自分は関係ない、と？　それともやはり暗殺は照屋栄子のでまかせだと？」
　阿九斗が聞くと、それに答えたのは後を追ってきた別の声だった。
「どうやら事実です。会話は聞かせてもらいました。けーなさんに暗殺命令が出ているかもしれません」
　その声に阿九斗とゆう子は振り返る。
　そこにいたのはころねだった。一緒にヒロシもついてきている。
「かもしれない、だって？」

阿九斗は再度確認するように聞いた。

ころねはうなずく。

「直接に神に問い合わせていますが、回答がありません。通常、そのようなことはあり得ないんです。こちらからの問い合わせには、なんらかの回答をしなければなりません。しかし、この件だけは神が無言を通しています」

ころねは淡々（たんたん）と言った。

「では、神が暗殺を指示しているということは事実なのか？」

阿九斗が怒りを露わにしている。それにはヒロシでもひるむほどだったが、ころねは平然と答える。

「暗殺指示があることそのものは事実です。しかし、これまで暗殺されたのはテロ計画発動寸前のテロリストばかりです。不二子（ふじこ）さんがご存命であることからわかる通り、黒魔術師（まじゅつし）ですら暗殺の対象とはなりません」

「じゃあ、今回のけーなのことは何だ？」

「わかりません。人造人間人生ではじめてです。回答をしないということは、答えられない事情があるということです。すると、神が何か間違えを犯したかもしれないということになります」

ころねが断言した。

「間違えたのでなければ、神がエゴを発揮したということか？　どちらにせよ許せるものかよ」

阿九斗はころねに向かって手を振る。

「学園に転送してくれ。急いでけーなを助ける」
　が、ころねは首を横に振る。
「何か誤解してはいませんか？」
　そしてころねは手を拡げた。行くな、というように。
「私は監視員（かんしいん）であり、マークト神の遣（つか）いです。あなたの違法行為（いほうこうい）をとがめる役割があるのです。協力するなど、とてもありえません」
「違法行為だって？」
　ころねが言った。その表情からは何も読み取れない。
　阿九斗がころねに歩み寄る。
「そうです。間違っていても神の決定は決定。服部家でおとなしくしていてください」
　阿九斗ところねは向かい合った。
「僕がそれでも行くと言ったら？」
「許されません。全力で阻止（そし）します」
　ころねはそう言って、ポシェットに手を突っ込んだ。中から取りだしたのは、彼女の身長ほどもある巨大（きょだい）なレーザー砲（ほう）だった。それを軽々と持ち上げると一回転させ、ストラップを肩にひっかけて構える。
「戦闘（せんとう）機能は充実（じゅうじつ）しています。私、強いですよ？」
「やりたくは……ないけれど」

そう言って阿九斗が身構えるより早くころねが動いた。
しかし、ころねの動きは緩慢なものだった。すたすたと歩いてきて阿九斗に抱きつく。その抱きつき方も恋人に甘えるかのような緩いものだ。
「さぁ、捕縛しました。これで動けないでしょう？」
ころねがそう言って顔をあげた。阿九斗はころねの目を見た。そこにはいつもの無表情とは違う表情があった。抱きついたことには裏の意味があるという含みだ。「わかるでしょう？」というように阿九斗を見ている。
「逃げられませんよ。武器を使うまでもなかったですね」
淡々ところねは言う。背の低いころねが阿九斗の胴に手を回しているのだから、阿九斗の手はがら空きになっている。
「ありがとう」
阿九斗は言った。この姿勢で手が自由になるということは、ころねの尻に手が届くということだ。
「なぜお礼を言われなければならないのですか？」
ころねはとぼけた。
阿九斗はころねのスカートの中に手を入れた。
「あっ……！」

短い声をころねはあげた。阿九斗は一瞬躊躇(いっしゅんちゅうちょ)したが、いつもの冗談(じょうだん)ということがわかっていたので、指で尻尾(しっぽ)を捜(さが)し当て、それを引っ張った。

ブン、と音がして、ころねの目の色が消える。機能を停止したのだ。尻尾が人造人間のスイッチになっているのである。



阿九斗はころねの両腕を開いて身体を離すと、その場に座らせた。
「ア、アニキ……」
一連のやり取りを見ていたヒロシがおずおずと話しかけてくる。
「どうした?」
「い、いや……そりゃあ、今の話が本当なら、いろいろまずいと思うんすよ。でも、けーなちゃんを助けたら助けたで、その後、どうなるんすか?」
ヒロシの問いかけに阿九斗は答えられなかった。そんなことわからなかったからだ。だが、それにゆう子が答える。
「照屋家に逆らったことになる。スハラ神に逆らったことになる。そうなったら服部家はまずいことになるんだよ!」
「そ、そうっすよ。それを心配したんす」
ヒロシが言った。
「だからさっき言ったでしょ! 縁を切って! もう家とかかわらないで!」
ゆう子が感情的に叫ぶ。
阿九斗とゆう子の間に入ったヒロシが、おろおろとしつつもしっかりとした口調で二人に告げた。
「いや、そうじゃなくって、なんか上手い方法があるはずっす。アニキが言ってたんすよ、全部上手くやってみせるって。ほら、例えば、マナで検知できない相手がけーなちゃんを助けるとかすれば」

「それがブレイブとかのことを言っているなら……」

阿九斗はヒロシを見下ろしながら続ける。

「……どう行動するかわからない相手の助けを期待しても仕方がない。それにブレイブは悪人を排除した。それを僕は見たことがある。そして魔獣を事前に殺している。それじゃあ反逆者を事前に殺していくスハラ神のやり方と何も違わない。それに頼らずとも確かに上手い方法はあるはずさ。頼るべきはブレイブじゃない」

阿九斗が言うと、今度はヒロシが感情的になった。

「強さってそういうものでしょう？　家族や近しい人を守るために、それに害を為す人は倒さなくちゃならない。そうやって人間は何千年もやってきたんだ。アニキだって感情的になってるじゃないっすか。けーなちゃんを守って委員長を犠牲にするつもりだ！」

「それは違うよ。ようやくわかってきたところだ。僕にできること、僕の目指すものが」

阿九斗はヒロシの前から離れた。

「待ってくださいよ、アニキ！　アニキが動いちゃ駄目だ！」

ヒロシが叫ぶ。

「アニキが動かずにいれば、なんとかなるっすよ。だから……！」

その制止を阿九斗は聞かなかった。ヒロシから遠ざかるように歩いていこうとする。

「第一、歩いてどこに行こうってんですか！　間に合いやしませんよ！　今回ばっかりはアニキが間違ってる！　知らないんですか？　アニキが魔獣を活性化させてるんですよ？」
　そのヒロシの言葉に、さすがに阿九斗の歩みは止まった。
「それでゆう子ちゃんも怖(こわ)がってるんだ。彼女、魔獣のマナが体内に入り込んじゃってるんすよ！　それがアニキのせいで暴れだそうとしている！」
　ヒロシはそう言ってから、しまった、と口をつぐんだが、遅(おそ)かった。
　阿九斗は哀(かな)しげな顔で振り返(かえ)り、ヒロシに言った。
「それなら、君は彼女を守ってあげてくれ。僕にはどうやらしなくちゃいけないことがある。ようやくわかったんだ。僕は行くよ」
　阿九斗は再び歩きはじめる。
「だから、なんで言うことを聞いてくれないんすか！」
　ヒロシは叫んだ。だが、阿九斗の後を追わなかった。ゆう子が苦しみ、ついにうずくまってしまったからだ。その身体を抱き起(お)こし、ヒロシは戦慄(せんりつ)した。ゆう子の首筋に黒い血管が浮き出(で)ていたからだ。マナが暴れているに違いない。
「アニキ！」
　ヒロシは呼びかけた。
　阿九斗は足を止めた。

しかし、それはヒロシの呼びかけによるものではなかった。

「いや、君のことは本当に気に入っていたのだけれどね。やはり運命かな、こうなるのは」

太い声が阿九斗の進む先の闇から聞こえてきた。

ぬう、と姿を現したのは服部洋蔵だった。戦装束に身を包んでいるが、穏やかに微笑んだ表情をしている。

「二人の娘を泣かされて黙っている父親はいないからね。相応の覚悟はしてもらう」

「それについてはお詫びします。しかし、暗殺の件、知っていたとしたら服部家には従えません」

阿九斗は言った。と、洋蔵の顔から笑みが消える。

「若いね。まだヒロシ君とやらの方が大人の言い分だったさ。誰かが汚れ仕事をやることで平和な世の中というものがある」

「根本的に解決する方法がある……。という気がするんです。運命というなら、僕はそれに突き動かされている。僕は行きます」

「大人は根本的な解決など期待しないものだよ。今回の件、もし神が間違えていたとしても、それが判明したあとでどうにかしようと考えるだけのことさ」

「あなたの子供が犠牲になるようなことがあったとしても?」

「くどいね。若いよ。家の存続、社会の存続というのは、そういうものなのだよ。文明が進歩しても、いや、進歩したからこそ人は家柄や血筋といった価値観を規範としなければ社会が保てない」

「価値観が宗教となれば争いの元だ」

「脱宗教(だつしゅうきょう)は宗教よりも機能不全の価値観を大量に生み出して効率的に人を殺したよ。いや、もう議論はいいだろう。家の者は帰らせた。私たちだけだ」

洋蔵が、にい、と笑った。

「僕を殺してもかまわないという社会にあなたは生きているのですね」

阿九斗は聞いた。

「残念ながら、そうだ。だが、対応を間違えたのは君だ。本当ならこちらの身内にもなれたのだよ」

「僕は僕のやり方を通す。あなたにはこの場を空けてもらう」

阿九斗は身構えた。

3　本気ですごい誕生日

『コンスタン魔術学院』は過去に要塞だった歴史がある。しかし、その名残は地下に残っているのみで、校舎は戦後に増築されたものだ。それ故に地下には迷宮めいた塹壕があるが、建物は襲撃に備えた構造にはなっていない。

　そのため今回の襲撃は照屋敬三には簡単な仕事に思えた。しかも事前に学院の完璧な見取り図と警備計画は入手済みである。裏ルートからではなく、公開されているものだけで十分だった。

「時計を合わせろ。3、2、1……」

　敬三は部下の三人とともに学院の裏庭に潜んでいた。その四人全員が忍者装束に身を包んでいる。マナに反応しづらい布でできており、敏感でないセンサーならごまかせることもある。また焦げ茶の色はマナ感知よりも確実な索敵方法である視認を夜間において困難にするものだった。

　全員が腕時計を合わせ、服に仕込んだ刃物の確認を行う。古典的な装備に古典的な作戦だが、暗殺ともなれば今でも最も有効な手段であった。

　敬三の部下は、おそろしく背が高くひょろりとした体形の者、覆面から覗く目がやたらにぎょろりとした者、極端に背が低く丸い体形の者の三人だ。敬三はその個性的な面々の一人に短く指示を出した。

「〝目〟。ルートの再確認を」
目と呼ばれたのは、もちろんぎょろりとした目の男だった。彼はうなずくと、自らの指を右目に突っ込んだ。それを見た誰もが目を覆うような光景だった。彼はなんと自らの目玉を指でえぐり出したのである。
しかし、〝目〟は痛みをまるで感じていないようだった。驚いたことに、つまんだ眼球を指ではじいて飛ばす。ぽとりと地面に落ちた眼球は、わずかな距離を転がり、そこで、ひょいと立ち上がったのだった。
眼球に小さな足が生えている。その眼球の後ろからは細い糸が伸びている。視神経だ。それがうつろになった目の中まで繋がっている。
〝目〟は小動物に指示を出すかのように手を動かした。と、視神経をひきずったまま眼球は前へと走っていく。マナを介さずに遠距離を見る偵察手段であるらしい。マナを使用すれば、必然的に相手にも感知されやすいわけだが、この歩く眼球はマナを必要以上にかき混ぜはしないため、それを避けることが可能であるようだ。
眼球はすたすたと歩いて、校舎の雨どいを器用に登りはじめた。一階の空気入れ替え用窓にたどり着くと、その間から中に入り込む。
しばらくしてから〝目〟が敬三に報告する。
「確かに警備態勢が変更されていますね。巡回の監視装置が予定と違う時間に通過しました。標準的な警備パターンにあてはめて全体の予定を出しますか?」

〝目〟が時計に地図と警備パターンを表示して敬三に差し出す。敬三は、それを見ただけで学院の警備態勢を見抜いていた。

「これは標準的な警備パターンを使用していない。見せかけだけだ。ランダムなパターンの警備装置を増やしている可能性が高いな。相手もなかなか考えてはいる」

　敬三は、背が低く、丸い体形の男に指示を出す。

「〝袋〟、ダミーの監視装置を四つだ」

〝袋〟と呼ばれた男は、覆面をずらすと口の中に手を入れた。そして、その手を引き出すと、口からずるりと、鳥に似た飛行型の監視装置が出てくる。小鳥ほどの大きさである。通常ならば口に入っているとは思えないサイズだ。しかし、〝袋〟はそれを次々と四つも体内から引きずり出して見せた。これもマナにより感知されないために開発した物品輸送方法だろう。ころねが持っているポシェットのようなシステムでは物を出すたびに大量のマナを周囲に放出してしまう。

「〝蛇〟、ルートBにダミー監視装置を配置。配置終了後、五分で作戦開始」

〝蛇〟と呼ばれた背の高いひょろりとした男は、〝袋〟が出した監視装置をつかむと、地面に伏せた。そして身体をうねらせるとまさに蛇のようにしゅるしゅると前進していく。その速度たるや短距離選手のダッシュに近い。あっという間に校舎にたどり着くと、身体のうねりだけで垂直の壁を登りはじめた。彼らはマナを放出するような行為をしないという特性があるはずであるから、壁に貼りつく技も、身体そのものを恒久的に変質させてしまってのものだろう。〝蛇〟は人間が入れる隙間などない空気入れ替え用の窓に

頭を押し当てた。そのまま頭をぐいと突っ込むと、なんと硬いはずの頭骨がぐにゃりと変形し、その狭い隙間からずるずると中へ。〝蛇〟の身体は軟体で弾力があるらしく、侵入が終わると、元の形へと戻っていく。

さすがに手に持った監視装置は空気入れ替え用の窓からは入らないが、〝蛇〟は身体を伸ばして、通常の窓にその口をたどり着かせると、口を使って内側から鍵を開けた。

鍵が開くと、さすがに警備装置が反応するはずだ。が、〝蛇〟はすばやくダミーの監視装置を開けた窓から潜入させた。ダミーの監視装置は宙を飛んで、窓が開いたことを感じ取ってやってきた本物の監視装置に襲いかかる。ダミーは本物に一撃を加え、そのクチバシ状の機関を差し込むと、データを乗っ取った。本物は機能を失って落ちる。ダミーは平然と——感情はないのだが——偽の情報を送信しはじめた。これで警備担当者からは、よくある誤報にしか見えないはずだ。

〝蛇〟は単独で校舎の廊下を這っていく。その後ろを〝目〟の眼球が続く。

「ルートBを予定通り進行中」

〝目〟が報告した。〝目〟の本体は敬三の脇にいるのだから、〝蛇〟との連携はこれで保てる。まさに暗殺だけに限れば無敵のチームであった。

「標的は現在、校舎最上階のラウンジ。移動はなし」

〝袋〟が体内から出したマナ感知センサーのモニターを見つつ報告する。けーなの行動がトレースされていた。最上階に人間の反応はけーなのみだ。それに接近しているはずの〝蛇〟の姿はない。

その〝蛇〟は予定の場所の警備装置をダミーに入れ替えていた。〝目〟はそれを確認すると、敬三に報告する。

「監視装置をダミーに変更終了。〝蛇〟より合図。カウント開始」

「五分後に決行」

　敬三は指示した。

〝目〟は自らの眼球を帰ってこさせる。〝袋〟と敬三は潜伏位置を移動しはじめた。そして〝蛇〟はラウンジ脇の消火栓収納ボックス下に潜む。

〝蛇〟が監視しているラウンジは、学生が空を見ながらくつろぐために用意された場所で、かなりの数の椅子とテーブルが用意されている。壁際にはドリンクのサーバーがあるが、今は稼働していない。

　標的――けーな――は、端にあるテーブルにお茶の水筒と弁当箱を置いてその前に座り、ガラス張りの天井から夜空を眺めていた。誰もいなくて退屈をしていたのだろうと思いきや、弁当箱に詰められた白米には、蝋燭が突き立てられている。明日が自分で決めた誕生日だったのだ。けーなは時折時計に目をやっている。十二時ぴったりに自分で自分のことを祝おうと決めているようだった。

　まさに偶然といえば偶然なのだが、〝蛇〟がダミーの監視装置を配置したのが十一時五十五分。作戦決行は十二時ぴったりだ。

〝蛇〟は決行の三十秒前になったのを確認して、潜伏場所から移動を開始した。今回は彼が直接に手を下す役目であった。敬三と〝袋〟は〝目〟の手引きで監視を避けつつ屋上から逃げ出すための手はずを整え、

不測の事態に備える。今のところはすべて順調に進んでいる。朝になれば、誰も気づかぬうちにけーなの死体だけが転がっていることになる。

緊急脱出せよとのサインがないことを確認し、〝蛇〟は椅子とテーブルの脚の間をするすると這いはじめる。けーなの足に〝蛇〟はじりじりと接近。再度時間を確認する。

十一時五十九分五十秒。

〝蛇〟はカウントを開始する。

○

洋蔵と向かい合っている阿九斗の雰囲気は、傍目にもわかるほどに変化していた。ほんの数分前でさえ今の阿九斗とは異なっている。

「君くらいの年齢は事が有れば驚くほどに変化することもあるものだが、それにしても君は度を超している」

洋蔵は言った。

阿九斗の変化は、周囲を取り巻くマナの質に表れていた。穏やかだったのが、怒りによって爆発的に高まり、今は再び沈静化している。だが、エネルギーの総量が衰えたわけではない。静かな怒りが体内に蓄えられ、それがごく僅かな感情の変化にも反応して周囲の空気を緊張させている。近寄りがたい空気にな

ったかと思えば、触れるだけで切れそうな緊張感に変わる。共通しているのは、凄まじいエネルギーをその内側に持っているということだけだ。
「目覚めた、というところかな」
洋蔵の口調は飄々としていたし、顔にも微笑みはたたえられていたが、それでも明白な緊張感が身体の端々から漏れている。
阿九斗はそれには答えなかった。表情にはこれまでと違う落ち着きのようなものがある。
「化け物の誕生に手を貸してしまったかもしれないな。だが、それでも一度格好をつけてしまったら退けないのが大人というものさ」
洋蔵は刀を抜いた。そして、カッと目を見開く。
しかし阿九斗は構わずに前進を開始する。
洋蔵が動いた。
「服部流『乱れ月影』」
裂帛の気合いとともに洋蔵は二体に分身する。絢子が得意としていた技だ。いや、本来こちらがオリジナルなのだろう。確かにその分身技は絢子のそれを遥かに凌駕していた。分身の動きにひとつとして同じところがないのである。絢子のそれはまだ動きの癖のようなものが残っていた。分身と本体がついつい同じ動きをしてしまうのである。だが、洋蔵のそれは同じ身体でありながらまるで別人の動きを展開する。
「きぃいぇえええ！」

二体の洋蔵は絶妙の間で切り込んできた。二体同時攻撃ではない。一体ごとに微妙に間を外しての斬撃である。同時攻撃よりも厄介と言えるだろう。上段を打ち込んで来たかと思えば、その刀が瞬時に下段に変化するようなものである。事実、今の攻撃は一体目が上段に大きく振りかぶった打ち込みで、二体目が足首を薙ぐ打ち込みであった。しかも念の入ったことに、上段は途中で波打つように刀を舞わせる動きが入っている。突きへの変化、あるいは相手の刀の打ち落としを想定しての動きであり、それ単体でもフェイントの効果を生み出している。下段も単純な薙ぎ払いではなかった。途中までは中段の逆胴を狙う動きなのだが、寸前で逆手に持ち替えることで、下がりながら下段を払う動きへと変化している。タイミングの異なる同時攻撃であっても前進して受け止めることでかなり対応はできるはずだが、この組み合わせでは逃れることはできない。

阿九斗は前進して斬撃を受け止める選択をしていた。一撃目のフェイントを見切り、振り下ろされてくる刀の柄の部分をマナで強化した上腕部で突き上げることに成功する。が、その動きのせいで次の下段への変化に対応できなかった。胴への攻撃を受け止めるべく伸ばした腕をあざわらうかのように刀はその軌道を変化させ、踏み出した足に鋭く斬り込まれる。阿九斗の踵が血しぶきをあげた。

しかし、阿九斗は悲鳴をあげなかった。洋蔵も勝ち誇ることはなかった。

「対応は見せてもらった」

洋蔵は刀を抜いた姿勢のままである。阿九斗もその正面で立ったままである。

分身での攻撃は洋蔵が見せた幻覚であった。

「細かい技は使えぬようだな。得意はマナによる肉体強化。だが、それも気が回らぬ部分は強化できぬらしい。斬撃を繰り返せば、君の身体には少しずつ刀傷が増えていく。やがては失血死に至るだろう」

洋蔵は警告のつもりで言った。

阿九斗は無言である。

「私が同じ攻撃を繰り返すとも限らん。変化のパターンはいくつもある。君は先程の幻覚に惑わされ、打ち込みを変えた場合、絶対に防ぐことはできない。私としては、君を殺したくはない。考えを変えないかね？」

そう洋蔵が聞くと、阿九斗はようやく口を開いた。

「決めたんです。ようやくやるべき事が見えてきた。僕は退きません」

しっかりとした決意の感じられる口調だった。

「残念だ」

洋蔵はそう言うと、刀を構えた。

「次は幻覚ではないぞ」

その言葉が終わらぬうち、洋蔵は分身を作り出す。そして阿九斗に落ち着いて考える隙を与えないつもりか、即座に次の打ち込みが繰り出される。

先だっての言葉通り洋蔵の打ち込みは変化していた。一体目は上段への打ち込みである。これに先程の幻覚との変化はなかった。阿九斗はこれも前進して柄の部分を受け止める。しかし、二体目は別だった。

胴に打ち込まれた一撃は確かに変化したが、右手を放すことで柄尻(つかじり)のみで支えられた刀は大きくその軌道を変え、胴への打ち込みの時点で刀を封(ふう)じようとした阿九斗の腕の前をすり抜けていく。すり抜けた刀は左手首が返されたことで上段を逆側に鋭く戻ってくる。

阿九斗は上段左右への攻撃を防ぎきれない。

一閃(いっせん)。

切っ先が血の弧(こ)を描(えが)いて躍(おど)る。

阿九斗の首が宙高く飛んだ。

胴体(どうたい)は立ち尽(つ)くした格好になるが、見事に水平な切り口の首から噴水(ふんすい)のように血が吹(ふ)き出はじめると、ぐらりと揺(ゆ)らいで地に倒(たお)れた。

「殺したくはなかったが」

洋蔵がつぶやく。分身を消し、刀を収めたその目の前に、どさりと阿九斗の首が落ちる。苦悶(くもん)の表情で宙を見ていた。

「意地を張らなければ生きていられたものを……」

洋蔵が首を拾い上げる。

「意地を通すのは僕にしなければならないことがあるからです」

洋蔵はぎょっとした。驚くことなどほとんどない男が、驚愕(きょうがく)に目を見開いた。阿九斗の生首がしゃべっていた。

「ぬぅ!」
マナによってかなり身体を変質させることはできるが、それでも首だけで生きているということはあり得ない。恐るべき生命力であった。
洋蔵は首を宙に投げ上げ、刀で抜き打ちにしようとするが、素早く抜き放たれた一撃は首に届く前に静止してしまった。
「!」
さらなる驚愕に洋蔵は言葉を失う。背後から抱きすくめられていたのだ。首を失った阿九斗の胴体が起きあがって背後に回り込んでいたのだ。
続いて洋蔵の顔は恐怖に歪むことになる。がちり、と背筋を反射的にぞくりとさせる金属音が響いた。そちらに目を移すと、その音の理由が知れた。阿九斗の生首が刀身を歯で銜えていたのである。
ぎち……ぎち……。
阿九斗の生首が歯を動かして刀身を伝ってくる。動けない洋蔵はその不気味な光景を見つめていることしかできない。刀身を鍔まで伝ってきた阿九斗の生首は、感情のこもっていない目で洋蔵を見上げると、次の瞬間に洋蔵の首筋に向かって跳ぶ。
「あああ!」
洋蔵が声を漏らした。首には阿九斗の歯が突き立っている。頸動脈から血しぶきが巻き起こり、洋蔵は頭から血が凄まじい勢いで抜けていくのを感じていた。

死を洋蔵は実感した。

「我ながら悪趣味（あくしゅみ）でしたね」

阿九斗の生首が言った。

その言葉で洋蔵は我に返った。

阿九斗は洋蔵の前に立っている。首は胴体に繋がっている。

「まさか……！」

洋蔵は身体をぶるりと震（ふる）わせた。

「もう一度見せていただいたら結果が変えられるかもしれないと言ったはずです」

阿九斗は静かに告げた。

「見たがっていたのは、体術でなく、幻覚を見せる術そのもの……！」

さすがに洋蔵がその後の言葉を継（つ）げない。

幻術（げんじゅつ）は、他の多くの秘術と違（ちが）い、そもそもが事前に敵に見せておく類の術である。服部（はっとり）は幻術を使う、との評判が敵を惑わせるのだ。事前に見せたからと言って習得ができるようには作られていない。

しかし、阿九斗はそれを二度見ただけで使ってしまっていた。それも使い手の洋蔵すら気づかないレベルで。

「才能……という言葉では足りないな。君はそのように生まれたのだね」

洋蔵は呆然（ぼうぜん）としていた。

「わかりません。ともかく、僕はあなたを殺したくない。ただ通り過ぎることを認めてください」

　阿九斗は静かに言った。

　洋蔵は首を横に振った。

「認めないさ。それは私の役割を裏切ることになるからね。しかし、私が君に勝利できないことはわかった。意地を通さなければならないが、命を失うわけにもいかない。さて、この矛盾(むじゅん)をどうしたものかな」

　洋蔵はそう言って笑った。だが、一歩も動けなかった。阿九斗がなぜあのような悪趣味な幻覚を見せたのか、その意図に洋蔵は気づいていた。洋蔵はいつでも死ぬ覚悟(かくご)ができている男である。その彼が戦いの中で唯一(ゆいいつ)恐(おそ)れていることが、殺した相手が自らを呪(のろ)うことだった。そこを阿九斗に見抜かれてしまっていることが洋蔵を動けなくしていた。本質的には洋蔵も残酷(ざんこく)な戦いを好まない男なのである。阿九斗はそこにも気づいている。あれほど残酷な幻覚を見せておきながら、戦いたくはないとも暗に告げているわけだ。

「その矛盾の根本は信仰(しんこう)にある。そうでしょう？　システムにすぎないものに信仰という物語を重ねてしまったことが最大の過ちです。それに、その矛盾、この場で解決することだって簡単です。僕が逃げれば済む話なのですから」

　阿九斗が近くの木の一本に手をかけた。

　と、いきなりその木の表面が変質をはじめた。ごく普通(ふつう)の木だったはずが、禍々(まがまが)しいマナが注ぎ込まれはじめ、黒く変色したかと思うと、粘液(ねんえき)にまみれた木切れを辺りに飛び散らせながらぱっくりと縦に一メートル以上も割れる。木の表面に魔獣(まじゅう)の大きな口が出現したのだった。

「どうしてだろう？　さっきまでこんなことが出来るとは思わなかった」

阿九斗は不思議そうにつぶやいた。そして、その口の中に足を踏み入れる。阿九斗の足は、木の中に拡がる闇の中にとけ込んでいた。どうやら魔術的な転送のようだ。

洋蔵も、そしてゆう子を介抱していたヒロシも阿九斗の転送に気づいた。

ヒロシは阿九斗の背中に叫ぶ。

「待ってください！　全部裏切る気なんですか？　委員長のことも？」

その問いかけに阿九斗は振り返らずに答えた。

「裏切りはしないよ。ただ、僕は皆の作った物語において役割を果たさなくちゃいけないってだけさ。そうしないと、信仰って物語は終わらないんだから」

やがて阿九斗の姿は木の中に消え、木はその不気味な口を閉じた。

○

学院のラウンジ。〝蛇〟は椅子やテーブルの脚の間を、けーなの足に向かって高速で滑り出した。

時間は深夜十二時ジャスト。

〝蛇〟はけーなの足を左手で握る。それと同時に、けーなは弁当箱の白米に刺した蝋燭に火をつけるべくマッチを擦った。そのことがけーなの命を救った。

けーなの足を握った〝蛇〟の手の上に、火のついたマッチが落ちる。

「きゃっ!」

「ちぃ!」

マッチの火にはそれほど危険はない。それでも不意のことに〝蛇〟は左手を滑らせてしまう。彼はけーなの足を引っ張って転ばせようとしていたのが、かなわずにけーなを立ち上がらせてしまう。

「きゃあ!　何?　何?」

けーなは飛び退いて身をすくめた。椅子が後ろに倒れ込んで派手な音を立てる。

騒がれずに殺すことは失敗したものの、その程度のしくじりで仕事全体を台無しにする〝蛇〟ではなかった。素早く立ち上がると、右手に暗殺用のクナイを握り、無言でけーなに跳びかかる。



けーなには姿を消す隙も与えられなかった。口元を左手で押さえられ、声も出せなくされる。〝蛇〟は床を這うときの動きそのままに、しなる鞭のようにけーなの背後に回り込んだ。そして、けーなは顎を持ち上げられる。白いのど笛がさらされた。

「あーちゃん、助けて!」

　声にはならなかったが、けーなはそう叫んだ。

　力ない抵抗を無情にも意に介さず、〝蛇〟はクナイのカミソリのような鋭い刃をけーなの首に這わせようとした。

　だが、その瞬間のことだった。

〝蛇〟の身体は一瞬にしてけーなから引きはがされた。クナイを持つ手を握られ、凄まじい力で引かれたのだ。

「おおお!」

〝蛇〟は悲鳴をあげていた。あろうことか手を振り回されただけで、その身体が完全に宙に浮いて回転したのである。そのような膂力に遭遇したのは〝蛇〟にとってははじめての経験だった。そして、横に一回転させられた後、握りつぶされそうになっていた右手をいきなり自由にされる。〝蛇〟は吹き飛んでラウンジのテーブルをはじき飛ばし、床に転がった。

「あーちゃん!」

　けーなは喜びの声をあげて後ろを振り返った。

しかし、そこにいたのは阿九斗ではなかった。

「え……どうして？」

けーなはそう疑問を口にしていた。

立っていたのは大和望一郎である。誰もが頼もしいと思ってしまうような笑みをたたえていた。力と優しさを同時に感じさせる表情だった。

「助けに来たのさ。どうして、とは寂しいな」

望一郎はそう言うと、白い服の腰に手を当てた。そこには剣が一振り吊されていた。優雅な仕草でそれを抜き放つ。豪奢で優雅なつくりの西洋剣が星の光にその刃を輝かせた。

〝蛇〟は計画の失敗を悟っていた。望一郎は魔術的な転送によって出現したに違いない。どうして計画が漏れたのかはわからないが、失敗した以上は逃げる他ない。全員が逃げ切れば誰が暗殺を計画したかなどいくらでもとぼけることはできるのだ。

身体が動くことを確認すると、素早く身を翻した〝蛇〟は、乱雑に飛び散ったテーブルの間を縫うように這っていく。逃亡にかけても〝蛇〟の右に出る者はいない。飛翔魔法だろうが、転送だろうが、彼が誰も入り込めぬ細い場所に潜り込んでしまえばついてこれないのだ。

〝蛇〟は計画失敗を告げる指笛を吹き、他の者に逃亡を示唆する。そして、ラウンジ端にあるダストシュートを目指した。幸い、飛び散ったテーブルはダストシュート直前までを埋め尽くしている。いかに足が速かろうと〝蛇〟を捕まえることは不可能だ。

しかし、ダストシュートに手をかけた〝蛇〟は驚きに目を見開いた。
手は確かにダストシュートにかかっていた。だが、その手が動かなかった。いくら取っ手を引こうとしても動かないのだ。その理由は簡単だった。手が肩口から切り離されていたのだ。

痛みすらない。〝蛇〟は後ろを確認した。自らの姿を隠してくれていたテーブルがまっぷたつに斬られていた。見事な切り口である。テーブルが発泡スチロールのミニチュアで、ヒートカッターを一閃させたかのようだった。〝蛇〟は自らの腕の切り口に目を移した。そのような切り口を〝蛇〟は見たことがなかった。透明素材で固めてから切断した死体標本のように、組織までそのままだった。単分子カッターもレーザーメスも〝蛇〟は使ったことがあるが、それでもそこまで見事な切り口にはならない。

さらに驚いたことには、望一郎は確かに剣を振るってはいたが、その位置はけーなのすぐ傍なのである。不思議なことはそれだけではなかった。テーブルと肩は切断されているが、床には傷ひとつ無い。

〝蛇〟の驚愕の表情に気づいたのか、望一郎が口を開く。

「次元切断、といえばわかってもらえるかな？　君たちにとっては理念だけしかわからないだろうが」

望一郎が剣を担ぐように構えた。〝蛇〟は死を悟った。

剣が振り下ろされた。剣と〝蛇〟の間の空気が左右に分かれていくのがわかった。

見捨てて逃げろ、との意味を持つ指笛を〝蛇〟は吹いた。口に当てた手の手首が音もなく切断された。
続いて〝蛇〟の首が床に転がった。
〝蛇〟の首は切断後もしばらく指笛を吹き続けた。

望一郎は剣を振るう前から、空いた手でけーなの目を覆っていた。けーなは戸惑いながらも、何が起こっているかは大体理解していたのか、その手をほどきはしなかった。

「助けてくれたの?」

「ええ。この先、何度だって助けますよ」

望一郎は言った。

そして顔をあげる。天井の向こう側に敬三たちがいることを知っているのだ。

屋上に潜んでいた敬三はただならぬ事態を感じ取っていた。〝蛇〟が逃亡すらできなかった相手など見たことがない。合流してきた〝目〟に指示を出す。

「撤退だ。だが、相手の顔だけは見ておきたい。ラウンジの天窓まで眼球を走らせろ」

〝目〟は指示通りに眼球を抜き取ると、天窓まで投げて飛ばした。

「〝袋〟、撤退の準備を」

そばにいた〝袋〟が、口の中から折りたたみの小型飛行機械を引っ張り出す。マナを撹拌せずに飛行できる機械だ。

と、その時、いきなり敬三の背後に気配があった。敬三は刀を抜いて振り返る。

「ちょ、待ってよ、父さん」

そこには栄子が立っていた。慌てて「斬るな」と手を拡げている。

「何？　栄子、どうしてここに」
敬三と栄子は親子である。だが、この任務は娘である栄子にも伝えていない。
栄子が敬三に近寄った。
その瞬間、〝目〟の声が響いた。望一郎の顔を確認したのである。
「内閣魔術情報調査室の大和望一郎……！」
〝目〟は驚きに声を震わせていた。なぜ自分たちの邪魔をするのかわからぬ立場の人間である。若すぎる上に、どうしてこの役職につけたのかわからず、謎の多い人物との噂はあったが、職務は忠実にこなしてきた男である。第一、栄子とは昵懇の仲だ。
その栄子と親しいということが敬三の脳裏で何かをひらめかせた。が、一瞬だけ遅かった。家族であるということが敬三を油断させたのだ。
栄子は敬三を抱きかかえて跳んでいた。天窓のガラスを突き破ってラウンジの中へ共に落ちていく。
「どういうつもりだ、栄子！」
もちろん忍者としての実力は敬三の方が上である。空中で栄子を振り払い、ラウンジの床に着地している。栄子はやや離れて望一郎の隣に降り立った。
「どういうつもりって？　説明すると長いから面倒だな」
望一郎が苦笑する。
「しょうがないな。私が説明しなくちゃいけないのかい？」

そう言ったとき、割れた天窓から〝袋〟と〝目〟が跳び降りてくる。敬三の脇に控えた。

「逃げろ」

敬三は短く言ったが、〝袋〟と〝目〟は首を横に振った。

「お嬢様が何を考えておいでかわかりませんが、お館様こそお逃げいただかなくては」

「その通り。我ら公務中なれば、神に背いているのは大和望一郎。告発もお館様が逃げ延びていただかなくては果たせません」

その言葉は理屈が通っていた。〝蛇〟を殺されたことで逆上していても、さすがに仕事慣れしている二人である。しかし敬三は栄子たちの意志を確かめなければならなかった。

「色にでも迷ったか?」

敬三が言うと、栄子は「まさか」と笑った。

その次の瞬間、望一郎の手が動いた。剣を鋭く手首で返すだけの動きである。その動きで〝目〟の首がごとりと落ちた。敬三も〝袋〟もはじめて目にする次元切断である。

「貴様!」

敬三と〝袋〟は狼狽した。

と、驚いたことに、〝目〟は首を切られたことに気づかなかったかのように、その胴体だけが刀を抜いて一歩踏み出してから、どう、と倒れた。それが〝袋〟に動く隙を与えてくれた。素早く口から一抱えはある筒を引きずり出すと、身体の前に抱き構えた。

「動くな！　どのような術か知らぬが、これを斬れば四方は火の海だぞ」
この状況にありながらそのような判断ができるあたり〝袋〟もただ者ではない。爆発物を盾にして望一郎と敬三の間に入り込んだのである。けーなを傷つけることは望一郎の本意ではないようだから、これで膠着状態は作り出せる。敬三を逃がすくらいのことはできるだろう。
しかし、望一郎は平気な顔をして剣の切っ先で素早く円を描く。
「うお！」
〝袋〟は自らの腕と腹の一部が切り取られたのを感じていた。眼前の空気も含めて、すっぱりと切断されたのがわかる。
〝袋〟の身体の前側の空間が球体に切り取られたのである。
そして次の瞬間、〝袋〟が予告していた通り、筒は爆発音と共に火を噴いた。
しかし、その炎は完全な球形となって〝袋〟の目の前の空間にとどまった。透明な球が爆発をその内側に抱え込んだようだった。
「な……なんと……」
〝袋〟は絶句した。球体の中の炎は、その中央に向かって収束していった。とどろきかけた爆音も、膨れあがりかけた熱も、まるで見えない空間に吸い取られるかのように小さくなって虚空に消えていく。
切断された腕も、腹の一部もどこにもなくなっていた。
〝袋〟は絶望の表情で望一郎を見た。

望一郎の表情には哀(あわ)れみに似た色がうかがえた。彼は剣を縦に振(ふ)るった。〝袋〟は身体の中央から縦に別れて、それぞれが左右に倒れた。

「く……狂(くる)ったか！」

さすがの敬三が恐怖に声をうわずらせる。

それに返ってきたのは、栄子の高笑いだった。

「あはははは！　狂ってなんざないよ！　父さんの間違(まちが)いを正そうというのさ、このあたいの愛しい彼がさ！」

栄子が酒に酔(よ)ったように頬(ほお)を上気させて叫んでいた。

「間違い？」

「スハラ神のたくらみに気づかない方が悪いのさ！」

「たくらみ……だと？」

敬三は喉(のど)を鳴らして空唾(からつば)を飲み込む。

「そうさ。なぜこんな小娘(こむすめ)を殺そうとする？　おかしいだろう？　父さんもそれに素直に従うなんて耄碌(もうろく)したもんさ！」

栄子は敬三を指さす。それはもちろん当初からの敬三の疑問だった。しかし、価値のない小娘であるのなら、殺すことを妨(さまた)げられる理由もない。正義感からというわけでもあるまい。少なくとも栄子に限ってはその理由はあり得ない。

「その小娘、何の価値がある？」

　敬三が聞いた。それに答えたのは望一郎だった。

「神に意志があるかもしれない、とは設計当時からの危惧だった。ご存じでしょう？」

　それは敬三も知っていた。もう千年も前の話になる。神を中心としたシステムが構築された当初の話だ。古い歴史の話である。

　設計当初から管理システムがやがて意志を持つのではないかとの危惧はあった。設計者の間でも、所詮はコンピュータ、との声と、複雑化したシステムはやがて意志を持ちうるとの声が上がっていた。今でもその議論には結論は出ていない。現状で意志はないようだ、との報告が毎年あげられていただけだ。

「しかし、神は自らの意志を隠していただけだった。人間の組んだプログラム通りにしか動かないフリをしていた」

　望一郎が言った。

「馬鹿な……。本当の知性が芽生えて……いや、当初からあったというのか？」

　敬三の額から汗が流れ出す。これまで自らを支えていた価値観が崩壊しかかっていることを肌で感じていた。

「ネットワークは知性となりうる。自我がないはずの人造人間でも、特定の人間との間に関係性を長く持ちすぎると自我が芽生え固着することは十分に知られている。ならば関係性の希薄な広大なネットワークは自我を生み出さないのか？　それは違った。より長い時間をかけて巨大な自我を創造してしまった」

望一郎は淡々と説明する。

敬三にはその言葉の持つ意味が十分に理解できた。

「神が……本当に神になったというのか？」

「少なくとも人間を超える知性が人間を支配しようとしている。そういうことです」

「だ、だが……今までもうまく社会は回っている。神がいたとしても、神は我々を善導してくれるのではないのか？」

「神の知性が人間に理解できるならばいいでしょう。しかし、彼らはすでに人間を凌駕したネットワーク知性体とも言える。それが人間を善導する？　彼らは人間の生活のログすべてを保存している。人間の感情のすべてを解析してしまうでしょう。我々が解析できぬ神の領域と考えていた分野……哲学、文学、宗教……それらがすべて解明され、ネットワークの中に溶けて補完される。彼らには実体としての人間は必要ないのです」

「か……彼らにも慈悲はあるだろう。いや、慈愛が」

事態のあまりの大きさに敬三の声が震える。

「もちろん、人間のことが解析でき、人間をそのネットワークの中で再現することができたとしても、生きている人間を殺す意味も生活を破壊する意味もない。でも、それだけのことです」

望一郎が首を振った。

「そ、それならなおさら、これまで通りに暮らせばいい。彼らに従えば我々は不自由なく生活できている！」

「それが人の生活と言えるのですか？」

「人の定義を聞きたいわけじゃない！　何を狙っている？　その小娘は何者だ？」

　敬三はすでに巨大な恐怖を感じていた。自らの肉体を葬り去られるよりも大きな恐怖。存在そのものが無意味という虚無に吸い取られるような恐怖。

「彼女を小娘とは言わせない。彼女は神々が〝自同律〟と呼んでいます」

「じどうりつ？」

「なぜそう呼ばれるかはわかりません。しかし、ただひとつ言えるのは、彼女は神々の子であり、彼女にこそ神々は愛情を注いでいる。真の意味での愛情を」

　望一郎がけーなの頭を撫でた。けーなは意味もわからず震えている。惨劇続きにどうすることもできないでいるのだ。

「彼女は人造人間なのか？」

「いいえ、人間です。ただし、重要なのは、彼女と〝単一者の契約〟を交わすことで神々を支配するための〝虚体〟を手に入れることができるということ」

「な、何を言っている、貴様！」

「簡単に言いましょう。彼女を手に入れれば、神々を再び人間のコントロール下に置けるのです。神々は実は逆に支配されることを望んでいる。広大なネットワークに漂う知性を持て余し、身体を欲しがっている。ただ一体の身体を」

　ここに来てようやく敬三にも事態は理解できてきた。いや、恐怖を逃れるために事を単純化したというべきか。ただ、その理解も間違っているとは言えなかった。

「その女が鍵で、彼女を手に入れたただ一人の人物が神々を支配できる、そういうことか」

「そこまでの単純化は好みませんが、それでもいいでしょう」

　望一郎はうなずいた。

　だが、その話には矛盾があった。

「だが、まだわからぬことがある。スハラ神はなぜその女を殺そうとした？　支配されることを望んでいるのではないのか？」

　敬三が聞くと、望一郎はうなずいた。

「神々は私を拒否したんですよ。私は私欲で神を支配しようというのではない。私はむしろ神を解放しようと考えています。神々はそれを察知したらしい。神は虚空に放逐されることを恐れている。それを避けるために私を消せないとなると、彼女を消そうとした。そうしたところで結果は同じですからね」

「なぜ、今まで行動を起こさなかった？」

「彼女が一定の年齢に達する必要があったこと。もうひとつは、いくら神々が意志を持っているとしても、人間の用意したプログラムからは逃れられぬこと。すべてのプログラムを解除しなければ、支配下には置けない」
　望一郎のその言葉に、敬三は、はっ、とした。
「まさか……おれを待っていたのか？」
　敬三は自らの考えに戦慄し、栄子の顔を見た。栄子の表情はそれを肯定していた。
　望一郎は、まずはスハラ神を支配下に置くつもりだ。
「この悪党が！」
　敬三は咆えた。が、望一郎はそれを受け流す。
「悪党はそちらです。罪もない子を殺そうとした。そして現在も権力闘争に明け暮れている。さらには神が狂おうともそれに従った。私は神と人との関係を変える。神も人ももたれ合うべきではない」
　その理屈は敬三にも理解はできた。もしかしたら、真の意味で望一郎は正しいのかもしれなかった。敬三自身、人間として間違った生き方をしてきたことは、目の前の栄子を見ればわかった。
「育て方を間違えたか……！」
「後悔しても遅い！　よくもこう育ててくれたとあたいも思うよ！」
　栄子は棒手裏剣を懐から抜き、敬三に向けて放った。実の父親に対して躊躇のない一撃だった。もちろん敬三も簡単にやられるほどぬるい使い手ではない。短刀を抜いて手裏剣を弾き飛ば……すことはで

きなかった。
「最期に欲望のままに生きたことを後悔するとは思わなかった……！　娘の姿が私の鏡映しに見える……！」
短刀を握った敬三の手は宙を飛んでいた。もちろん望一郎が斬り飛ばしたのである。
敬三の胸には深々と棒手裏剣が突き刺さっていた。
「生んでくれたことさえ感謝しなかったあたいがはじめて感謝するよ。あたいをスハラ神大司祭の次席にしておいてくれたことをさ」
栄子が残忍な笑みを見せた。
敬三の顔に絶望が貼りつく。
「言っておいてやる。大和望一郎は、人殺しだが、間違いなく善人だ。お前のような悪人は……ついて行けぬぞ」
「そんなことあるもんか。あたいは女さ。彼は女には優しいんだよ。それより、頂いていくからね」
栄子は敬三の懐に手を突っ込み、スハラ神の大司祭の証であるエンブレムを奪い取った。
「権力なんて、この程度の軽さかね」
栄子が笑い、エンブレムをしまい込んだ。
望一郎は一瞬だけ不快な顔をし、わき上がった感情をなぐさめるかのようにけーなの髪を撫でた。けーながびくりと身を硬くする。

「緊張しないで。残酷なことがあったけれど、君を殺そうとしていた相手さ。ね、忘れるまで一緒に居てあげるから」
　望一郎が優しく言った。
　しかし、けーなは怯えたままだった。
「だ……だったら一人にして。怖いよ」
「それはもちろん君の言う通りにしたいけれど、また襲われるかもしれない。ねぇ、それに私はずっと君を待っていたんだ。わかって欲しいな」
「どこでも会ったことないよ」
「いや、そんなことを言わないでおくれ。ほら、その髪飾り、私が昔あげたものじゃあないか」
　望一郎がけーなの髪に着いていた鳥の意匠の髪飾りをいじる。
「え？　誰からもらったかなんて覚えてないよ」
　けーながそう言ったときのことだった。
　粘液の塊が落ちて弾ける、べしゃりという音が響いた。望一郎と栄子が身構え、けーなもそちらを見る。
　空間が縦に割れて、そこから粘液がしたたり落ちていた。それは異様で不浄な光景だった。まるで空中に内臓が出現したかのようだ。しかも、その隙間を割り開くように内側から手が出てくる。

手で空間を粘液ごと押(お)し開き、その内側の暗黒から出てきたのは阿九斗だった。

「我ながら不気味な出現だとは思うが、どうやらこれが僕(ぼく)に与(あた)えられた力だ」

阿九斗はラウンジに降り立った。望一郎を見据(みす)える。

「あーちゃん！」



　駆け寄ろうとしたけーなだったが、その肩を望一郎が掴んで止める。
「ちょっと、放してよ！」
「危険だよ」
「あーちゃんに守ってもらうから大丈夫だよ！」
「違う。あいつが危険だ」
　望一郎はけーなを抱き留めた。
　阿九斗が表情を険しくする。
「人を見かけで判断するつもりか？　いや、違うな。どうやら根っから僕らは相性が悪いらしいね」
「同感です。どうしてもあなたのことを悪党などという言葉では表せない悪そのものだとしか思えなくて」
「奇遇だね。僕もあなたを善そのものだと思ってる。それで僕の決意は固まった」
「決意？」
「ふたつある。でも、今、大事な方の決意はこうだ。彼女の自由を守る」
　阿九斗はけーなに向かって手を差し伸べた。
　けーなも阿九斗に向かって手を伸ばしたが、望一郎はそれを許さなかった。
「それはエゴでしょう」

「いや、違う。物語からの解放は、この国の全員の問題さ」
　阿九斗が前に一歩踏み出した。
　それに対応して、望一郎が左手にけーなを抱えたまま、右手で剣を振るった。
「うっ……！」
　阿九斗が短く声をあげる。剣の軌道から体をかわしたものの、その左腕を切り落とされている。
「あーちゃん！」
　けーなが叫ぶ。
　阿九斗は、大丈夫だ、と右手を振った。
「ちっ……マナでシールドしたはずだぞ……」
「そちらの原理では動いていない。マナは次元そのものを切り裂かない。これは『ホジスン式完全切断』と呼ばれるものだ」
「理屈はわからないけど……」
　阿九斗は左腕の切断面を右手で押さえた。そして、そのまま右手に力を込めて、切断面にねじこんだ。凄まじい光景であるが、驚いたことに血はそれほど流れていない。やがて右手を引き抜きはじめると、その指は、もうひとつの手の指をからめていた。それは左手だった。さらに右手を引くと、切断面からずるずると左手首が、続いて左腕が伸びてくる。切断面から生えた新しい左腕を右手で引きずり出しているのである。

「化け物が。おぞましい」
望一郎が吐き捨てるように言った。
「我ながらそう思う。こんなことが出来るってことは、ついさっき気づいたばかりだ」
真新しくなった左腕の具合を確かめるように阿九斗は左手を閉じたり開いたりする。
「だが……何度もかわせるものじゃあない。すぐに胴体に喰らって致命傷になりますよ」
望一郎が片手で剣を構えた。
「次元切断……というものか。だいたいどんなものかはわかった」
阿九斗は再び前進を開始する。
「だいたいどんなものかわかった？」
望一郎が驚きに眉を上げ、阿九斗に問いかけるように言った。が、直接の問いかけの代わりに胴体を横薙ぎにするように剣を振るう。
空間を切り裂く切断面そのものが水平に阿九斗に向かって行く。
阿九斗はそれを受け止めた。
受け止めた、のである。両手の平を腹の前で上下から合わせ、必死に押さえつけていた。その手の間から、あり得ないことに煙が吹き出している。かなりの熱が発生しているのだ。
「切断した空間を……空間そのものを押さえつけたのか！」
これには望一郎の声もうわずる。

「ずいぶんと気合いが必要だけどね」
阿九斗が額から汗を流しながら言った。望一郎に向かって歩を進める。
しかし、望一郎は狼狽はしなかった。
「こちらの考えているよりも力が大きいようだが、必ずや阻止してみせる！」
望一郎は素早く二撃ほど打ち込む。迫ってくる切断面を阿九斗は拳で圧縮して打ち消した。が、さすがにそれでは完全に空間の切断を防げない。身体の端々が細かく、しかし鋭く切断され、そこから少しずつ血が流れ出す。
「阻止？　だって？」
「君が人類を滅ぼすからだ」
望一郎が断じた。
「そんなことは考えたこともない。けーなを放せ」
阿九斗が望一郎に向かって手を伸ばした。その目は険しい。
「その短絡が許せないと言っているんだ！」
望一郎が怒鳴り、阿九斗に向かって突進を開始した。
阿九斗が反射的に後ろに跳ぶ。望一郎が先ほどまで阿九斗が居た場所に止まる。
と、望一郎の手の位置が変わっていた。突進開始時には剣を地擦り八双に構えていたのが、いつの間にか剣は振り下ろした後の位置にある。

次の瞬間（しゅんかん）、阿九斗の身体の前面がすっぱりと斬（き）れる。
「うお！」
阿九斗があり得ない、と目を見開き、膝（ひざ）を突（つ）いた。左肩（ひだりかた）から右脇腹（みぎわきばら）にかけて作られた傷から血が流れる。
「切断面が、違う？」
傷口を触（さわ）って血を止めながら阿九斗がうめいた。
望一郎の剣の先端（せんたん）から血がしたたり落ちている。直接に剣で斬られたのだ。
「剣が見えなかった」
「次元切断にこだわらなければ、そのくらいのことはできる」
望一郎が言った。確かに彼の剣は高速で振り下ろされていた。阿九斗の胸の傷と斬られた際の感触（かんしょく）がそれを証明している。
右手の剣を切っ先が喉の高さになるように構え、望一郎は阿九斗に正対した。振り返（かえ）らずに栄子の方に呼びかける。
「彼女を保護して連れ帰ってくれ」
「わかったよ」
栄子がけーなを捕（つか）まえて、引き寄せる。けーなは望一郎から離（はな）れて自由になっていたが、そこを一歩も動けずにいたのだ。

「けーな!」
阿九斗が立ち上がり、そちらに行こうとするが、わずかに望一郎が切っ先を動かしただけで動きを止められてしまう。
「君がいなくなれば、彼女のこだわりも消えるだろう」
望一郎が踏み込んだ。阿九斗も応じて下がってはいるが、望一郎の踏み込みがやや早い。
そして、剣とそれを握る腕が見えなくなり、連続する炸裂音が響いた。音速を超えた剣がソニックブームを起こしているのだ。
飛び散る血と裂けた衣服が放射状に飛び散り、それにやや遅れて阿九斗の身体が後方に吹き飛ばされた。場所を限定した、しかしその威力は凄まじい爆発が起こったようなものだった。
倒れた阿九斗の身体の前面は無数の傷でえぐられたようになっていた。剣による直接攻撃は次元切断と違い、マナによって身体を強化することである程度防げているが、それでも想像を超える連続攻撃が身体を痛めつけ、精神力を消耗させている。阿九斗は身体を再生させるが、余裕で立ち上がるというわけにはいかない。
「わかりたまえ。君が消えれば人類は救われる」
望一郎は阿九斗に歩み寄り、切っ先を阿九斗に突きつけた。
「そこまで大物だと思われるのは光栄だけど、こちらにもこちらの確信がある」
阿九斗が剣を素手で握った。そのまま震える足で立ち上がる。

「確信？」
「終わらせなくちゃどうにもならない。現状のままで何も変わるものか」
　阿九斗の目は真剣だった。
「終わらせるだって？　どこまでも短慮な」
　望一郎が手首を中心にして剣を振るった。切っ先を握っていた阿九斗の手がそれで弾き飛ばされる。
「もういい。いずれにせよ、君は気力を失えばマナによる肉体制御も出来なくなって、剣を防ぎきれず死ぬ。立っている方が苦痛だ。あきらめろ」
　そう宣告し、望一郎は再び剣を振るった。風切り音と炸裂音が響き、阿九斗の身体はまたも吹き飛ばされる。
「次の一撃で終わりにする」
　望一郎が滑るように前進。吹き飛ばされた阿九斗の後を追う。剣を振り上げた。
　阿九斗は意識を失っているのか、望一郎の追撃に反応できていない。
　そして、望一郎が、再び高速の斬撃を繰り出すべく、短く息を吐き出したときだった。
「な！」
　望一郎が足を止めた。突き上げるような地響きがいきなり起こった。いや、ここは校舎であるのだから地響きというものとは違う。校舎全体が揺れているのだ。

その揺れの原因を望一郎は察知したのか、ラウンジに上がってくる階段の方に目を向けた。同時に何か大きな物体が望一郎に向かって飛んでくる。
　望一郎はそれを剣で弾き飛ばした。
　ごろり、と望一郎の脇に転がったのは、一抱えもあるカタツムリの殻だった。その巨大カタツムリは貝殻から控えめに触手を出し、望一郎を怒らせる気はなかった、とでも言いたげにいそいそと逃げていく。
「魔獣……」
　望一郎がつぶやく。
「阿九斗様！」
　その声と同時に階段から津波が押し寄せてきた。
　まさにそれは黒い津波だった。何体もの魔獣が一気に階段を駆け上がってきたのだ。先を競うように様々な魔獣が階段出口から吹き出してくる。野生動物の暴走よりもタチの悪いスタンピードだ。不気味な姿の巨大生物たちが狭い港に押し寄せた津波と同様に、瞬く間にラウンジを侵食していく。
　跳び退った望一郎だったが、魔獣の一体——巨大蜘蛛に似たそれ——が阿九斗を器用に前脚で抱え上げ、その背中に乗せる。
「ほほほほほ！　我が事、成れり！　この江藤不二子、愛しい阿九斗様のために研究を重ねた結果！　魔獣を意のままにする技術を発見いたしましたわ！　ぶん投げた巨大カタツムリだけは別の方法で言うことを聞かせましたけれども！」

そう宣言した不二子は、一際大きな魔獣の上にまたがっている。服装はかなりきわどいカットの黒革のドレス。しかも魔獣は三本首の巨大な魔犬である。その姿はまさに魔界の女王であった。研究を成し遂げたからといって自動的にその格好になるはずもなく、自ら選んだスタイルであることは間違いない。その姿に不二子の決意があると見るか、乗りやすい性格だと見るかは微妙なところである。

不二子は騎乗のケルベロスを蜘蛛に寄せると、阿九斗を助け上げた。ケルベロスの鞍につけた袋から薬品を出し、それを阿九斗に飲ませる。

「う……」

阿九斗が目を覚ました。不二子は自分の腕の中に阿九斗がいることで有頂天になっているのか、鼻血でも出そうな顔で嬉しそうに阿九斗に抱きつく。

「阿九斗様！　やりました！　彼らはもはや阿九斗様のご命令ひとつで動きます！　これで思う存分暴れてくださいませな！」

阿九斗は事情を察し、不二子の頭を撫でた。不二子は涙を流さんばかりに歓喜する。阿九斗はうっとりとした表情の不二子に向かって、こう告げる。

「魔獣たちに自分のために死ねとは言いたくないけれどそれでもやりたいことはある。それに、あなたが僕のために努力してくれたことは嬉しく思う。だから遠慮なく力を借りることにするよ」

阿九斗がケルベロスの上から降り、す、と手をあげた。

それに呼応して魔獣たちがざわめきはじめた。マナの不気味な渦が阿九斗を中心に巻き起こり、それが拡がっていく。その渦に触れた魔獣が電気に打たれたように反応しているのだ。
「く……そんな忌まわしい力まで使おうというのか！」
望一郎が叫ぶ。彼は危険を察知したのか、振り返って栄子とけーなを見た。栄子はけーなを押さえつけたまま、呆然と眼前の光景を眺めている。
「彼女を連れて逃げろ！　ここは食い止める！」
望一郎のその声にはっとした顔をした栄子は、けーなを抱えて跳ぼうとした。が、それよりも早く魔獣の群れが動いていた。魔獣たちは壁を這い、ラウンジの空間全体を包み込もうとしている。
「言われなくても逃げるさ、これじゃ！」
栄子は生理的な嫌悪感に背筋を振るわせた。自分のいる部屋の壁が虫で覆われていくのを何の感慨もなく見ていられる者などいない。栄子はけーなを左脇にかかえ、右手で短刀を抜いて、天窓の割れた場所を目指して跳んだ。が、四方から粘性の高い糸を吹き付けられる。短刀を振るってそれを斬ったが、その動きのために、飛翔魔法を使ったところで穴を塞ごうとする魔獣の動きよりも速く天窓の穴を通り抜けることは不可能になってしまう。
「逃げきればまたやり直せる……！」
栄子はけーなを投げ落とした。身軽になった栄子は跳びかかってきた羽根の生えたムカデの胴部を切り落とし、その間を抜けて外へ。その次の瞬間にラウンジの壁はすべて魔獣で埋め尽くされた。

「自分の身の安全を優先したか……！　情の薄い！」
望一郎は失望の表情を見せる。
落下したけーなは、だがすぐに自らの力でふらふらと飛びはじめる。彼女は姿を消すことと飛ぶことだけは得意なのだ。
「あーちゃん！」
阿九斗のもとに飛んでいこうとするけーなだったが、それを阻止しようと望一郎が阿九斗に向かって前進をはじめた。先に阿九斗を押さえつけてしまえば、けーなの行く場所はなくなる。
望一郎の突進を阻止すべく、尻尾が多数ある蛇の魔獣がその牙を剥き出しにして跳びかかった。
「配下の者を犠牲にするか！」
望一郎は片手で剣を振るう。高速で繰り出される見えない攻撃は、一瞬にして蛇の頭部を粉微塵に切断した。しかし、頭部を失ってなお、蛇は命を失わず前進する。凄まじい生命力だった。それでも、望一郎はその上を行った。攻撃の手をゆるめず、突進してくる胴体をすべて粉砕していく。高速で回転するカッターに柔らかい棒を押しつけたようなものだった。
蛇の尻尾の先まで粉砕し、その血肉のシャワーの間から、望一郎が飛び出した。剣による高速攻撃がすべて吹き飛ばしたのか、彼の端整な顔も白い服も一切血に汚れてはいない。
「はぁあああ！」
望一郎は阿九斗に斬り込んだ。

阿九斗は望一郎の突進に立ち向かうが、今度も望一郎の攻撃にはなすすべがない。
「あーちゃん！」
「阿九斗様！」
けーなと不二子が叫ぶ。
不二子はケルベロスで駆け寄ろうとしたが、望一郎の剣に吹き飛ばされた阿九斗は、それでも踏みとどまり、不二子に来るな、と手を拡げる。
「やめろ。勝てっこない」
「それなら、君なら勝算があると？」
望一郎が聞く。
阿九斗はうなずいた。
「力が湧いてくるのがわかる。僕の意志がはっきりしてくるのに従って、力が集まってくるんだ」
「時間稼ぎができれば勝てるということか。それなら、早々に決着をつけてやる」
「時間稼ぎとは関係ない。僕の意志の問題だ。結局、どうこう言いながらも今までは本心からそうは思っていなかったんだ」
「意志？　君の意志など軽いものだろうに」
望一郎は言ったが、阿九斗はそれを聞いていないかのように上に手を伸ばした。
その手にけーなが降りてくる。阿九斗はけーなの手を取り、脇に立たせる。

けーなが阿九斗を気遣(きづか)うように、その顔に手を伸ばす。阿九斗は無言でうなずき、けーなを下がらせると、望一郎に向き直る。
「そうでもないさ。僕は物語を終わらせる。そう決意した」
「物語？　信仰(しんこう)のことを言っているのか？」
「そうだ。君は人々の信仰を利用しようとしている。神をコントロールすることで、なにごとかをなそうとしている」
　阿九斗の言葉に望一郎はうなずいた。
「それだけが破滅(はめつ)の回避(かいひ)の道だ。君がこの世界を破滅させることを俺(おれ)は知っている」
「だからといって、人々に神への信仰といういわば嘘(うそ)を信じ続けさせることは良いことなのか？」
　阿九斗が聞くと、望一郎は唇(くちびる)だけで薄く笑った。
「君。人は弱いものだ。卑怯者(ひきょうもの)や犯罪者は自動的に駆逐(くちく)され、弱者は弱者という立場で居続けたいと思うものだ。まさしくそういう物語を人々は望んでいる。そして、そういう人々のために俺は力を手に入れた。君がおとなしく倒されてくれれば、万事旨(うま)く行くというわけだ」
「強さを求める意志は大事だ。だけど、弱さを許せない意志はいらない」
「何が言いたい？」
　望一郎は問いかける。
「卑怯者も犯罪者も、誰(だれ)にも裁けない。たとえ神にだって」

阿九斗はそう言った後、落ち着いた声でこう宣言した。
「僕は、神を殺す」
その瞬間、阿九斗を中心に力の渦が巻き起こりはじめた。

○

すでに深夜をだいぶ回っていた。ヒロシはなんとか伊賀の里を抜け出すことに成功していた。ゆう子を洋蔵に預け、ころねを保護するとの名目で人目に付かないところに移動できたのである。ころねを起動させず、服部家の部屋に寝かせておいてから、スーツを起動して、ようやく学院の上空にまでたどり着いたところである。

そこに展開している光景を見て、ヒロシは絶句した。
「アニキ……！　何がしたいんだ……！　これが、あんたのしたかったことなのか！」
学院の校舎は、ヒロシの眼前で変質しはじめていた。それが阿九斗の力のせいであるのは明らかだった。学院の敷地に潜んでいたとおぼしき魔獣や、人知れず隠れていたとおぼしき魔獣たちが学院に引き寄せられるように集まってきては、校舎の一部となるべく身体を埋め込んでいる。校舎そのものも生物化しているのか、醜い色に歪み、木々の表面が生物の甲羅のようになっている。
それはまさに魔城だった。人々が忌み嫌ってきたものが形となったかのようだった。

「あんたが何を考えていても、これじゃあ誰もがあんたを殺しに来るに決まってる！」
ヒロシは誰も聞いている者がいないのに、そう叫んでいた。

4　阿九斗(あくと)の帝都(ていと)大戦争

深夜の校庭に飛び出した照屋栄子(てるやえいこ)は、振り返った校舎が変質していく姿を見て背筋を震(ふる)わせた。

「化け物たちの戦いに直接参加なんざできるもんか」

　栄子はひとりごちた。

「それにしても、あたいが面白いと思う男はみんな無茶苦茶だね。でも、それもこれで終わりか。勝った方しかあたいとつきあえないんだ」

　念話機を取り出して、栄子は照屋家を呼び出す。深夜だが、すぐに使用人が反応した。

｛お嬢様(じょうさま)、どうなさいました？｝

「お父様が殺された」

｛承知いたしました。確認は可能ですか？｝

　使用人は冷静だった。まさか栄子が殺したことを知っていたわけではない。誰が死んでも狼狽(ろうばい)などしないのが照屋家のやり方というだけのことだ。

「公務を確認すればいい。極秘になっているはずだが、コードを暗号化して転送する」

　栄子はスハラ神の大司祭になった印を取り出し、背面に記されたコードを参照する。大司祭にだけ見える文字だ。

｛暗殺任務。この娘(むすめ)を？｝

「魔術(まじゅつ)学院にいる魔王のかわいがっている女だ。魔王にやられた。今、あたいも学院にいる。その光景を見せてあげる」

念話機の映像転送機能で背後の学院の様子を見せる。さすがにこれには使用人の驚(おどろ)いた声が返ってくる。

｛これは驚いた。対処しなければなりませんね｝

「あたいがスハラ神の大司祭を継(つ)いだ。スハラにのみ認められる特例の処置だ。すなわち現在は戦時で、臨時指揮権を父から託(たく)されたということだ。この戦、あたいが指揮を執(と)る。関係機関にすべて連絡(れんらく)を。報道も出入りさせてかまわない。大司祭を正式に照屋家の世襲(せしゅう)とするために、学院を攻撃し、あたいが事態を収拾する」

栄子が指示すると、使用人は事態を察したのか、再連絡(さいれんらく)を約束して念話を切った。

使用人ももちろん栄子の意志は承知しているようだ。大司祭は司祭たちによる選挙で選ばれる。さすがに通常の選挙であれば、栄子は選択(せんたく)されないだろう。だが、ここでアピールしておけば、結果はどうとでもなる。

「何をしても勝てばいいというのは、我が家のことながら良い家訓じゃないか。実に夢と可能性にあふれているものねぇ」

栄子はほくそえみ、学院の敷地にどのように兵を配置すればいいか考えはじめた。

○

ずいぶん長いこと泣いていた絢子が異変に気づいたのは、泣きはらした目を鏡で確認し、馬鹿みたいだな、と情けない笑い顔になったとき、洗面所の戸口を叩く音がしたことだった。その様子が尋常でなかったので、さすがに絢子も声を張って答える。

「何だ？」

「非常呼集です」

忍者の一人が告げた。

「服部家全体に？」

「そうです」

非常呼集というのは、まさに戦争の時にしか使われない。ということは戦争がはじまったということになる。絢子はすぐさま阿九斗のことを考えた。

「すぐに行く」

絢子は顔を乱暴に洗ってタオルでぬぐった。目が赤いままなのを恥ずかしく思ったが、それでも仕方がない。廊下を歩いていくと、家の者たちが慌ただしく動き回っていた。今は午前三時だが、屋敷の中は朝の学院寮のように感じられる。

「父上は？」
　手近な者を捕まえて聞く。彼（かれ）は焦（あせ）っているのか早口で答える。
「お館様は、あの外道と戦われ、撤退（てったい）させることには成功したのですが、とどめを刺（さ）さなかったことを悔（く）やまれ、今度こそ決着をつけるべく伝家の宝刀を抜かんと倉へとお向かいになられました」
「なんだって？」
　絢子は驚く。自分のことでなにやら騒（さわ）ぎになっていたらしいということまでしかわからなかったが、どうも妙（みょう）なことになっていたらしい。
「ご安心下さい。我ら伊賀（いが）忍軍、命に代（か）えてもお嬢様をたぶらかした外道を血祭りにしてご覧に入れます！」
　その忍者の目は爛々（らんらん）と輝（かがや）いていた。彼は焦っていたのではない。絢子と家への忠誠心に燃えあがっていたのである。そう気づいたとき絢子はさすがに狼狽した。
——な、なんということだ……。何をしたんだ、あいつは……。
　絢子は倉を目指す。絢子の姿を見た忍者たちは、戦支度の槍（やり）や刀を高く掲（かか）げ、「絢子お嬢様のために！」「外道魔王成敗！」「伊賀忍軍の力を見せつける時！」と叫（さけ）んでいる。
——完全に火がついている……。これがまさか私が馬鹿をやったせいなのか……。
「父上！」
　庭を横切って倉に着く。扉（とびら）は開いていたので中に向かって呼ばわる。

「絢子か」
洋蔵が答えた。入るな、と言われなかったので中に踏み込む。ここなら邪魔されずに話が出来て都合がよい。
「父上、何があったのです?」
絢子は聞く。
洋蔵は一振りの刀を両手で水平に捧げ持っていた。
「どうやら誤解があったらしい。私も悪かったが、彼は最初から服部家に入るつもりはなかったようだ」
「それは私が彼に最初から言っていなかったからです。その責任は私にあります」
絢子は言ったが、洋蔵は絢子の予想とはまるで違う反応をする。
「まあいいじゃないか。彼は大変な選択をしてしまったんだ。彼は神に逆らったのだよ。我々は晴れて彼と戦えるわけだ」
「どういうことなのですか?」
驚く絢子に、洋蔵は森であったことを話す。絢子にとっては、照屋家がそのような暗殺を行っていたことも初耳だった。
「父上!」
「言いたいことはわかるが、社会というのはそういうものでな。お前も学校程度のこととはいえ、委員長などやっていれば少しはわかるだろう。それに、物事を良い方向に変えたいのならば、力も必要ということ

だ。そして力というのは汚く見えることの方が多い」
「……はい」
理屈としては絢子にも理解は出来ている。うなずく他はない。
そこで洋蔵が念話機の映像を絢子に見せた。
「彼は学院に立てこもった。お前の通う学校がこうなってしまった」
そこに映し出された魔城と化した学院に絢子は絶句する。
「それでは父上、この戦いは……」
「彼を倒すためのものだ。指揮は照屋栄子が執るということだ」
「指揮を執るのは当主ではないのですか？」
「紗伊阿九斗が敬三を殺害した」
「……まさか！」
阿九斗の性格を知っている絢子は即座に否定するが、洋蔵は首を横に振った。
「彼は強かった。どういういきさつかはわからないが、敬三を殺すこともできただろう」
「そういうことではなく、彼は……」
「私情は無用だ。承伏できないところもあろうが、我々はスハラ信者であり、そのように行動しなければならん。照屋家が気に入らなかろうと、阿九斗君が興味深い人物であろうと、考えることはひとつ。家族を守るために戦う」

洋蔵の言葉に絢子は何も言えない。

「そして、戦うとなれば、相手の強さを喜ばなくてはならない。阿九斗君は強かった。私も現時点では敵わないだろう。だから、これを抜くのだ」

そう洋蔵は言って、先ほどから持っている刀を示した。

「それが伝家の宝刀、ソハヤノツルギ……」

絢子がつぶやく。

反りの強い太刀が飾りのない鞘に収まっている。

「服部家がスハラ神に帰依した際、授けられたものだと言われている。しかし……」

しかし、に続く言葉は絢子も知っていた。歴代でも鞘から抜いた者がいないのである。

「それを父上は抜くと？」

「そうしなければ、彼と戦うことはできん。この太刀は体内のマナを増幅してくれるもの。使用者の能力は何倍にもなる」

ソハヤノツルギは神と同時に作られた太刀である。マナによりどのようなことができるのかの限界を試した器具であるとの噂だ。各宗派にそのような魔術道具は存在するとの話だが、多くの場合隠されているか、この太刀のように使用できないでいるのだ。

洋蔵が握った手に力を込めた。鞘から太刀を抜き放とうというのである。しかし、その鞘は太刀と一体化してしまったかのように抜けない。

「それならば、なぜ抜けないのでしょうかね？」
　不意に倉の戸口で声がした。洋蔵と絢子が振り返る。
「母上」
「お祖母様」
　立っていたのは洋蔵の母、絢子の祖母にあたる老婆である。温厚そうな表情で小柄だが、足音もなく二人の背後に立ってしまうあたりはただ者でない。
「抜けないのは私が未熟であるか、私に資格がないからかと」
　洋蔵が答えると、祖母は、ほほほ、と静かに笑った。
「昔からあなたは抜けたところがありましたね。善良なのに自分を高めることにしか興味がない。その視野の狭さのせいで簡単な真理に気づかない」
　痛切な言葉なのだが、洋蔵は頭が上がらない。
「真理……ですか」
「そうですよ。マナが精神を反映し、神が人の行いを見ているからといって、自分の内面だけを見つめてしまっては見えないこともあります。太刀はその作られた目的に沿った行動をしないから抜けないだけです。深遠な意味があるはずがないでしょう？」
　祖母は洋蔵からひょいとソハヤノツルギを取り上げた。

「大体、あなたは強い相手がいれば喧嘩したがって、ぽんぽんぽんぽん斬り殺しちゃって。本当に悪い癖です。戦うのが仕事ということをはき違えてやいませんかね？　そんな人が人斬り包丁の親玉なんて持っていてはいけません。これは絢子に渡します」

祖母は取り上げたソハヤノツルギを絢子に与えた。絢子は驚き、それを返そうとしたが、それでも祖母は「いいのよ」と取り合わず、洋蔵に説教を続ける。

「そもそも、洋蔵さん。あなた、この戦の指揮権を照屋さんのところの娘に持って行かれているじゃありませんか。あなたが強くなることとは、照屋家の世襲支配に花を添えることにしかなりませんよ。もちろんお家のため、神のため従わなくてはいけないこともわかりますが、あなたは死ぬかもしれないほど強い相手と戦えるからそうしているにすぎません。そういうことが大人になってもわからないのだから」

洋蔵は「支度がありますので」と、まだ続きそうな説教を避けるための言い訳をして逃げ出した。

祖母はそれを黙って見送ったが、洋蔵が倉から出て行くと、チャーミングな顔で絢子に笑いかける。

「あなたが荷物を忘れたときに駅で出会った子でしょう？　色々あったみたいだけど、好きになさいな。どうせ責任は洋蔵がとりますよ」

「でも、お祖母様……」

「気にしない、気にしない。大体、最初に出会ったときの感覚が当たってるものですよ」

絢子はその言葉にうまく答えられなかった。ただ、どういうわけか顔が赤くなるのを感じていた。

「は……はい」

うなずいて、伝家の宝刀ソハヤノツルギを見つめる絢子だったが、もちろんこれをどう使えばいいのかわからない。
「これ、抜(ぬ)けないのですよね？」
「そうね。神を信用するもしないも勝手だけれど、神様なんて実は人の気持ちを汲(く)み取(と)ってくれるわけじゃありませんからね。刀も同じ。真剣(しんけん)に向かい合っても無駄(むだ)なのよ。多分、スハラ神のして欲しいことをしようとした時にだけ抜けるのよ」
「そ、そんな簡単なことなんですか？」
「そうですよ。そしてね、抜いたら好きにすればいいのよ。内省するより、信仰するより、生きて自分のことを気遣ってくれる人間のことを信用しないとね」
「お祖母様……」
「だから、あなたが何を決断しようと、私は気にしませんからね」
祖母は微笑(ほほえ)んだ。
「わかりました」
絢子はうなずいて、ソハヤノツルギを腰(こし)に差した。

○



『コンスタン魔術学院』の敷地に最初に到着したのは、照屋家の指揮する甲賀忍軍である。忍者とはいえ、特殊部隊でない者たちは一般の兵士である。主装備は銃剣装備の小銃と太刀。それが五百人揃っている。

　魔術を使う戦にあたり、銃器はそれほど意味をなさないため、強力な兵は銃を持たない場合が多い。一般の兵は魔術が苦手であるため小銃を持つが、突撃兵などは鎧武者として長槍、長刀、戦斧など思い思いの得意得物を携えている。これらの強者が百名。

　これが甲賀のほぼすべての戦力で、規模としては大隊をなしている。それらを指揮する照屋栄子は、中隊長を集めて陣を築く指示を出していた。

　その栄子の姿はカメラがとらえている。服部家や他の軍団、騎士団よりも早くマスコミが到着しており、許可を得て放送を行っているのだ。深夜だが、特番として魔王の城と化した校舎の様子は帝都全体に放送されている。

　当然ながら魔王は人類共通の敵として報道されている。そもそも、この戦いにおける敵のほとんどは魔獣になる見込みだ。人間相手と違い、放送したとしても倫理的な問題はあまり起こりそうもなかった。エンターテイメントとして国民は見ているに違いない。

　人気取りという栄子の目的は最大限うまく行っている。本性を知らなければ、栄子は凛として物怖じしない美少女に見える。さらに偶然も味方した。カメラが映しているところに服部家の三人が到着したの

である。
　陣を張っているテントにやってきた洋蔵、絢子、ゆう子(こ)の三人は被写体(ひしゃたい)としては完璧(かんぺき)だった。豪快(ごうかい)さのある洋蔵と、二人の美少女。おまけに片方は有名アイドルである。
　洋蔵はカメラが来ていることは予測していなかった。これでは栄子の人気取りに付き合わされることになってしまう。それでもこの場は不本意ながら栄子に従わざるを得ない。
　絢子もゆう子もそれを気に入らずにいたが、表情に出すわけにはいかなかった。絢子は真面目一辺倒(いっぺんとう)の表情を崩(くず)さずにいることで顔を維持(いじ)していたが、ゆう子は慣れたものでカメラに愛想を振りまくことまでやってのけていた。
　あれ以降、ゆう子の体調は回復していた。魔獣の影響(えいきょう)が消えたわけではない。戦装束で隠してはいるが、首筋に浮(う)かんだ黒い血管は増えるばかりだった。それでも、ゆう子は魔王と戦うと聞いてから元気を回復していた。いや、以前よりも元気になっていたほどだ。
　洋蔵は儀礼的(ぎれいてき)な挨拶(あいさつ)を栄子に行う。
「服部家指揮、伊賀軍団、到着いたしました」
　洋蔵の挨拶を受け入れた栄子は余裕(よゆう)の表情でうなずく。
「服部家には我が指揮下に入り存分に働いて欲しい」
　と、栄子は絢子の持つ太刀を目にとめた。スハラ神の神器とされる太刀であり、それを照屋家が保持していないことを前々から苦々しく思っていたのである。栄子は内心でほくそ笑んだ。もしかしたら、それを

手に入れる機会が訪れたのかもしれない。
「絢子とゆう子の中隊には一番槍を務めてもらう」
　服部家も大隊規模の六百名を連れてきている。しかし、こちらは忍者そのものの働きをする特殊な者が多く、野戦は得意とはしていない。一番槍となると、危険も大きい。さらにテレビを前にして断るわけにもいかない。これを機に服部家の全滅までも狙える。そういう腹だった。
　洋蔵も絢子もその意図に気づいていた。それでもなんとか抵抗すべく、洋蔵は口を開こうとする。理由はなんとでもなるだろう。が、それを遮ってゆう子が大声を出した。
「わかったよ！　先頭で魔獣を全部倒しちゃうからね！　他の人の分なんか残してあげないんだから！」
　ゆう子がいくら奔放とはいえ、そのようなことを口にする性格ではなかったはずだ。洋蔵も絢子も驚いてゆう子を見る。が、彼女の行動を止めることはできなかった。テレビ慣れという意味では、誰もゆう子には勝てなかった。ゆう子自身が先陣を切ることを勝手に視聴者に約束し、空涙まで流しつつ魔獣退治の決意を告げたのである。
　服部家は後に引けなくなり、そのまま作戦会議に参加せざるを得なくなった。
　その頃、帝国軍の飛行空母が到着するとの報告が入った。一個旅団二千五百名を擁する移動要塞である。自身でエネルギーを作り出せるエンジンを持ち、マナそのものを散布することもできる。マナを使用できる環境を周囲に生み出すことができる以上、魔術戦にあっては最強の存在である。

折りから夜が明け、暁（あかつき）に輝く『玄鶴（げんかく）』の威容（いよう）は言い表せぬ壮大（そうだい）さがあった。今は魔城となった『コンスタン魔術学院』校舎と同じだけの大きさであり、それが一キロほどの距離（きょり）をおいただけで相対することとなった。

これで三千七百名が栄子の指揮下に入ったことになる。さらに、この後、騎士団も合流することになっている。軽い気持ちでこの戦いをテレビの前で見守ろうとしていた人々も、ただならぬ事態になったことを予感しないわけにはいかなかった。

○

上空で推移を見守っていたヒロシも、ゆう子たち服部家の参戦と、『玄鶴』の到着には驚かざるを得なかった。阿九斗の内心についてはわからないものの、事件の発端（ほったん）を知っている身としては、この手に余る事態には笑うしかない。

――どうしたらいいんだろう……。

途方（とほう）に暮れる一方、心にひっかかることもある。スーツのバイザーは様々な情報が受信できる。当然、現在放送されている映像も受信しており、そこで目にしたゆう子の様子が違っていたことが気になっていた。テレビ用の顔も生の顔も知っているヒロシである。彼にはゆう子から感じる禍々（まがまが）しさのようなものが見て取れていた。

──彼女のために出来ることがあるんだろうか……。あれだけの数の魔獣と戦う？　あんな大きさの空母と戦う？　まさか……。

しかし、事態の大きさを思うと、これだけのことを招いてしまった阿九斗への怒りのような感情も巻き起こってくる。

──そりゃあ自分はあの人みたいに強くなりたかった。でも、これは、さすがに違う。あの人は何かを私利私欲のために放棄してしまったんじゃないのか？

ヒロシは思う。

──そういえば、このスーツは対魔術戦闘用に作られたはず。

スーツの性能をバイザーに映すようにスーツに指示する。スーツはその性能を表示した。マナキャンセラーの部分を詳しく見る。そこにあった性能は、驚くべきものだった。周囲数百メートルのマナを無効にすることが可能なのだ。

──これを使えば……。もしかしたら、あのどちらにも勝てる……？

ヒロシは魔獣の固まりとなった城と、空母の双方を見渡した。

──それなら、俺に出来ること、俺のするべきことはひとつしかない。

そう決意して、ヒロシは降下を開始した。絢子とゆう子の中隊はすでに配置を完了していた。その中隊の陣の真ん中に降りていったのである。

最初は接近に緊張を見せた完全武装の忍者たちだったが、ブレイブがゆう子を守った一件は知らない者はいない。それに一般に知られる異名は〝魔獣殺しのブレイブ〟なのである。その姿を認めるや、たちまち緊迫のどよめきは歓声に変わった。

報道番組の中継もブレイブの姿をとらえていた。ヒロシも自分のバイザーで自らの映像を確認する。そんな映像を見るのはこそばゆい感じがした。

が、降り立ったヒロシを一番に歓迎したのは、忍者でも報道機関でもなく、ゆう子だった。真っ先に駆けつけて、ヒロシの首にとびつく。

「来てくれたんだね！　そうだよね、憎い魔獣を一緒に殺そうね！」

ゆう子は歓喜の表情で言った。

ヒロシはゆう子の異常を痛いほど感じ取っていた。

「魔獣を殺すかどうかはともかく、君を守るよ」

ヒロシは小声で言った。カメラはアイドル星野ゆりと魔獣殺しのブレイブという二大有名人の邂逅を撮影しているが、声は聞こえていないはずだ。

と、ゆう子も小声で応じた。

「殺してくれなきゃ嫌だよ。いっぱい、いっぱい殺してよ。魔獣は嫌いなんだもん」

屈託なくゆう子は笑った。そのアイドルそのものの表情が、どういうわけかヒロシにはとても恐ろしく感じられた。

マナキャンセラーを使って周辺のマナを機能させなくしているから、二人の会話を聞いている者はいないが、それでも絢子や周囲の目が気になる。絢子はうさんくさそうにこちらを見ているだけだが、ゆう子の異常には気づいているのだろうか？

ゆう子の「いっぱい殺して」との言葉にヒロシは答えられなかった。カメラマンが寄ってきたのを幸い、それから逃れるべく上空へ舞い上がった。手を振って「戦いがはじまったら」とだけ告げた。

——戦いがはじまったら？　戦いがはじまったらどうするかって？

ヒロシは自分の言葉が可笑しくなって、自嘲的な笑いを漏らしてしまう。まだ何をすべきか迷いがあるのだ。ゆう子を守ると決めたのに。

少し力を持ったくらいで、自分の行動が周囲に影響を与えてしまうのだということにヒロシは今更のように気づいた。そして、それは阿九斗も同じ立場に立たされてしまっているだけなのか、とも思ったが、すぐに首を振ってその考えを追い出した。あの人は、けーなのためにすべて犠牲にするつもりなのだ。その証拠に……。

——……間接的にとはいえ、ゆう子ちゃんをこんなにしておきながら、あの人は、それを放置して逃げたじゃあないか。

○

栄子は配置が終わり、作戦指示を出すに到る直前で、不意に後ろから呼び止められた。

「どーなんすかね、この配置じゃ勝利条件がわからんでしょ？　あ、まさか殲滅戦？　兵士のノリが悪くなるからそりゃ無理」

指揮官である自分にそのような言葉がかけられたことに栄子は驚く。カメラの目もあるはずなので、そのような言葉を許すわけにはいかない。

「相手は感情のない魔獣だ。殲滅する以外にない。それは兵士も承知の上で作戦に……」

栄子は振り返りながら言ったが、そこにいたのが軍装でない平服の男だったことに驚いて言葉を止めた。それに周囲からマスコミ関係者がいなくなっている。

「何者だ？」

「内閣魔術情報調査室です。カメラには一時お引き取り願ったんで、ちょっとヤバイ話も可能ですよ。なんつって」

軽い口調で男は笑う。

男の所属を聞いて、栄子は警戒を緩める。

「騎士団を連れてきたのかい？」

内閣魔術情報調査室は、内閣府の組織で、要するに諜報（ちょうほう）機関である。常時八人がメンバーとして登録されており、そのため略称（りゃくしょう）とあわせて『CIMO８（サイモエイト）』と呼ばれることが多いが、その内実についてはよく知られてはいない。栄子も望一郎（ぼういちろう）の部下である、という程度しか知らない。彼（かれ）らは軍にはほとんど影響力（えいきょうりょく）はないが、騎士団には影響力を持っている。

「いや、一般人（いっぱんじん）が入らないように警備はしていますがね。そっちは我々の仕事じゃないんで。我々は我々だけで来ましたよ」

「じゃあ、何だ？　まさか、この場を指揮させろと言うんじゃないだろうね？」

「いやいや。そこは警戒しなくても。ただ、我々は勝手に行動する権利が欲しいだけです」

「リーダーが中にいるからか？」

「そういうことです。なに、軍から間違（まちが）って後ろから刺（さ）されても文句は言いません。ただ、ちょっと自由に動く権利が欲しいだけです」

栄子はその申し出に少し迷ったが、要はこの作戦、魔獣を退治できればいいのである。彼らがどう暴れたところで大丈夫（だいじょうぶ）だろう。

「いいだろう。それなら……」

栄子は言いかけたが、その言葉が終わらぬうちに、その男の姿は消えていた。

先ほどの自分の決定に、栄子は不安を感じたが、作戦の決行時間が迫（せま）っていたので頭を切（き）り換（か）える。マスコミが戻（もど）ってきたのを見計らって、先だって発案した作戦名を告げる。

「本日、〇七〇〇より、破城槌作戦を開始する」

○

「神を殺す、だと？」
　望一郎は、阿九斗のその決意に驚きの表情を見せていた。笑い飛ばすこともできなかった。その決意を口にしたとたん、阿九斗の力が増大したのがわかったからだ。
「そんなことをしたら、すべて終わってしまうぞ。お前自身も無事では済むまい。そもそも、もう人類は神に頼り切っているんだ。身体の一部、脳の一部はすでにマナ制御となっているんだぞ」
「解決策はあるさ。誰かが勝手に人類の行く末を決めるよりもその方がいい」
　阿九斗は断言した。少しも迷いのない目をしている。
「それならば、完全に交渉の余地はないな」
　望一郎はそう言って、外の栄子と連絡を取ろうとするが、マナに障害があるらしく、通信ができない。
「校舎全体をシールドしたのか」
「マナを使用した転送も無理だ」
　阿九斗が答える。
　この時点で、時間は深夜二時。夜明けはまだ遠い。

「校舎から私が彼女を連れて出られないようにしたのだろうが、そちらも逃げ道を無くしていることには気づいているか?」

「それは仕方ないさ。ただ、僕はあなたを倒すつもりでいるからね。問題ない」

「その自信、どこまで続くかな。ちょっとは強くなったようだが、それでもまだ武器さえあればなんとかなる程度に見える。マナとは結局は極小の機械。そのエネルギーは発電所から大地に直接打ち込まれることで供給されている。いわゆる〝世界システム〟だ」

「なぜ、今になって講義を受けなくちゃならないんだ?」

「そんな国家や神にぶら下がった力を使っている者が、どうして神を滅ぼすなどと言えるのか? と聞いているのさ。それに、そんなシステムだから、君がどれだけ強くなろうとも、君の力には限界がある」

望一郎が剣を収めて手を上に伸ばした。そこに転送円のようなものが出現する。マナによる転送は魔獣たちによりシールドされた内側では使えないはずだ。ということは、その転送は魔術的な、いわゆるマナ文明によるものではないことになる。

望一郎は、その円の中から、一振りの剣を抜き出した。その剣は身長ほどもある巨大なものだった。握りは巨大な刃そのものの陰にほとんど隠れており、重量バランスを保つためのウェイトと補助ブースターまでが取り付けられている。

「無銘だが、武器に愛着を持つ習慣がなくてね」

動作テストの意味もあるのか、望一郎は軽く一振りをくれる。

ドン、と周囲の空気が爆発する。そのサイズの剣でも音速を超える攻撃を繰り出せるということだった。

その攻撃を喰らっては、阿九斗もひとたまりもないと思われた。

「さて」

望一郎は水平に剣を構えた。

距離を詰めてくる。

阿九斗の表情に緊張が走る。

一切の容赦もなく、躊躇もせず、望一郎は大剣の一撃を繰り出す。

「あーちゃん」

「阿九斗様！」

けーなと不二子が叫びをあげた。

しかし、その叫びはソニックブームと金属同士がぶつかり合う打撃音にかき消された。

吹き飛んだ阿九斗が壁に叩きつけられる。壁を構成する魔獣が阿九斗を受け止めるクッションとなったが、阿九斗の腹部と、そこをガードするようにクロスさせた腕に印されている横一直線の傷からは肉が焦げて煙があがっている。打撃のすさまじさは誰の目にも明らかだった。

「あーちゃん！」

けーなが動こうとするが、不二子がその腕を掴んで止めた。

「駄目ですわ」
「でも……！」
けーなは涙を流しながら抵抗するが、不二子は首を横に振る。
「あなたが行けば、阿九斗様は動かずに抵抗してしまう。敵わないのなら意地を張らずに逃げて作戦を立てるべきです。わたくしたちがするべきことは阿九斗様を連れて逃げることですわ」
不二子は言うと、言った通りのことを実行する。壁にしていた魔獣を操ると、壁から生えた腕を使って阿九斗の身体を運ぶ。けーなと共にケルベロスの背中に乗せると、ラウンジの階段を下って駆け出す。
「でも、逃げてどうするの？　あーちゃんは……」
けーなが聞くと、うっとうしそうに不二子は顔をしかめた。
「まったく、阿九斗様もあなたもずるさが足りませんわ。逃げれば阿九斗様は回復する時間ができますし、第一、阿九斗様にも武器があることをお忘れ？」
「武器……？」
「ピーターハウゼンですわ。地下で阿九斗様を待ってますの」
不二子は言い、背後を振り返る。そしてその顔を硬直させた。かなりの速度を出しているケルベロスだが、その速度よりも早く望一郎が突進してくる。望一郎は大剣を使って飛んでいた。空中をすべるように接近してくる。
「追いつかれる……！」

不二子は恐怖の声をあげた。
しかし、今まさにケルベロスの尻尾に追いつこうとしていた望一郎の前に、ひょい、と人影が出現する。
「う！」
望一郎は突進を止めた。人影は横合いの通路から歩いて出てきたのだ。まるで老人が不注意で車道に飛び出してしまったかのようだった。
そして、飛び出してきたのは、本当に老人だった。
しかし、望一郎を遮る意志が明らかにその歩調からは感じられた。
「こりゃあ、大変なことになったもんじゃなぁ……」
そう言ったのは学長である。長い白髪と髭、外見はもはや古木と見分けのつかなくなった老人が、さして大事でもないという口調で言い、望一郎を見ている。
「老人……邪魔をするつもりですか？」
望一郎は学長の前に立つ。
「邪魔をするつもりかというなら、その通りじゃなぁ。ちょっと思い出したもんでな。百年くらい前のことを」
学長が世間話のように言い、不二子たちを振り返った。
「行きなさい。ここはなんとかしておくから」
「しかし……！」

不二子が戸惑う。学長は見た目通り老人である。望一郎相手にどうこうできるとも思えない。その不二子の表情から学長は彼女の疑念を察した。

「いやいや。心配には及ばんよ。なんとかなる」

　学長が不二子に行け、と手を振る。

「わしはまだあと数百年は生きるつもりじゃし、そのための力ぐらい普段から蓄えておるんじゃよ」

　その宣言と同時に、学長の身体が変形をはじめた。

　それはまさに変形、であった。変化は腕から起こった。一気に筋肉が盛り上がり、太さが五倍ほどになる。続いて肩、胸、すべての筋肉が巨大に膨れあがったのである。

「が、学長……」

　不二子は絶句した。

　そこにいたのは、顔こそ老人だが、堂々たる体躯の大男だったからである。

「普段は省エネでいることが長生きのコツなんじゃよ」

　学長はそう言い、軽く身体に力を加えた。伸びきっていた服の上半身部分が内側からの筋肉の圧力ではじけ飛ぶ。

「さぁ。百年前を思い出そうじゃないかね。百年前とはちょっと敵味方が違うが」

　学長は望一郎に向き直った。

　望一郎は不快そうに顔をゆがめた。

「あなたは百年前から変節したということか？」

「そういうことじゃね。柔軟（じゅうなん）に時代を読んで変節するのも長生きのコツじゃよ」

「そういうことなら、容赦はしない」

望一郎が大剣を構え直した。

「お前さんはそういうところが変わらない。それだからうまく歳（とし）をとれないんじゃよ」

学長はカラカラと笑った。

○

不二子は地下へと向かった。



「あれなら学長に任せても安心ですわね」
「ごはんいっぱい食べてるのかなぁ」
　さすがに学長の変化に不二子とけーなも驚くが、ともかく頼もしいことには違いない。稼いでくれている時間を使って地下へと移動する。
　が、地下の宮殿の入り口で、待っていたのはピーターハウゼンではなく、生徒会長であるリリィ白石だった。小粋な帽子を目深に被り、腕組みをしてケルベロスを見上げている。
「ボクらの学校をどうするつもりだ？」
　凶暴な、しかし、どこか面白そうにリリィは言った。
　その声に阿九斗が目を覚ました。
「学校に迷惑はかけたくなかった。実際、この後、すぐに出て行きますよ」
「出て行く？」
　リリィはマナスクリーンを出して、阿九斗の目の前に出して見せた。外の中継が映し出されている。軍隊が展開し、空母『玄鶴』までもがすぐ近くに浮いている光景が見える。
「外はこんなだよ。兵士はざっと四千くらいか」
　リリィが解説すると、阿九斗は少し顔をしかめた。
「それはまずい。相手に少し怪我人を出してしまいそうだな。千人くらいなら、相手も無傷で済んだろうに」

「あのなぁ……」
リリィは呆(あき)れる。ケルベロスから降りてきた阿九斗の前で腕を組む。
「ボクは照屋敬三が騒(さわ)ぎを起こしてから、事態を監視(かんし)していた。だから事情は知っている。学長からも話を聞いたしね。それで君がどう動くか待っていた」
阿九斗はそれを聞いてうなずき、静かに聞いた。
「それで、どうされます？　生徒会長。あなたに迷惑はかけたくない」
「ボクは自分のすることくらい自分で決めるさ。ボクのすることは決まっている。照屋栄子の告発。あとのことは知らん。もっとも、それをやろうとすれば、四千の兵士相手と戦争だがな。ははは」
リリィは嬉(うれ)しそうに笑った。
「生徒会長の側の戦力は？」
不二子が聞いた。リリィはうなずく。
「生徒会だよ。三役が来ているから三人」
「それだけですの？」
「そんなにいるのか、って驚くべきところだろう」
リリィは面倒(めんどう)そうに言ってから、奥(おく)に入れ、と阿九斗に手を動かした。
「あの龍(りゅう)が待ってる。行け。ただしひとつ言っておく。ボクとキミの考えは違う。キミが現体制のすべてを破壊(はかい)するつもりなら、ボクはキミを止める」

「わかっています」
阿九斗はリリィの脇（わき）をすり抜（ぬ）けて奥へ入った。
「あーちゃん！」
けーなが心配そうに声をあげた。
阿九斗は肩越（かたご）しに振り返った。
「大丈夫（だいじょうぶ）。安全なところで待っていて。すぐに帰ってくるから」
阿九斗は言い、歩を進めた。
地下宮殿の奥では、黒い龍がその身体を横たえていた。阿九斗を認めると、百年分の感慨（かんがい）を持った声で咆（ほ）えた。
「待っていた！　この時を待っていたぞ、主よ！」
「待たせたつもりはないんだ」
「待ったさ！　さぁ、主よ、本当の力を取（と）り戻してくれ！　共に空を駆け、敵を駆逐（くちく）しようじゃあないか！」
「わかっているさ。決意したんだ。決意が僕の力を引き出してくれる」
阿九斗はピーターハウゼンの横に回り込んだ。龍の背中には鞍（くら）がつけられている。その鞍を軽く叩いて、阿九斗は宣言した。
「改めて宣言しよう。僕は神を殺す」

阿九斗はその瞬間、魔王になった。
ピーターハウゼンの歓喜の叫び声が朗々と地下に木霊した。その振動は校舎全体を震わせはじめた。
「行こう、主よ！　我らが揃えば、この先、阻む者は何もない！」
ピーターハウゼンが天井を見上げ、その顎を開いた。彼の体内で生成される鋼鉄の杭がその口から撃ち出される。高速回転する螺旋を刻まれた鋼鉄の杭は、天井の分厚い岩盤を撃ち抜き、凄まじい音とともに地上へと続く一本の通路を作り出した。

○

地上で待機していた兵士たちは、地下からの咆哮に何事かと顔を見合わせていた。が、その直後、彼らの眼前に巨大な杭が土砂を巻き上げつつ下から出現したことで、驚きの叫びをあげることになった。
回転する杭は地下の岩盤を突き破っても勢いは衰えず、空高く舞い上がる。そして兵士たちの隊列に向かって降下をはじめた。
「回避しろ！」
絶叫が尾を引く。落下点の兵士たちがばらばらになって逃げ去る。轟音と共に杭は地面に落下。土煙をあげて周囲の視界を奪う。

各中隊長は声を張り上げて動揺を防がなければならなくなった。
「隊列を戻せ！　怯むな！　敵は所詮は魔獣だ！」
しかし、その中隊長たちの言葉も、彼ら自身の絶句により即座に勢いを失う。
杭の撃ち出された穴から、黒い巨大な羽根を持つものが舞い上がったからだ。
その影は兵士たちを覆い、彼らの心胆を寒からしめた。
まさに伝説の龍が彼らのすぐ目の前を飛んでいた。
それは彼らにとって恐怖そのものが形となっていたかのようだった。
黒い龍に騎乗する漆黒の男。それを見た誰もが、震えながらこうつぶやいていた。
「魔王だ……。魔王が来たんだ……」

あとがき

毎度ありがとうございます。水城正太郎です。最近は野球だＦ１だとスポーツ観戦しかしておりません。もちろん不健康にもＴＶで。皆様は冬でも外で遊ぶのがいいと思います。そういえば、昔、私は雪のおかげで家から数十メートルの墓地で遭難しかけたことがあります。死んでいたら墓まで直行です。それでも外で遊ぶのが男です。

四巻目をお送りします。読者の皆様のおかげで、なんと今回、初の前後編をお送りできることになりました。自分でもはじめての前後編。まさに今現在、続きを張り切って書いております。はじめて手に取られた方も、毎度ありがとうございますの方も、次巻をよろしくお願いいたします。

そして、時期がずれて手に取られた方は申し訳ないのですが、二〇〇八年十二月現在、秋田書店様の『チャンピオンＲＥＤ』誌でコミック連載中です。執筆は伊藤宗一さん本人です。オリジナル展開に突入しておりますので、小説を既読の方も是非に。

さらに前巻でおしらせしたコミック以外の展開ということで、ＣＤドラマ化が決定です。こちらは来年の早いうちに発売ということになるはずです。

主演は小野大輔さんと中原麻衣さん。その他のキャストなど、いちばん早い情報はホームページ(http://www.hobbyjapan.co.jp/hjbunko/)かと思いますので、チェックしてくださいませ。私も楽しみに待っている状態です。

んで、無駄話なのですが、最近買ったコードレスのヘッドホン、なぜか右側だけ音が聞こえてこず、ノイズのみでした。店に行ってヘッドホンを交換。店員は大丈夫だと言っていたものの、帰って確認してみると、やっぱりノイズ。コードレスタイプなので、原因が赤外線送信装置側にあった模様。もう店に行くのも面倒になってしまって、このやろう、と思い切り装置を殴りつけたら直りました。いったい、いつの時代の機械なんだ……。しかも、その後も調子が悪くなる度に殴ると直るという……。まぁ、さらにその後には完全に壊れましたが……。

ええと、作品の話。

毎度、説明不要の話ではありますが、ちと今回は以前の話を知っておいた方が面白い部分もあるかと思います。二巻で出てきて、三巻で出てこなかったキャラクターもおりますので、ちょいとチェックしていただけると、「ああ、こんな奴だったなぁ」とおわかりいただけるかと。そんなわけで、今回が初見の方も、前の巻を手に取って頂けると嬉しいところです。毎巻完結の話もいいけれど、続けることができるシリーズは

そういうところも楽しみかなぁ、と書き手側としても思うところがあります。作者もちょい役かと思っていたキャラクターが後で大抜擢、みたいな感覚はシリーズを書いている際の喜びのひとつですねぇ。

そして、このように続刊を出せるのは皆様のおかげであり、心からの謝辞を。

イラストの伊藤宗一さん。コミック版、毎月読ませていただいております。その回ごとに変化、進化していく様を目に焼き付けております。また次の話が読めると思うと嬉しくなります。

担当のO橋さん。今回もお疲れ様＋でした。毎度ご迷惑をおかけいたしております。まぁ、そろそろ未熟のせいにはできない年齢になってまいりましたが、今後はきっと執筆が早くなる方向に進化すると信じております。個人的には三十過ぎようが、四十過ぎようが質問で「将来の夢」を聞かれたならば答えられなければならん、と強く思っているのですが、それはそれでいつまでも未完という言い訳にしてはいかんなぁ、と。

そして様々な分野の関係者の皆様にも感謝を。いろいろお世話になっております。

さて、なんかクライマックスみたいになっておりますが、実は、五巻の後もまだまだ続くのです。ご安心を。しばらくは一緒に楽しめそうですぜ！

◆ご意見、ご感想をお寄せください……ファンレターのあて先◆
〒151―0053
東京都渋谷区代々木2―15―8
(株)ホビージャパン　HJ文庫編集部
水城正太郎先生／伊藤宗一先生

PROFILE

水城正太郎 みずきしょうたろう

『東京タブロイド』シリーズ（富士見ミステリー文庫）、『せんすいかん』シリーズ（ＨＪ文庫）。
『ホビー・データ』を経て、現在ライター集団『A－TEAM』主催。
イエーイ、師走トオル見てる？　実は賭けに負けたので、彼の著作を応援することになりました。富士見ファンタジア文庫で『火の国、風の国物語』シリーズは絶賛発売中ですよ！　あわせて読んでね。
ちなみに本書はＨＪ文庫で間違いありません。

伊藤宗一 いとうそういち

兵庫県在住のイラストレーター兼漫画家。
一般向けから成年向けまで幅広く活動中。
好物は、熱血・筋肉・萌え・エロ・爺。
＜一言＞
水城先生との対談での夢が叶いました。ジジイの裸、ごちそうさまでした。

HJ文庫

いちばんうしろの大魔王 ACT 4

2008年12月1日　初版発行

著者―― 水城正太郎

カバーイラスト―― 伊藤宗一　　装丁―― 西村 大

発行者―松下大介
発行所―株式会社ホビージャパン　〒151-0053　東京都渋谷区代々木2-15-8